

菅江真澄資料センター

# 真 澄 研 究

24号

---

講演記録

男鹿に生きるナマハゲたち

～菅江真澄の記録と最近のナマハゲ事情～…天 野 荘 平 1

資料紹介

内田武志・未定稿「真澄翁交遊録 鳥屋長秋」…………… 27

鳥屋長秋遺墨資料の翻刻……………松 山 修 47

現代語訳《しのはぐさ》……………嗟 峨 彩 子 61

---

令和2年3月

秋田県立博物館

## 男鹿に生きるナマハゲたち〜菅江真澄の記録と最近のナマハゲ事情〜

男鹿市菅江真澄研究会会長 天野 莊 平



講演風景

当館講堂、令和元年11月10日（日）

### はじめに

皆さん、こんにちは。天野莊平といます。きょうは今も男鹿に生きつづけるナマハゲのこと、そして、もちろん菅江真澄が書き残したナマハゲの記録について、パワーポイントを見てもらいながらお話ししたいと思います。

私は小さい頃ナマハゲに追いかけられるというか、怖い目

にあつた一人です。ただ怖いというだけで、ナマハゲとは何なのか、なぜ来るのかわからない、そういう幼少期でした。私は脇本の本村出身です。小さい頃、ナマハゲは一晚に十組くらい来ました。脇本の本村、御札町という町内ですけれども、町内に二、三のグループがあつて、両隣の町内でもいるんです。それで順番に回つて来るんですけど、一晚に十組くらい来るんです。隣家にナマハゲの声がすると「あ、次は我が家だな」と覚悟するんです。ところが、反対の隣家からもナマハゲの声がして、もう恐怖が倍増した記憶があります。そうこうしているうちに、両隣のナマハゲではなく、別のナマハゲがやつてきて、そしてナマハゲが帰るか帰らないうちに、隣にいたナマハゲがやつてきて、もう祭りのようなというより、恐怖の仮面集合場所でした。そんな感じで、一晚に十組くらい来られると、もう逃げるのも何もないですね。ナマハゲというのは、そういうものだと思います。私が二十代の頃までは。

## ナマハゲを見る、知る

ところが社会人になって、ナマハゲのことが気になり、ほかの地区の知人や、同じ年代の連中に聞いたら、「いや、ナマハゲって一晩に一組だよ」と。「なんで十組も来るの。おめほ、おかしんでねえが」と、こんなことを言われました。ちよつとしたカルチャーショックでした。自分が知っているナマハゲというのは、自分達の地区のナマハゲと、他の地区とでは何が違うんだろう、そんな疑問がわいてきました。それをずーっと引きずってきたんです。ストレスが溜まるばかりでした。二十年以上前からできるだけ他の地区のナマハゲを見たり、聞いたりしてきました。

ナマハゲというのは、十二月三十一日、一晩だけなんです。そうすると、一年に一ヶ所しか見られない。ここ最近十年くらいは、毎年どこかに行ってるんですが、なかなか男鹿のナマハゲの全体像はまだ見えてこない、語れないといえますか。それでもこうやって、機会があればしゃべってきているんです。まだ半分も見えていないですね。何か所もありますから。

もつと知りたいと思ひ、五、六年くらい前に男鹿市の教育委員会と男鹿市菅江真澄研究会が相談して、悉皆調査をきちんとしてもらった方がいいのではないかとということで、合同調査を

し、報告書ができました。それが『男鹿のナマハゲ』行事実施状況調査報告書です。この報告書を見て、やはり様々な地区のナマハゲについて知るといふことは非常に重要なことだと改めて感じました。

それではこちらをご覧ください。今、画面に映している上が菅江真澄が描いたナマハゲですね。真ん中の赤い鬼面はわかるんですけども、左はひよつとこお面ですよ。このひよつとこのお面を使用している地区は現在ありません。左の下がなまはげ柴灯まつりの時の使われているお面です。他の二つはまた別のところのものであります。これだけでも色々なお面があることがわかります。実際にはどうなのかということをお話していきたいと思ひます。

## ユネスコの無形文化遺産登録

去年の十一月二十九日、実は二十八日から、ナマハゲがユネスコの無形文化遺産登録になるということで、テレビの取材などマスコミ関係者が男鹿の市役所に来ていました。その時、二十八日に男鹿市役所のホールではパブリックビューイングに多くの市民が駆けつけていたんです。夜遅くまで待つてたんですけども、時間切れでして、世界では働き方改革じゃないでしょうけども、会議をしている現地では夕方五時

になったら、議論を終わってしまうんですね。それで、あともう二つでナマハゲの審議の順番なんですが、二十八日は結果が出ませんでした。夜の十時半、十一時頃まで多くの人が集まっていたんですね。

次の日は審査されるのが二つ目なんで、これは審査が始まる前に行かなきゃいけないということでホールに行き、大型の映像画面を見ていたんです。最初の審査がレゲエですね、あの音楽の。これがなかなか一時間くらい、議論というか、審議というかなかなか決まらないんですね。世界中のあちこちの人から意見を聞いて、レゲエはジャマイカが本場なんでしょうけど、ほかの国にもレゲエはあるんじゃないか、とかいうような審議でしたので、一時間近くかかったと思うんですね。

じゃあナマハゲの方も時間はかかるんじゃないのかなと思つて、そのつもりでいたんです。来訪神の順番が来ました。まあ、ナマハゲだけじゃなくて「来訪神・仮面・仮装の神々」ということなんですけど。ナマハゲの番になりましたら、なにかご意見ありませんか、と司会の方が聞いているみたいで。そして、ありません、と。わずか一分か二分で、もう決定ですね。あつげにとられてしまつて。まあ、すったもんだして、何とか決まるだろうくらいに、勝手に思つてたんですけど、

そうじゃなくて、もういきなり「決定」と。議長でしょうね、木づちでトンとテーブルを叩いて、そして、決定になったわけです。すんなりいって、日本の文化庁、根回しが上手だったんでしょね。たいしたもんだと思いました。

決定しましたので、次の日、東京で記者会見を行うっていうんですね。仮面仮装にかかわる全国の関係者の人たちがみんな集まつて。永田町の都道府県会館、そこで記者発表を行うっていうことで、テレビなどでよく見かけるあの記者発表、記者会見ですね。一度見たいなと思つてたもんで、僕も物好きなんですから、東京に行つてきました。その時に写した写真です。

どうつてことないんですね。ただもう、発表ですね。記者発表ですね。写真（パワーポイントの画像）を見てください、ずらりと並んでいますね。「なにか質問は」となつても、あまり質問はありませんでした。ただ、マスコミの人たちは、写真を撮りたかつたんでしょうかね、おそらく。その時の様子は全国紙、地方紙などに掲載されました。これが一騒動というか、ユネスコの遺産登録ということなんです。

### 類似行事とその他の行事

「来訪神・仮面・仮装の神々」というのは、前は似たよう

な行事で「甕島のトシドン」というのがありまして、それがすでに単独で登録になっていたんです。ナマハゲを追加で申請したところ、似ているんじゃないかっていうことで、返されて。それで、文化庁の方では、一つのグループとして「仮面・仮装」ということで申請し直したんですね。平成二十一年にトシドンが決まっていますので、それを一つのグループ化するためには「来訪神・仮面・仮装の神々」というふうな。これがかうまくいったんでしょうね。

このグループは、国の重要無形民俗文化財になっているところ、来訪神の民俗行事ですね。一緒に審査されて、去年の十一月に決定したということです。どういうところかということ、岩手県のスネカとか、あと宮城県米川の水かぶり、山形県の遊佐のアマハゲ、それから能登半島のアマメハギ、そして見島のカセドリ、トシドン、パーストウとかメンドンとか、悪石島のボゼなんていう、あまり聞いたことがなかったんですけど、十か所です。

米川の水かぶりなんていうのも、地名は読めなかったですね。「こめかわ」なのか、なんなのか。で、しらべたら「よねかわ」と。宮城県ですので、すぐ近くなんですけども、知らなかったというか。これはまたナマハゲとはちよつと違うんですね。それで紫色で色づけしているのがナマハゲと同じ

ような、類似行事です。他は「仮面・仮装」といつてもナマハゲ系とは違うんじゃないかと思えます。

これはスネカです。米俵を背負って、来訪神というか、ナマハゲのような感じで、もう子供たちは大変な騒ぎですね。これが水かぶり。野外で行われる行事で、これもナマハゲ系ではないです。建物に水をかける行事で、火伏ですね。この地区はもうユネスコの登録になったということで、大変な喜びでして、今年は盛大にやったということを聞いています。

それからお隣、山形県の遊佐のアマハゲというのは、こういうもの（画像）でして、アマハゲ、ナマハゲ、とても似てますよね。

それから能登半島に行きますと、能登のアマメハギですね。能登半島というのは、輪島市と、それから能登町ということの二つでこのアマメハギが行われていて、これは能登町のアマメハギでして、子供たちが回っています。子供たちが各家々に移動する時、「アマメ、アマメ」と叫びながら回って歩きます。家に入って、別に何するわけじゃなく、子供たちが囲炉裏の回りをぐるぐる回って、そしてお金とか、お菓子とかもちらつて帰るといふ行事です。

ところが、同じ能登のアマメハギでも、この門前町の皆月というところは大人たちがやっている。同じアマメハギでも、

子供がやっているところ、大人がやっているところということでは違いますね。

見島のカセドリというのは、こういうふうにして、家に訪問して、竹をバタバタバタバタと床などに打ち叩くんです。ですからこれはナマハゲとはまた違った、顔は見えないようにしているらしいです。カセドリ役の顔を見ると幸福が訪れるとか。こんな風に訪問して歩くという行事でして。

それと、これがトシドン。ユネスコに単独で登録になった行事ですね。鼻が長くて、この甕島のトシドンというのは、この仮面をかぶっている人は、絶対人間がやっているんだよということの子供に知られてはだめだと言われています。

それから宮古島のパントウっていうんですけども、これあの、泥んこです。それも匂いのするような、非常に近づきたくない泥んこです。人が来ると、抱きついたりして、もう服にこの匂いのする泥をつけるんです。最近はお客が増えているみたいですけど、一時、役所の方に連絡があつて、なんで観光客に対して汚すんだというような苦情だったそうです。パントウはそんな行事ですから、それがいやでしたらご遠慮ください、というらしいです。車を見つけると、車のボンネットに泥をつけたり、新築の家では壁に泥の体をこすりつけるそうです。大変な行事のようです。

東京での記者会見の時に、終わってから懇親会があつて、宮古島からも担当の方が来ていました。その方と話をしましたら、宮古島にぜひ見に来て下さいといわれました。あの泥っていうのは、本当に泥なんですかと聞きましたら、水が湧いているところの泥なんだと、その泥を体につけて回つてるということでした。日本列島も長くて広だけあつて、いろいろな行事があるんですね。

それから、この前噴火してしまった硫黄島ですけども、メンドンですね。なんなのか判断しかねる格好ですね。これもユニークな行事みたいですね。それから悪石島のボゼ。なんとなくこう、南洋っぽいような、こういうグループと一緒に世界遺産に登録されたということなんです。

### ナマハゲの起源、伝説、学説

そうすると、男鹿のナマハゲというのはどういふものかということになります。ここにパンフレットがあります。皆さんも手にしていると思います。この中にナマハゲの起源というのが書かれています。ナマハゲっていうのは一体なんなのかっていうようなことです。

最初に書かれているのが、漢の武帝が五匹のクウモリを引き連れて男鹿にやってきた。このクウモリが鬼に変身し、や

がてナマハゲの起源とされたというようなことです。門前の赤神社に武帝が祀られているからということなんでしょうけども、武帝説です。

それから男鹿のお山は修験道の霊場であったことです。その修験者たちの凄まじい姿をナマハゲとして考えた、という説です。それが修験者説です。

山の神説というか、遠くからお山を見ると、写真にありませうけども、左側が本山、右側が真山ですね。その山には村人を守る山の神がいて、その山の神の使者がナマハゲであるとする説、山の神説です。

漂流異邦人説というのがパンフレットに書かれています。これは、男鹿の海岸に漂流してきた異国の人たちが、たとえばですけどロシア人のような大きな体で、遭難してくると髪は茫茫でしょうし、そういう人がナマハゲなんだとする説ですね。これは今もってそういうふうに言う人もいます。異邦人のようなお面がないかと探しましたら、ある町内のお面が、なんとなくこう外国人っぽく見えます。

話はちよつとそれますが、今度の土曜日のプラタモリという番組なんですけれども、男鹿を取り上げるらしく、ナマハゲも出るみたいです。半年も前ですけども、NHKの子会社だと思っんですけれど、ディレクターから連絡があつて「ナ

マハゲのことで教えて欲しい」ということでして、「何か面白いことはないか」と言うんです。「いや、ナマハゲに面白いも面白くないもないよ」「そのような次元の行事じゃないよ」ということを言つたんです。まあ色々話しました。今でもよそから難破してきた船の人たちが、髪茫茫で「あれがナマハゲじゃないか」という話があつて、本当かどうかわかりませんが、今もつてその様なことを言っている町内がありますよと話をしました。「それ面白いな」ということで、興味を持ったみたいです。その後、何も連絡はありませんでした。ところが数日前に連絡があり、今度プラタモリの番組で男鹿を取り上げるとのことでした。男鹿半島のジオが主でしょうけど、ナマハゲを絡めるんじゃないでしょうか。番組の中身がわからないんですけど、いずれこの異邦人説に興味を持ったディレクターが関わっているみたいですので、どの様になるのか楽しみです。

本題に戻ります。今まで話をした四つの説は、説というより伝承ですね。このパンフレットの中には誰がいつたのか何も書いていません。

学説ということでは、「なまはげ覚書―日本列島における祭祀的秘密結社ついて」というのがあります。あまり聞き慣れないんですけども、この学説は中村たかをという方ですね。

岡正雄は男性秘密結社の祭り（ナマハゲ）、また、柳田国男はナマハゲからはるばる村を訪れる神を論じ、折口信夫は鬼とつなげて祖霊を語るなどの発表があります。伝説じやなくて、学者の研究ですので、学説ということになるんでしょうね。他県の類似行事などではこんな数多くの伝説や学説があるんでしょうか。

### 菅江真澄のなまはぎ（ナマハゲ）

そこでどうしても避けて通れないのが菅江真澄の記録です。菅江真澄が残した日記『男鹿の寒風』（一八一―）です。真澄は記録として、文章と図絵で残してくれたんです。でも、その前に、門前のあたりで『男鹿の島風』（一八一〇）という日記を残しています。この中に、ナマハゲの聞き取り調査のような感じで、「なまはぎ」「奈万波義」「生肉剥」などの呼称の記述があります。二百年以上前の行事の様子がわかります。ナマハゲに関する最も古い文献です。そして年が明けた小正月の十五日、旧若美町宮沢の島山さんという家で、ナマハゲ行事を実見し、文章と図絵を記録に残してくれました。実際に見たんで、今度は絵も描いています。それが『男鹿の寒風』で、ナマハゲに関する記録として貴重なものです。菅江真澄と言ったらナマハゲと言われるくらい、最近では世

間に知られるようになったんじゃないでしょうか。実は、光村図書出版の小学校六年生の教科書、社会科の教科書に菅江真澄を紹介する欄がありまして、江戸の紀行家ということで、この画像ですね。一緒にナマハゲの絵が掲載されています。東京の小学校では授業で使っているそうです。そうすると、東京の子供たちは菅江真澄を勉強しながら、男鹿のナマハゲというのがわかるんですね。一昨年ですか、東京から小学校の先生方三名が、男鹿にナマハゲ伝道師の試験を受けて来たそうです。というのは、おそらく子供たちに授業で教えないといけないということで来たんじゃないかなと僕は思っています。

それから、最近知ったんですけども、大学を受験する高校生が使う日本史のテキストとして、山川出版社の『詳説日本史図録』があります。その中に菅江真澄のことが書かれているとのことで、コピーさせてもらったんですけど、やはりナマハゲの絵が掲載されていました。

### 『男鹿の島風』門前・日記本文

肝心の日記の中には一体何が書かれているかといいますと、きょう一枚だけみなさんの手元に資料ということで、配

らせもらっています。門前での聞き書きなんですが、「此嶋にて小児の泣ば、なまはぎが来といひてをびやかしぬ。これや、平城の元興寺に鬼ありしとて、がごじ、又ぐはんごなどいひ」と。口が回らないんですけども、元興寺の鬼というところ有名な話だそうです。元興寺というのは、前身が最古の仏教寺院法興寺（飛鳥寺）です。名前が変わって元興寺となったんで、そこに妖怪、鬼がいたそうです。その鬼だとか、「はた東路にても」というふうなことで、「もくくわ」と書いてますね。これモモンガのことじゃないかと思えます。これは妖怪の類です。こういったものがあって、そして「みちのおくにてもつこといふは」は、昔、僕もいわれたんですけども、「もつこ来るぞ」というふうな「ざらわれていくよ」というふうな、そういうったことも真澄は書いているんですね。

そして「奈万半耆は、正月十五日の夜に」ということでして、「丹塗の仮面を被ぎ、蠮蓑というものを着て」「手に疾刀」です、小刀ですね。これを持って、「小管を負て」、ようするに身につけてですよ。背負つて、ということではないと思います。その箱の中に何かがあって、からからと鳴らしている。「しはぶぎ、家ごとに入る。これをなまはぎといふ。しはぶぎといふのは咳払いですね。咳払いをして「ゴホン」といって、家に入っていきます。これが門前のナマハゲです。

日記『男鹿の島風』に記録されています。

また、なぜ家に入つて来るのかといえますと、「冬籠りして男女柴火にあたるに、肱、脛、みな赤斑に火形がつく」それを「なまみ」だとか「なもみ」とか、あるいは「なごみ」と言うところがあるそうで、それをはぐ、はぎ取りに来る。それで「なごみはぎ」とか「生肉剥」ということだと書いているんです。なまはぎ役は、「浦山里の若背」とか、まあ、若い人ですね。それから「奴僕（ヤダコ）」って、使用人でしょ。うね、若背のような。それから主人や長男、いわゆる跡取りはやらす、弟などが一緒になつてやっている。その「脛の火文ある皮を、春は鬼が来つゝ剥ちふ事にたぐえて、そのまねびなれば、童、としたかき女どもも、おちて逃かくるふなどかたる」と。真澄はよく聞きだしてますね、門前で。ナマハゲというのはこういうものなんだと。囲炉裏にあたっているとなもみがつく、それを剥ぎに来るのがナマハギなんだということです。

#### 『男鹿の寒風』宮沢・日記本文

それから年が明けた小正月ですね、旧暦の。これが「夕ぐれふかう」「炉のもとに円居してけるをりしも、角高く、丹塗の仮面に、海菅といふものを黒く染なして髪とふり乱し、

肩<sup>ケ</sup>蓑といふものを着て、何の入りたらんか、からからと鳴る箱」とある。これも門前と同じですね。からからと鳴る箱をひとつ負って、手には小刀を持って、「あ」と、「あ」ですね。「ウォー」じゃないんです、「オオー」でもないんです。「あ」なんです。真澄の時代は「あ」といって、「ゆくりなう」というのは、突然、不意に入ってくるんだと。昨今ですと、先立ちが「これからナマハゲさん来るんだと、入っていいすか」と、こう言って入ってきますけど。しかし、真澄の時代は「あ」といって、いきなり入って来たんです。

僕が小さい頃もそうでした。「入ってもいいですか」なんというの、まずありえなかつたんです。伺いをたてて来るナマハゲなんてちよつと変じゃないですか。鬼か、それとも歳神様かわかりませんが、いきなり戸を叩いて、ドーンと開けて、「莊平いだが」と、こう来るんですね。「ゆくりなう入り来るを」ですよ。まあ、この当時は名前を呼ばなかつたでしょうけども、「あ」と言って、その後なんて言ったのか、おそらく何も言わなかつたのではないでしょう。そうするとやっぱあの怖いお面で、「あ」と言って来られて。そこに立っているだけでも存在感があり、あ、なまはぎが来たという事で、「童は声もたてず人にすがり、ものゝ陰ににげかくろふ。これに餅とらせて」。ああ、おっかながった、泣

ぐな、とこういつふうにおどしたということですね。これが、畠山さんの家で書いた『男鹿の寒風』日記本文のものです。

### 『男鹿の寒風』宮沢・凶絵

真澄は宮沢でナマハゲの絵を描いています、たった一枚ですけど。これを見てください、貴重な文化財ですね。ナマハゲはどつちも小刀を持っていますね。そして、ポシェットのよな、なんかこう、小箱とか米俵を小さくしたようなものを腰に縛り付けています。畠山さんという家は宮沢の中でも旧家。一、二を争う旧家です。ところが当時は板の間に筵ですね。筵を敷いて、まだ畳の生活じゃないんですね。この日は小正月ですから、節目の大切な日ですけども、主人の服装は、このような質素な服装で、「なまはぎ」を迎え入れるんですね。特別の服装とは違います。子供たちはお母さんにしがみついて、もう静かに衝立の裏にいます。主人はナマハゲに餅を取らせています。ナマハゲは、片手で小刀を持って、「さあ、来たぞ」というようなしぐさをしています。

早く帰ってもらいたいからかわかりませんが、餅をやっています。ちぎった餅です。実際は今はお金になりましたが、僕が小さい頃は必ずお餅でした。この餅は丸の鏡餅なのか、四角の角餅なのかっていうのは、男鹿では議論になって、

意見が分かれるところです。どっちが正解かはわかりませんけど。そんなときは、ついつい真澄の絵を見てしまうんですね。そうすると、角餅だということがわかります。でも、きれいな角餅ではありません。ちぎられた餅ですね。神様にあげるものに刃物を入れるってことはおかしいじゃないか、手でちぎって餅をやるんだと考える方がおりました、なるほどなと思います。



ナマハゲ (『男鹿の寒風』、館蔵写本)

見てもらっている図絵ですけども、これには説明文がついています。ここがやっぱり真澄のすばらしいところですね。ただ絵を描くだけではなく、絵の説明をしています。「正月十五日の夜深くに、若き男たち」が集まって、「鬼の仮面、あるいは、空吹きの面」ですから、ひょっとこ面ですね。そして、「螻蛄というものを、海菅という草を黒染めとして、ふり乱して、手に小刀を持って、小箱の中に物が入っていて、ころころと鳴る」と。この「小箱を脇に掛け、ただむきをいからし」、ただむきとは肘ですね。ですから、肘を振り、怖い顔で入って来たと思います。「蒲のはぎまき、海菅のはぎまき」です、脛にあてるはばき。それから「雪沓をはいて、人の家にゆくりなう飛入りてければ」。ゆくりなうってというのはこれもいきなり入っていうふうなことです。いきなり。不意に。突然に。だから「ごめんください、ナマハゲです」ってというわけにはいかないんですね。いきなり入る。そして、「ああおつかない、ナマハゲがくる」というふうなことで、子供は声も立てないで母親のところに逃げるんです。

「奈万波義は寒さにたえず、火に中りたる脛に赤班のかたつけるをいふなり」と。その赤班（斑）、火文を、ヒカタと読ませてますけども、「春は鬼の来て剥ぎ去るちふ諺のあるにたくへて」、「しか鬼のさまして出ありく生身ナマミハキ刺ちふものな

り」は、鬼の格好をして出歩くんだと。

また、元興寺の鬼、陸奥のもつこを取り上げ、「このあたりでは、生剥」であると。ナマハゲではなく「生剥をいひて童をすかしぬ」と書いています。横列に元興寺の鬼と、もつこと、生剥と述べるのは、真澄の考えなんでしょう。

もう一度絵を見て下さい。これが、今から二百九年前のナマハゲですね。なんとというか、髪はボサボサで、小刀を持ち、土間にいて部屋には上がらないようです。土間にいて威嚇するような、肘をふり、小刀をもつて回られると、もう圧倒されて、子供たちはびつくり、ということじゃないでしょうか。毎年春にやってくるんだと、ということですよ。

真澄は生剥、生肉剥、なまはぎ、ナマミハギ、というふうに読ませてますけども、それが、現在ではカタカナのナマハゲ、ひらがなのなまはげと両方を見かけます。

### カタカナ表記のナマハゲ

カタカナでナマハゲと書くようになったのは、重要無形文化財指定の際、国の方では、「男鹿のナマハゲ」として登録しました。起源がはつきりとしていない民俗行事の呼称はカタカナです。観光で使う場合は、ひらがなの方が柔らかく、やさしさがあり、いいのではないかという意見があります。

どちらが正しいかということではないので、使用する際は柔軟に使い分ければいいんじゃないでしょうか。

### 調査資料と聞き取りからのナマハゲ呼称

この二百年くらいの間に「ナマハゲ」という呼び方になりました。各地区ではいろいろな呼び名があったようです。それを様々な資料から調べてみました。ナマハゲの戦前の資料としては、明治時代の記録ですけども、江戸時代の菅江真澄の記録以降、明治十七年まではまったくありません。ナマハゲを真澄が最初に書いた『男鹿の島風』が一八一〇年です。で、七十数年間は記録がないんですね。それが明治十七年に狩野徳蔵の『秋田男鹿名勝誌』というのに、「十五日の夜生剥とて」というような漢字を使っていますね。ところが明治二十一年に、おそらくナマハゲも大暴れしたんでしょ、ナマハゲ廃止令というのが出たんです。相当暴れたんでしょね。船越の警察から脇本村組合戸長役場への文書に「ナマハゲト称シ……」とあります。文書自体は漢字とカタカナ表記です。

明治四十四年の天王小学校、当時は天王地区も男鹿の内に入っていました。男鹿の内とは旧男鹿市、旧若美町、旧天王町です。天王小学校の『郷土誌』の中に明治四十四年、やつ

ぱり漢字で「生剥」とこう書いてます。ナマハゲという名称が初めて登場するのは、明治二十一年ということになります。が、漢字の「生剥」はまだほかの文献にありますので「生剥」という呼ばれ方が主流であったようです。

資料の中にある『第二号郷土誌資料』昭和八年ですけども、「なもみ刎」という文字があります。「刎」はハネルで、ナモミハネですかね。脇本地区の資料です。この中にはナマハゲの唄とでも呼べそうな「包丁ことげだがとげだがよ、小豆こ煮いだが煮いだがよ」が書かれています。男鹿にこんな唄があったとは驚きです。

戦後になりますと、昭和三十七年に書かれた『秋田県史』民俗・工芸編があります。この中に「ナマハゲという言葉はナマミハギ、ナモメハギのちぢまったもので、これはヒガタすなわち炬火に永くあたたつた肌につく火文の意であるから、これをハグことは、怠け者を刑罰する意味を表す。この行事は全国かなり広い範囲行われ」と書かれています。昭和三十七年ですから、戦後ももう十七年もたつた時ですね。

様々な資料を調べて、気づいたんですけど、ナマハゲの呼び名が色々出てきます。男鹿の各村々ではどんな呼ばれ方をされていたんでしょうか。調査した結果がこちらの画像です。

増川、滝川、福川、飯ノ森ではナマゲです。他の地区では

ナマバケ、ナマハグ、ナマハギ、ナマミハギ、ナマミハゲです。口が回らなくなりませす。ナマモハギ、ナガメ、ナガハメとか九つですね。まだあります。ナムミヨウハギ、ナモミヨウハギ、ナモミハゲ、ナモミハギ、ナモメハゲですね。十四通りです。

これからわかるのは、ナマとかナムミ、ナモメ、ナモミなどは「火形」で、ハグ、ハギ、ハゲなどは「剥ぐ」であり、上と下を合わせると「火文もしくは火形を剥ぐ」になります。ナマハゲの語源です。

それから、画像の十五番、十六番ですけども、「オロオロ」と「オロロロ」という呼び方もあります。オロオロは羽立の夏井さんから教えてもらいました。夏井さんは小さい頃、ナマハゲといわないで、父親から「オロオロくるど」と言われたそうです。また、百川の大関さんからは昔「オロロロ」と親たちが言っていたと教えてもらいました。『男鹿協本の民俗』という本があります。百川のナマハゲについて書かれているところを見ますと、ナマハゲが家に入るとき「オロオロツ」と叫んだと書かれています。言葉の語源は、ナマハゲの叫び声にあつたということになります。誰が決めたつてわけじゃなくて、言いやすい言葉、象徴している言葉になるんですね。それにしても男鹿ではナマハゲの呼び名が十六

もあつたことになりました。

### 秋田県内の類似行事

ところで、類似行事として秋田県内ではどうでしょうか。調べたところあまりありません。きょうは二十か所の地区をピックアップしてきました。列記してきた内の黒っぽい文字が、現在行われているところです。

ナマハゲベンベというのは、この博物館の裏の浦山という地区、ドジョウドなど竹細工で知られていますね。ここでは現在も子供たちが回って歩くんです。一月十五日の日中です。「ナマハゲでーす」って子供たちが、女の子ですね。お菓子をつまみもらえらるようです。

昔はお面を被っていたようですが、今はなんにも被らないで普段着で行って、「ナマハゲでーす」と言つて、袋を持っていて、そこにお菓子を入れてもらうということです。浦山地区では以前、十五日はナマハゲが行きますので、との文書が流れた時もあったと聞いています。

昭和三十七年発行の『秋田県史』民俗・工芸編の中に写真がありました。この写真がそうです。子供のナマハゲということで、ここには金足つて書いてますので、浦山かどうかはわかりませんが、子供たちがこんなふうな格好で回つたんで

しょうね。子供のなまはげとタイトルがないと、大人か子供か分からないナマハゲ姿です。そんなに古い写真だとは思われないんですけど。

それと、私の知っている青崎出身の人、あそこは下新城に  
なります。青崎でも終戦後やっぱ子供たちが駄菓子屋に  
行って、ナマハゲの面を買ってきて、それで子供たちがナマ  
ハゲだと言って回ったそうです。「へ包丁こ研げだが研げだ  
がよ、小豆こ煮いだが煮いだがよ、升で一升量るぞ、餅けれ  
けれ、バックバック」と口ずさんだそうです。もう今はやつ  
てないそうですけど。

他には大人たちが回っています。浅内のナゴメハギ、秋田  
市の下新城や飯島のナマハゲ、豊岩、下浜のヤマハゲ、大正  
寺の悪魔払い、金浦のアマハゲなど数多くあります。

### 秋田県外の類似行事

他県ですけども、ありますね。山形県遊佐のアマハゲと岩  
手県ではスネカ、能登のアマメハギについては先ほど述べま  
した。その他に岩手県では結構ありますね。遠野なんかも、  
羅列した下から二番目、ヒカタククリとか、それからナモミ  
とかといわれていますね。それから新潟県に行くと、アマメハ  
ギですか、村上市のアマメハギですけど、能登と似ています。

子どもたちがやっています、回って歩く時に、「アーマメ  
はぎましよ、アーマメはぎましよ」と唄いながら回って歩き  
ます。

福井県とか、むしろの方に行くと、ちよつと想像のできな  
いような名前になっています。和歌山県はイワイソだとかね、  
岡山県はゴリゴリなんていうのは、よくわからないです。そ  
れから高知県とか、四国、九州にいくと、なおさらわからな  
くなります。まあ、沖縄県のアカマタ、クロマタ、これは有  
名ですけども、こうなるとナマハゲと類似行事とは言われな  
いです。

### ナマハゲ行事の実施日

さて、話を男鹿に戻したいと思います。ナマハゲ行事の実  
施日ですけども、菅江真澄の記録では小正月の十五日夜です。  
その後、明治、大正にかけては文献などからまた陰暦十五日  
であったことがわかります。昭和十年代では、さきがけ新聞  
などの投稿記事などを見ますと、陰暦正月十五日、旧暦大晦  
日、新暦などまちまちなどでした。したがって、実施日が一  
斉に同じ日に行われたというわけではなかったようです。

戦後になりますと、新暦の大晦日に横並びになったよう  
で、昭和五十七年、実は昭和五十八年に「男鹿のナマハゲ」

ということでは旧若美町と旧男鹿市のナマハゲが国の重要無形民俗文化財に指定されました。その時に調査を行っていました。十二月三十一日がその実施日ですね。しかし、安全寺地区だけは一月の十六日でした。お山から里に下りたナマハゲは、お山に帰るのに安全寺を通るときは十六日になるといわれています。ところが平成二十七年の調査では、安全寺も含めて男鹿ではすべての地区で十二月三十一日になったことがわかりました。安全寺ではそれまでは十六日であった実施日を十五日の成人の日に移しました。成人の日の休日です。しかし、成人の日が一月第二月曜日と決められたため、年によって日にちが動くんでは成人の日に合わせてるのは会社勤務の関係で難しいということになり、それなら十二月三十一日に行おうということです。現在、男鹿市では全地区が三十一日に行われます。

## ナマハゲ面

お面について少しお話ししたいと思います。真澄の頃は朱塗りのお面と空吹きひよっとこのお面、木彫りのお面でした。それが、昭和五十二年の調査では、杉とか桐とか樺などの木彫り面などがあつたことがわかります。そしてトタンとか、ブリキのお面とか、ザル面も出てきました。それに市販

のプラスチックのお面は三地区で使用していることがわかりました。

平成二十七年のナマハゲ調査報告書を見ると、プラスチックのお面は九町内、それから市販面も九町内、FRPが一町内、あとはザル、木彫りの伝統的なお面ですね。それから石川面。このお面は伝承館で観光なまはげ面を作っている石川さんの作ですね。石川さんが作った荒削りしたお面を購入し、それを町内で細工して完成させたお面ですね。

ナマハゲのお面については、岡本太郎の話があります。岡本太郎は男鹿に来る前、正直あまり期待していませんでした。東京に観光なまはげがやって来たり、なまはげ掲載のパンフレットがありました。ところが観光パンフレットについてるのは、実際のナマハゲ行事そのものじゃなくて、観光用に作られたお面を載せていまして、それを手に取って岡本太郎は期待しないまま男鹿にやってきたそうです。ところが船川の芦沢というところでナマハゲを見ましたら、これは、なんだと。ギョギョギョといったかわかりませんが、吃驚したそうです。昨日の新聞ですかね、さきがけ新聞に今度秋田県の新しいポスターに芦沢のナマハゲが登場しましたね。岡本太郎が見たお面ですね。芦沢のお面。特徴ありますね。

古いものになると、これは戦後まもなくですけど、脇本の

大倉のナマハゲです。手に鋏を持ってますね。この鋏でナモミを剥ぐというのは、ちょっと考えづらいですけど。小刀が出刃に替わって迫力があります。そばにいるだけでも威圧感があるんじゃないでしょうか。最近の大倉はこういうふうになりました。昔ほどではないですけど、でもやっぱり怖そうなお面です。

お面作りは難しいかなと思ひまして、男鹿市菅江真澄研究会では、中石の杉皮のお面をモデルに、実際に作ってみましたら、このようになりました。試作品のつもりだったんですけども、思いのほか上手くいった気がしています。杉の木の皮を剥いでですね、皮は丸くなっているんで、剥いたらすぐに重しをかけて、乾燥させます。すると平らになって、皮の表面がごつごつして、髪の毛は海苔です。とても怖そうな感じに仕上がりました。お面の大きさは、大きくも小さくもできませんね。研究会では真澄の図絵の再現を頼まれることがあったので、朱塗りのお面の代わりに、杉皮のお面で披露しています。静止画を演技で再現するのは難しいですけど。

こちらは、滝川のお面です。左側のお面に、おでこのところに瘤みたいなのがあります。これが滝川のお面の特徴じゃないでしょうか。瘤のあるお面というのは、相川のナマハゲ面にもあります。どうしてあるのか、修験と関係あるのかはつ

きりとしたことはわからないそうです。

それからお面の画像ですが、軽くするためにウレタンで作ったお札町のお面です。それから飯ノ森のお面です。一昨年復活した町内ですけども、古いお面が見られます。上金川、これは仏師の職人が作ったお面だそうで、素晴らしい出来栄えです。

次に、脇本の新町のお面です。大倉のお面と似てますけども、去年の暮れに秋田放送で放映されたお面です。そのせいかどうかはわかりませんが、久しぶりに新町は復活しました。このお面は今度十二月七日からここ、秋田県立博物館で始まる企画展「山と生きる〜太平山の信仰と人々のくらし〜」にお面が展示されるそうです。太平山から、つまりオエダラから、八郎潟のシガ(氷)を渡ってきたナマハゲだということですので、ぜひご覧になってください。本物のお面です。お札町、飯ノ森、大倉のお面も展示されると聞いています。

それからこれが今年のお正月にNHKテレビで放送された小深見の本田という町内のナマハゲ面です。やつぱりみんな変わってますよね。特徴があるというか。これを見ると、どこそこの町内だというのがすぐわかりますね。これは小浜、門前の手前の町内です。おそらく百五十年以上は経っているのではないのでしょうか。江戸時代の後期のお面と思われま

こちらは百川上のお面です。これもちよつと変わってますね。ひよろつとした細長面です。

次のお面は安全寺です。実はこの三体のナマハゲ面ですけど、名前がついています。それぞれ個々にですけど、リーダー格のオクヤマノオクスケ、それから暴れん坊のキバノキンスケ、新米のササデノサンスケ。こういうふうにして三面とも名前を持っているんです。そのほかにナベノフタトテノスケ、それからマゲヤマノマンゾウというふうな、五つの名前があるそうです。先ほどお話しした飯ノ森ですけど、飯ノ森にも実は、オエダワラノサンキチ、エンノシタクグリノドデノスケという名前で呼ばれるお面があるそうです。それから若美の渡部ですけど、ここにもナベノフタトテノスケがいます。一番すごいのは百川ですね。百川には、エンノシタクグリノネコザエモン、それからハナカカシノゴミソ、オゲヤマノオグスケ、キバノキンスケ、ササデノサンスケは安全寺と似てますね。その他にナベノフタトテノスケ、オエダラノサンキチ、トビノハチロウの八人が名前持ちです。

名前は教えられてもメモしておかないとすぐ忘れてしまいます。そうです。ナベノフタトテノスケくらいは記憶に残りますけどね。僕は安全寺の方でオクヤマノオクスケとかは一回聞けば忘れない気がします、エンノシタクグリノネコザエモンな

んかも記憶に残りそうですが、皆さんはどうでしょうか。

この様にナマハゲに多くの名前があるということは、いかにナマハゲが地元の人たちから親しみを持たれているかということではないでしょうか。また、ナマハゲは怖いんですけど、怖いながらも、おらほのナマハゲとして、長い間村を支えてきた民俗行事になっています。

### 衣装、持ち物など

あらためて真澄の図絵を見てもらいたいんですけども、右手に小刀を持ち、左手は空いています。ヒカタ、ナモミを剥ぐには、手が空いてないととてもできないということですかね、火文を剥ぐためには。

最近はどうでしょうか。カシヨゲ(桶)とか、御幣とか持っていますね。これだとやっぱり剥ぐのが難しいんじゃないでしょうか。出刃包丁で剥ぎますんで、最も剥ぐしぐさだけでしようけど。

カシヨゲっていうのが増えましたね。これはどうやら観光用に持ち出したのが始まりじゃないか、ということをやっている方がいます。それから木刀、タラの木は棘があります。ガンガ、オノなどはそんなに多くはないです。御幣の杖もよく見かけますけど、観光なまはげがよく持っています。調査

報告書では、御幣の杖を持ち歩く町内数は少ないです。

それとあと、集金バックですね。紙袋と。これはやはり変わりましたね。昔はもう吠（かます）に決まっていたましたから。この画像の吠ですけど、ぺちゃんこです。お金というか、のし袋をもらってここに入れるんで、ふくらむはずがないんです。これは今お金をもらっているところでした、ちよつとふくらんでいます。これは滝川町内ですが、実は必要があった一軒だけですけど、餅をもらいます。その餅が入ると袋がこうなるんです。ナマハゲ餅が。でも、ほとんどは金一封です。あとはミカンとか缶ビールとかです。

数年前、滝川のナマハゲ行事に行ってきました。子供がいない代わりに、正月帰省した大きくなった二人の娘さんの家に行った時のことです。「なんだ、おめがだ、まだ嫁っこにいがねてが」「そんなこといわねでまんず酒っこ飲んでけれ」というようなことで、二人のお嬢さんが東京から帰ってきて、ナマハゲを迎えて、父さんと母さんがにやにやしながら見ていました。でもみんな同じ町内ですから、仲間のような感じでおもてなしをしているんですね。小さいころからナマハゲを見てますので、もう来るのが当然だと思っっているし、酒っこ注ぐつていうのは当たり前なんです。ナマハゲと会話を楽しんでるみたいです。ここのお宅はお膳も質素です。滝

川の町内は一〇〇世帯もあります。上がる家つて十軒くらいで、以前と比べて少なくなりました。

これは玄関先での一コマです。家の中にながらず、玄関先にお膳が運ばれ、おもてなしを受けているんです。ナマハゲは部屋にながらないつてことがわかってるので、子供たちは玄関に出てくるんですね。ナマハゲに連れて行かれないということがわかっていますから。昔はこんなことはなかったと言っていました。

餅をもらってきたナマハゲですけど、滝川では行事終了の時はこのようにして、ナマハゲ面の口に餅を入れ、その上にみかんをあげ、お面を拝んでおしまいになります。お面とお餅、みかんのセットで最後を締める町内があることを初めて知りました。ナマハゲ行事を見るのでしたら、やはり最後までつきあわないとこのような場面に出くわさないと。きょう、男鹿から来た方何人かいると思いますが、この様な風習というか、習わしのある別の町内を知らませんかでしょうか。誰も手を挙げる方いいですね。これは滝川独特のことじゃないかと思えます。その後、身につけたケラは公民館の木に巻き付けていました。後日、熊野神社祭礼のどんど焼きで燃やすそうです。

## ナマハゲの実施町内

現在ナマハゲ行事は、男鹿市全体でどれくらいの町内で実施されているのでしょうか。また、行われてきたのでしょうか。男鹿市の教育委員会の発表ですけども、昨年の平成三十年十二月三十一日では九十二町内で実施されました。平成二十四年は八十二町内、その後八十一町内、七十九町内と減少しかかったんですけど、三年くらい前から増えてきました。八十六町内、八十五町内、九十二町内と。男鹿市全一四八町内のうち、半分以上の町内で実施されています。

九十二の町内がナマハゲ行事を実施しているとは、どうとらえたらよいのでしょうか。今回、ユネスコ無形文化遺産の登録になったナマハゲの類似行事と言われる、たとえば能登のアメハギがあります。石川県の能登町では現在実施されているのは四地域だけだそうです。同じアマメハギの輪島市では三地域だそうです。また、山形県の遊佐では三地域、岩手県大船渡市のスネカは、吉浜集落三〇〇世帯以上を二十五人くらいで回るそうです。

男鹿市では、去年の十二月三十一日には九十二町内でした。類似行事の他地域と比べてみますと、いかに男鹿のナマハゲ行事が多いかがわかります。

ナマハゲ役にしても一町内四人〜六人が、雄叫びをあげま

す。そうしますと、三十一日のあの夜です。雄叫びをあげているナマハゲは三六八人〜五五二人いて、そのナマハゲたちがお面を被って「オオー」とやっつてることになります。ほとんど若い人は減少しているのにも思いますが、まだまだ健在です。でも、実状はナマハゲ役の高齢化が進んでいるのではないのでしょうか。

## ナマハゲ役の年齢層

昭和五十二年と平成二十七年の年齢層を調査報告書で見ますと、実際にナマハゲ役を始めた年齢は、以前は高校生くらいからだったのが、二十歳くらいから変わりました。しかし、何歳頃まで関わっていたかという点、昭和五十二年には、大体二十三歳頃、遅くても三十歳代で終わっています。ところが平成二十七年には、もうやめられないんですね。代わりに担い手がいないので、どんどん高齢化していき、四十歳頃までやめる人が八町内、ところが五十歳頃までがんばっている人たちが二十四町内あります。それと六十代、七十代になってもナマハゲ役を続けている町内があることがわかります。若者がいないんです。でも、行事はやめられないといえます。本当に町内で若者がいないのでしょうか。画像の左の方です。船越本町四八〇世帯、小深見は三九四世帯（ここはさ

らに四町内に分かれている) およそ四〇〇くらいですね。こんなにあるのに若者がいないのかと思います。右の方はたとえば北平沢とか館下とか松木沢とか。ここは二十世帯前後なのに、ナマハゲ行事はやっていきます。

そうするとこの違いはなんなのかと考えてしまいます。きょう、船越本町の方が来ていますけれど、去年復活したそうです。それから小深見本町内も復活しました。この紫色の増川と泉台一区、泉台二区、脇新本町こも復活しました。平成三十年十二月三十一日は男鹿で復活した町内は、八町内だそうです。復活に当たっては様々な障害があつたと思いません。それを乗り越えて復活にこぎつけたんでしょうね。

男鹿にはナマハゲに対するエネルギーが生き続けていたんでしょうか。話し合いの中で、意見を述べ、知恵を出し、工夫することで可能となつたと思います。

### ナマハゲを迎える家

ナマハゲ行事では、ナマハゲばかりが目立ちますが、迎える側の家があります。迎える家がなければナマハゲ行事は成り立ちません。迎える家では準備が必要です。

真澄の図絵になりますが、当時はお膳はなかつたようですが、餅の準備はしていたことがわかります。重要無形民俗文

化財に指定された昭和五十三年頃は、まだお膳を準備する家がみられました。お膳を出す家では、頭つきの魚とか、煮しめだとか、タコとかナマス、数の子、きんとんなど正月料理の準備をして迎えてくれます。

最近はどうでしょうか。お膳で迎える家は少なくなっています。お膳の準備は各家庭に負担がかかるので少なくなりました。それとともに、ナマハゲは家に上がらず玄関先で「オオー」と声を出し、家人が子供を連れて玄関先で対応する家庭が増えていきます。

しかし、ナマハゲはお膳があつても、なくても訪問します。昨年復活した小深見の本町内ですけれど、復活するにあたり、ナマハゲが家を訪問してもいいか、どうかというアンケートを行いました。そうしましたら、半分くらいは来なくてもいいです。でも半分は来てくださいという回答だったそうです。そこで、玄関先にしますか、あがつてもいいですかというのを聞いて、玄関先であつたら三分間、家にあがつたら七分間と滞在時間を決め、九時頃までに終われば若い嫁さんからは、あまり文句を言われないだろうと考えたそうです。九時頃までには帰れますからね。そのようにみんなで話し合つて、知恵を出して、復活しようじゃないかと。一年きりで終わるんじゃないかと、毎年続けられるようにしようとし

たわけです。

次の写真ですけど、料理は簡単にと言われたせいとか、地味なお膳ですね。先ほど話した小深見本田町内のお膳です。

写真を見てください、相川地区です。相川というところは最初に六人が一組となり、小林さんという方の家に行きます。そこから今度は三人二組に分かれて村を回ることになっています。最初の家の小林さん宅では子供たちがナマハゲを待っていました。この地区は漁師の方が多いところです。不思議なことに相川ではナマハゲが、沖上げ音頭とかソーラン節とかを唄います。ナマハゲは子供たちにも歌を強要します。ナマハゲと子供たちが歌うというのはここ相川と、昨年復活した増川だけではないでしょうか。ナマハゲが声を出して唄う地区があるんです。

安全寺地区にはほとんど子供がいません。数年前、ナマハゲを見たいという東京からの一行とともに安全寺に行きました。その時の写真です。東京から来た坊やは、今ナマハゲが来るよと言ったら、どうしたらよいか戸惑う様子でしたので、隠れば探されて連れて行かれるから黙ってここに座っていた方がいいと言われ、素直に座ってまして、ナマハゲがやってきて両隣に挟まれ、ナマハゲから何か言われていました。ササデノサンスケか、オクヤマノオクスケかわかりませんが、

怖かったですよね。怖そうなお面でしたから。

安全寺のお面、ちよつと写真が悪くてすみません。杉の彫り物のお面にして、とにかく重いです。付き人がご主人に、「いや、今あちこち回って、ナマハゲも疲れてきて、とてもそのお面を被っていればお酒つこを飲めながら、お面取ってもいいすか」と言ったので、「ああ、取ってけれ、取ってけれ」ってことで、顔を出したのがこの三名の方でして、まったくこのお面とは似ても似つかない、優しい安女主寺の人たちでした。こちらの家では料理のもてなしはもうすごいものです。今年孫たちが来ないけど、ナマハゲさんに食べてもらうために作った料理だそうです。孫の代わりに東京の坊やも一緒に食べていました。ナマハゲへのもてなしを見ると、ナマハゲと家人とよそ者たちですが温かさを感じました。ナマハゲ行事がなくなる原因の一つはこんなところにもあるんじゃないでしょうか。

一昨年復活した飯ノ森というところでですけど、二十年ぶりかで復活したせいとか、最初はぎこちなかったように見えました。家上がり、「オオー」と叫んだあとお面を取ってしまいました。ナマハゲって正体、普通は見せないんですけど。お面をかぶりながら、さきほどの安全寺は特別ですけど、お面は被ったままお酒を飲みます。ところがもうにやにやしな

がら、「久しぶりに復活したがら、まんず、いがったねが、まず一杯飲め」ということで、記念写真を撮っていました。

写真撮影はこの家でも見かけます。去年の小深見本田のある家での写真ですけど、真ん中の年配の男性ですね。この方は自分の娘がここに嫁に来ていて、小深見でナマハゲが復活するつてことでわざわざ楽しみに、東京から来たつていふんですね。写真撮らせてくださいなんていって、シャッターをさかんに切っていました。

次は藁くずの写真です。ナマハゲが落としていった藁くずです。これを頭に巻けばご利益があるということです。この若いお母さんは知っていたらしく、坊やが風邪引かないようにとか、勉強がよくできますようにとかいって、頭に巻いていました。まじないでしょうね。

久しぶり復活した小深見本田町内にテレビ取材が入り、ディレクターがインタビュしていました。この子供たちは一生懸命になって感想を述べていました。今の子供たちははつきり感想を言えますね。

本田町内の様子を見学させてもらいました。予定通り回つて来て、神明社の隣が最後の小松神主さんの家です。おもてなしを受けて神社境内に来たところ、大勢の人が集まっています。何の人だろうと不思議に思い、近づいてよく見ると

子供を連れていっているんですね。その方たちに話を聞きましたら、自分たちの隣の本田町内でナマハゲが復活したと聞いたから、うちの町内はやっていないので見に来たつていうんです。ギャラリーですね。ナマハゲ行事を心待ちにしている人もいっているんですね。これはもう、ナマハゲが復活した本田町内としてはうれしかぎりでしょう。自分たちの町内は復活できたんですから。待つていてくれた隣の町内の人たちに「オオ」と言つて近づいたら、子供たちは泣き叫んでいましたが、大人たちは大喜びでした。

どこの町内もそうでしょうけど、復活にあたって、先になつてやつてみようと思つても、掛け声だけではなかなか進まないものです。仲間を集めて、言い出しつべは大変な苦勞をしたんじゃないかと思えます。アンケートをとつたり、先輩に相談したりと。やはり最後は言い出しつべの熱意ですかね。そして一過性ではなく、これからも長く継承できるようにやり方を考えていかなければ、とリーダーは言っていました。

男鹿では昨年の暮れ、八町内で復活したと先ほど述べました。今後後継者の問題は続くと思いますが、自分たちの町内の行事が、世界遺産に認められたことを誇りに、また、江戸時代から続く行事を継承しているんだと思えばやりがいがあるのではないのでしょうか。

## ナマハゲの橋、鬼伝承

男鹿にはナマハゲ行事がない、やってはいけない村があります。浜間口と西水口地区です。これは文政年中の頃からだそうで、ナマハゲはやってはいけない、よそから入れてもいいけないそうです。文政年中からですので、それ以前、菅江真澄の時代には行われていたと思います。

村境に浜間口橋という橋があります。文政年中のある年、真山からきたナマハゲが浜間口に入ろうとしたとき、この橋から村のオボシナの神様が子供をかばうために突き落としたといわれています。

それから、もう一つの村、西水口のところにある下福橋です。湯本の方からきたナマハゲがここを渡ろうとしたとき村の守り神により、橋が真二つに折られ、ほうほうのていで帰ったといわれています。それで、二年後にまた湯本のナマハゲが来たんだけど、橋から落ちてしまい、それ以来もう来なくなつたそうです。村の神社の神様は子供を懲らしめるようなナマハゲは村に入れられないんだと言われています。どこまでが本当かわかりませんが、そのような言い伝えがあります。村のはずれの下福橋は、平成三年に新しくなりました。立派な木造の橋でして、今時珍しい橋です。ナマハゲ伝説を

意識して作ったかもしれません。浜間口と西水口、どちらも橋が共通しています。

ナマハゲが入れない家もあります。それは脇本の渡辺さんという家なんです。渡辺綱、みなさん酒吞童子の鬼退治の話はご存知でしょうか。酒吞童子の大江山で鬼退治の際、鬼の茨木童子の腕を渡辺綱が斬り落としたそうです。そのため、渡辺綱の子孫である渡辺家には、鬼が腕を取り返しにくるんだということ、昔の茅葺民家のころは天窓もつくられなかつたそうです。また、渡辺家の人間はナマハゲ役もやっちゃいけないと言ひ伝えられています。

## ナマハゲ伝承

調査で分かつたことですが、安全寺の安田徳右衛門家、今もご子孫の方がおられますが、安田家の先代の方がナマハゲ六匹を引き連れて、佐竹の殿様が秋田へ来る時、院内まで迎えに行つたといわれています。そうなりますと、江戸初期の頃です。今からおよそ四百年くらい前ですので、ナマハゲ行事は四百年以上前から行われていたことになります。

## 観光となまはげ

ナマハゲに興味を持つてからもう何年も経つてしまいまし

た。でもわからないことだらけです。ではナマハゲの何を調べるとなるとあつちもこつちも面白くてふわふわしています。そんな中で違和感があるのが観光なまはげです。昨年、ユネスコの無形文化遺産に登録されました。登録になって何が変わったんでしょうか。もちろん行事が変わるはずはありません。しかし、行事にかかわる人たち、市民の人たちの意識の中に、世界が認めているんだという自覚はあるでしょう。だからと言って、行事そのものに変化はないのです。

しかし、このナマハゲの年中行事を知ってもらいたい、観光に生かせないかと日々様々な取り組みがされています。なまはげ館、男鹿真山伝承館、なまはげ柴灯まつり、なまはげ太鼓、出前なまはげ、巨大ななまはげ像、なまはげポスター、なまはげグッズ、なまはげ食品などの他、ナマハゲに関連するものがたくさんあります。

さきほど違和感があると申しましたが、ユネスコの無形文化遺産や国の重要無形民俗文化財になっているのは、年中行事であるナマハゲ行事です。ナマハゲ行事は、ナマハゲとそれを迎える側の家があつて成り立っている行事です。お面を被った鬼が火文を剥ぐという行事が生剥、すなわちナマハゲですので、大晦日以外のなまはげは本来のナマハゲとは違うこととなります。確かに男鹿真山伝承館で行われている学習

講座は、真山のナマハゲの疑似とはいえ、行事を忠実に再現していますので大晦日に見られない方たちにはありがたい施設です。また、お面を展示しているなまはげ館もそうです。

しかし、観光客が普段なまはげに触れられるのは、なまはげのイベントであったり、交通安全のイベントであったりします。そういう時々あちこちに出没するなまはげを見た人たちが、あれがナマハゲなんだと思ひ込んでしまうことに違和感があるのです。最低限必要な、ナマハゲと迎える家がセツトになっていないのです。

そういうわけで、観光なまはげ、交通安全に協力するなまはげ、スポーツ競技に応援に行くなまはげなど、本来のナマハゲの意義を考えるとある程度の線引きが必要ではないかとの意見が出てきています。観光となまはげ、大きな課題です。

### まとめ

ここに三枚で一セットになった版画があります。昭和十五年に北浦相川で見たとと思われる勝平得之が描いたナマハゲの版画です。右側のナマハゲはカシヨゲと御幣と出刃包丁を持ち、腰には小箱に鈴のようなものが見えます。左は子供たちが家の中からナマハゲの様子をうかがい、天井からは餅が吊り下げられています。小正月の餅でしょう。真ん中の一枚は

家に向かうナマハゲです。夜空に見えるお月さんは満月で、旧暦の一月十五日のナマハゲ行事であることがわかります。三枚を一つとした構図の素晴らしい版画です。

菅江真澄のナマハゲ図絵をもう一度ご覧下さい。パンフレットに載っております。二人の視点が違います。勝平得之は外から見ての版画、菅江真澄は家の中からの絵です。一概に比較はできませんが、真澄の絵を考えるために見てもらいたくて持ってきました。

真澄の図絵は実見と思われ、わざわざ説明文を記していません。同じ行事なのに版画絵とは明らかに違いがあります。一枚の絵からですが、様々なことがわかります。この違いこそ、真澄の観察眼と表現力を持ち得ての描写であり、今日高い評価を受けている魅力ある絵だと思えます。

ナマハゲが昨年は九十二町内で行われました。これだけの地区で行事が継承されていますが、菅江真澄が記録した生剝とは多少変化しています。民俗行事は変化するものといえます。男鹿の気候風土に合ったナマハゲ行事は変化しているのです。一時中断しても、また復活してしまうそんな土地柄があつて、人がいなくとも、七十代のおじいさんががんばるんですね。若い息子夫婦は家でテレビやゲームなどをやりながら、孫と余暇を楽しんでいます。でも、それを一概に責めら

れない時代というか、社会環境、生活環境の変化も現実なのです。

今まで様々なことを述べてきました。述べるにあたって実は菅江真澄の記録を意識しながら、また行事の見学をさせてもらった現場のことを思い出しながら、述べてきたつもりです。菅江真澄は「奈万波義は寒さにたえず火に中りたる脛に赤班のかたつけるをいふなり。その火文を春は鬼の来て剝ぎ去るちふ諺のあるにたくへて、しか鬼のさまして出ありく生身剝ちふもの也」と書いています。しかし、昔は現在の気密性のある住宅と違い、隙間風のある住居でとても厳しい生活を過ごさなければならなかったでしょう。特に寒さの厳しい季節にはどうしても寒さに耐えられず、暖を求めたことでしょう。その気の緩みを寒さの厳しい小正月に生剝がきて、心の引き締めを説いたのではないのでしょうか。それが暗に各家々に福をもたらすことにつながるんだと教えてくれる、生剝は子供への訓戒というより、大人に対する、各家々に対する年中行事と考えています。

現在のナマハゲはどうでしょうか。何を伝えようとしているのでしょうか。「親の言うことを聞くか」「勉強するか」と子供がターゲットになっています。ナマハゲ本来の意義は子供ではないはずだ。

年に一度、大晦日によってくるナマハゲ。男鹿では長い間、  
そしてこれからも生き続けていくでしょう。そう考えると、  
男鹿はナマハゲのふるさとといってもいいかもしれません。  
本日はご清聴頂きありがとうございます。

## 註

本稿は講演の要旨が変わらない範囲で、削除、補筆したも  
のです。

## 参考文献

- \*狩野徳蔵『秋田男鹿名勝誌』秋田活版社 一八八四年
- \*天野源一『新訳眞澄翁男鹿遊覧記』男鹿史志刊行会  
一九五二年
- \*秋田県『秋田県史』民俗・工芸編 一九六二年
- \*菅江眞澄『菅江眞澄全集』第四巻 未来社 一九七三年
- \*男鹿のナマハゲ保存会（男鹿市・若美町）発行『男鹿のナ  
マハゲ』第一集 一九八〇年
- \*男鹿市・若美町編集、発行『男鹿のナマハゲ』第二集  
一九八一年
- \*男鹿市教育委員会・若美町教育委員会編集、発行『男鹿の  
ナマハゲ』第三集 一九八二年
- \*佐藤尚太郎『漁村風土誌』秋田文化出版社 一九八四年
- \*稲雄次『ナマハゲ』秋田文化出版社 一九八五年
- \*西郊民俗談話会『男鹿協本の民俗』秋田文化出版社  
一九八五年
- \*片柳庸史編集人『フォークロア』第一号 本阿弥書店  
一九九四年
- \*岡本太郎『日本再発見』角川文庫 二〇一五年
- \*石毛直道ほか『社会』6 光村図書 二〇一七年
- \*詳説日本史図録編集委員会編『日本史図録』第七版 山川  
出版社 二〇一七年
- \*男鹿市教育委員会・男鹿市菅江眞澄研究会編集『男鹿のナ  
マハゲ』二〇一七年

## 内田武志・未定稿「真澄翁交遊録 鳥屋長秋」

秋田の文芸雑誌として戦前から刊行されていた『草園』に、昭和二十三年（一九四八）四月（『草園』春季号）、内田武志寄稿の「真澄翁交遊録 鳥屋長秋（一）」が掲載された。

同号の編集後記に、「菅江真澄の研究者内田武志氏の〈鳥屋長秋〉は頁の都合で全部のせ切れなかつたが、次号完結の予定である」とある。『草園』自体の発行はその後も続いているが、鳥屋長秋に関する続編が掲載されることはなかつた。続編がなぜ掲載されなかつたのか、その事情は不明と言わざるを得ない。

当館が所蔵する内田文庫には、掲載誌である『草園』春季号の他、続編を含めた内田武志による原稿、掲載用に清書された原稿（他筆）がある。また、掲載誌の『草園』春季号には、内田武志自身による鉛筆書きの訂正がある。

内田武志による鳥屋長秋論は、昭和五十二年（一九七七）刊行の『菅江真澄全集』別巻一「鳥屋長秋」に結実しているが、鳥屋長秋をめぐる事柄は、新出資料も余りなく、その後まとまつた論考が発表されることもなかつたため、全集掲載

の論が現在においてもその到達点となつている。しかしながら、少々饒舌の感がある。全集における記述に比べると、その元になつた「真澄翁交遊録 鳥屋長秋」の方が論旨が整理されてまとまつている。

そのことから、鳥屋長秋論の到達点である全集掲載の記述をより深く理解するためにも、「真澄翁交遊録 鳥屋長秋」を通覧することが有効と考える。

そこで、「真澄翁交遊録 鳥屋長秋」全編を現在の真澄研究の視点から検証し、かつ、資料所在に関する事柄を明らかにしてみることにした。このことは、真澄と鳥屋長秋との関係を再検討していく上でも必要なことであろう。

また、別稿として、当館所蔵資料を中心とした「鳥屋長秋 遺墨資料の翻刻」を掲載する。合わせて御覧いただきたい。

本稿は、『草園』に掲載された（一）については掲載誌を再度活字化し、未掲載の続編については清書原稿を活字化するものである。

（秋田県立博物館 主査兼学芸主事 松山 修）

## 凡例

- ・旧字を新字に改め、拗音と促音には捨て仮名を用いる。
- ・掲載誌の再度の活字化については、体裁を若干変える。具体的には、引用文の「」を外し、一行空きと字下げを施す。
- ・内田武志自身による訂正及び追記を【】内に入れる。ただし、本文に入れる場合と、傍註部分に置く場合がある。訂正で本文に入れる場合は、訂正部分に取り消し線(＝)を付す。
- ・内田武志自身による訂正のうち【く】とあるのは、一字アキを示す。
- ・掲載誌における誤字や脱字を( )内に正す。
- ・掲載誌における引用文や資料翻刻については、濁点や意味の区切りなどを考慮せず、そのまま掲載する。
- ・清書原稿のうち続編の活字化においては、引用文や資料翻刻に濁点を施して意味が通じやすいようにする。また、明らかな誤字については、正したものを掲載する。
- ・補足説明や資料の所在などについては、傍註の位置に※印と番号を付けて、巻末に「註」としてまとめる。
- ・註において、未来社『菅江真澄全集』を全集と略記する。

## 真澄翁交友録 鳥屋長秋(一)

内田武志

菅江真澄翁が文政十二年(一八二九)の夏、仙北郡角館の伊勢堂別当宅に没して<sup>1</sup>から今年はちようど百二十年目にあった。

もとより終身めとることのなかった翁に、祀ってくれる後継のあらうはずはなかった。当時、南秋田<sup>2</sup>郡寺内村、田村神社の祠官であった鎌田正家は、二十年來の親友であり、かねて翁の身元引受人だった関係から、その亡骸をひきとり、同村大小路の自分の墓域内に手厚く葬った。そして、生前の知友たちがたてた墓碑は三尺余の自然石で、正面には菅江真澄翁墓とほり、上方には「友たちあまたして石碑立る時によりてかきつけゝる」と前書して、鳥屋長秋の長歌が刻りつけてあると云う珍しい様式のものであった。その歌詞は次のとおりである。

三河ノ渥美小国田<sup>3</sup> 雲はなれ こゝに來をりて 夕星のかゆきかくゆき 年まねく あそへるはしに かしこきや殿命の仰言いたゞき持て 石上古き名所 まきあるきかけるふみをら 鏡なす明徳館に ことゝくに さゝけをさめて劔太刀 名をもしさをも 万代に きこえあ

けつる はしきやし 菅江のをちか おくつき処 鳥屋  
長秋

この作詞者、鳥屋長秋とは、どんな人物であつたか。ちかごろ真澄翁の交友關係をしらべ、翁の姿をより明らかにしようとして試みている自分は、長秋の生涯についても詳しく知ろうとつとめたのであつたが、いまだ資料不足である。その理由は後に述べるとおり、このひとつも、後が絶えているなどのためであるが、「秋田人物伝」（大正十二年刊）には何ら記されておらず、「秋田人名辞書」（昭和七年刊）の記載もまた簡略である。よつてまず、今まで得た範囲でその略伝をまとめ、他は大方の御高教をまちたいと思うのである。

鳥屋長秋は、名を卯助（宇助、鶴助とも書く）号を長秋、その書屋を千穂屋と称した。秋田市豊島町、また十人衆町の辺に住む町人だつたと云う。残念なことに、生年月日はいまだ明らかでない。若いころは佐竹藩の飛脚方御用をつとめていたので、飛脚屋卯助とも呼ばれたそうである。生来の学問好きから、だれの手ほどきをうけてか、歌をよみ国文の書を勉めて学んだ。

すでに寛政初年には、藩校明道館が開設せられたが、町人卯助にとつては、そこは何の縁ない存在であり、また、いま

だ漢学偏重の教育方針であつて、こゝに漢【和】学方の置かれるようになったのは、それから三十五年後のことである。しかし、いかに冬眠のながい東奥の地でも、当時ようやく諸国に吹きひろがってきた国学の新風をうけては、若芽がもえ出すにはいかなかった。いつの世でも時勢の動きに敏感なのは若人である。それらのひとが、藩士高階貞房であり、神官鎌田正家、土崎宗直、大友直枝などであつた。長秋もこの友人らとともに、春満、真淵、宣長らの新著書にたししみ、万葉集、古事記などに眼をさらすようになったであろう。

この数人のうちで、もつとも年若だつたらしい大友直枝は、十八才の享和二年（一八〇二）伊勢松阪（坂）におもむいて本居門人となり、こゝで三年間、皇典を講究して帰国した。やがてまた、文化年中にも江戸にで、勉強したと云う新鋭の国学者であつた。そして廿八才の文化九年、父のあとをついで平鹿郡八沢木の波宇志別神社の祠官となり、藩内社家大頭を命ぜられてゐる。直接、本居学派の真髓にふれ諸先輩の著述消息などに、くわしいこの直枝が、秋田における国学界を指導するようになったのは当然の事である。

貞房は、二百五十余石高階家の御曹子で、直枝よりは一年長であつたが、長秋とは、ごくしたしかつたらしい。文化四年五月、松前警備のため佐竹藩からも出兵したとき、

二十四才の貞房も武者二十五騎のうちに加えられたが、八月末にぶじ帰還した。長秋はこれを喜び祝つて次のような長歌をよんで寄せた。

松前国にいましゝ御いくさたち ことたひらけまして

かへり給ふとき 高階大人によみて奉る歌 長秋

はし鷹の出羽国をしろしめす君の命ゆ 御心をひろみあつみと みめぐみの露しげゝれば 民草はいよゝさかゆる月に日に かまどのけぶりたちそひて にぎはひにけりしかれどもよのことなれば 松前の国のはたてにはろかなる西のえみしが あたみすと それか国よりはゆまして つかひまあれば やがてそのいくさとゝのひいみしくも むけ給へかば かけまくもあやかにかしこき皇神のみたまさきはへ 劔刃にちもつけずして ことゝくにたひらけまして まさきくもつゝみあらせずむくさかに御城ミキにつかせることの尊さかへしうた

たらしひめ神のみことのおほみたま今のうつゝにたふと  
きろかも

〔貞房著〕「おほまあつこ」〔より〕【と】\*「伊頭園茶話」

貞房はかねて、加藤千蔭の門に入っていたが、長秋もともに千蔭らの著書を求めて読んだらしい。千蔭から貞房にあてた手紙には、長秋の名もみえている\*。しかし文化五年には千蔭も没したから、いくばくも教えをうけるわけにはゆかなかつたろう。そこでいよく長秋らが正式に本居に入門することになるのである。

これを仲介したのは、もちろん大友直枝であつた。その年月のほどは正確に云えないが、直枝の江戸在住のころと思われる。このたび入門の御希望だそうだが自分からも師翁に申送つておこうとか、その際に贈るべき金子、短①【冊】のこなど、いろ／＼とこまかく注意してきている。長秋はこの書簡と、本居太平翁へいにさゝげる歌の草稿とを、貞房にしめて相談したのだろうか、今も高階家には、それらが保存されているそうである。

本居の大人の御前に奉る長歌 長秋

掛まくも可畏きかも ちはやふる神の御代よりゆゑよしの  
あやにくすしき神風の伊勢国はうまし国 常世の浪の  
しき浪のまたいにしへにたちかへり 貴きをちのいて  
まして 誠の道のみさかりにさとしたまへば はし鷹の出羽  
国ゆ はろ／＼にのぼりまゐてし直枝子が いとね

もころにこはすればそをうべなひて　しつ手巻いやしき  
われも　さはにますみをしへの子につらなめて　めし  
【くし】　みたまふと　ことつてをきゝのうれしく　かし  
こみもおもふまにくゝふみぞさゝぐる

かへしうた

八重たてる雲はろくゝとをろかみて　みことのさきぞあ  
ふきてをまたむ　【(大山重壽氏藏、焼失す)】

これを受けた太平翁は、新弟子の入門を喜び、次のような  
短冊をおくつてよこした。

出羽の秋田の久保田の鳥屋長秋　おのか教子(と脱)  
なりて　始めて文おこせて　長歌をもよみておこせけ  
るかへし

国遠く屋なりてはあれど翅なきふみしかよへば言かよひ  
けり【(和蘭)】(秋田史談会記録、大正四年九月十九日)】

菅江真澄翁が、ながらくの遊歴からいよく久保田城下に  
足をとゞめるようになったのは文化八年(二八一)の夏以  
来である。このとは何処に巨介(に脱)なっていたか明  
らかでないが、翌九年春には、寺内村の鎌田正家のもとに起

居していた。【○書簡】

当時、義和公が藩内の文運を振興さすべく、村瀬栲亭、山  
本北山らの学者を招き、また藩校を設置、拡充して、各人材  
をさかんに登用していた。和漢の学は車の両輪のごとく一つ  
欠けても相成らずと、かねて那珂通博に御相談あったと云う  
が、和学には適當の指導人物を得ることができなかった。ちよ  
うどそこへ現れたのが翁であったから、国学にはげむ一群に  
ばかりではなく大いに歓迎される処があったわけである。想  
像するならば、文化八年十二月から改称された明徳館に講義  
してくれるようすゝめられたであろう。(脱)しかし固辞  
して受けなかつた。そこで、改めて出羽六郡の地誌取調方を  
委任されるようになったかと思われる。

そのころの翁の日記をみると、遊覧をともにした人々の名  
が散見する。詩歌人として有名な那珂通博、書家の広瀬雲齋、  
江田純玉、淀川盛品、岩谷貞雅、樋口忠一などであったが、  
ふしぎと本居門人らの名前は、正家以外には現れてこない。  
しかし交際のないはずはなかつた。なんら肩書をもたぬ翁は、  
だれとでも気やすく語り、だれからも敬愛されたから、長秋  
らもしばしば訪れて教えを乞うたことであろう。(脱)もつ  
とも彼らは年もわかなく、友人と云うよりも、むしろ師弟の間  
柄と云う方が適用【当】だったのである。

真澄翁交友録 鳥屋長秋 『草園』未掲載分(二)に続く

文化十一年五月から真澄は雄勝郡へ地誌作製のためおもむいて、翌十二年三月、久保田へ帰つて来た。そして四月に、江戸に居つた高階貞房にあてて次の様な書簡を寄せている。これによつて、当時長秋は飛脚屋を止めて現在の秋田市五丁目横町川反に荒物屋を出し、妻を迎えたことが分かる。そしてやがて薬店を開らこうとして支度に忙しいとあるのは長秋の生活状態を知る上で誠に興味深い。

(前略) 小生事去夏五月朔日、久保田を発、雄勝郡へまゐり、当三月久府へ罷歸り随分平安に相暮候。乍恐御安慮可被下候。

大友対馬先生も御来臨被下候て唯御噂のみ、長秋事も五丁目横町河端、山本の隣家へあら物店出し、内室もむかへ追付、薬肆と変化いたし度の旨其支度にてかれこれせわしく俗用事多く随分くゝ無事にていづれ御下りを折角手を折り相待暮候。(中略)

此程長秋不明□十二月考有之候。其内、  
三月ヤヨシ やゝ生ひどき 菅江

四月 <small>ウツキ</small>	殖 <small>う</small> じき	〃
六月 <small>ミナツキ</small>	実成り <small>じき</small>	〃
七月 <small>フヅキ</small>	ふく実 <small>じき</small>	
八月	初穂 <small>じき</small>	
九月	いなあつうみ <small>じき</small>	

此考長秋よしと申もあり、よからぬと申もありしなり、御一笑可被下候。  
乍恐申上候、能登屋夫婦より御伝声に御座候、御心頭にかげられ、伴方見事なる御筆玉はりおとり上りよろこび申候由、乍失敬小子方より宜様御礼申上呉々様々申居候。  
早々

頓首 敬白

菅江真澄

四月十日

高階平吉様

尊下

(東山多三郎氏写、平野政吉氏感蔵<sup>11</sup>)

文化十三年には長秋は「語の伝へ道」と云う本を出版したといわれている。それは、「天寿歌句解」(天保三年書)の巻末に、後人の手で次のようにある。<sup>12</sup>

鳥屋長秋号千穂酒舎称宇助久保田十人衆町住御飛脚方御用ヲ務ム

明德館和学方教官 本居大平門

著述 語の伝へ道 文化十三年出版(菅江真澄書)

天寿歌句解 天保三年書

この註記は「語の伝へ道」の存在を明らかにするものとして唯一の資料であるが、いつごろ何人の手になったものか、その語句の書き方からさして古いものとは思えない。文化十三年に出版したその下に菅江真澄書とあるのはどういう意味なのだろうか。真澄が長秋の原本を添削しながら浄書をしたという意味であろうか。当時若年の長秋の書が木版となつて印行されたとすれば誠に驚くべきことであつた。それが江戸からであつたか秋田で印刷したのか、今はその原本も全く知り得べくもない。

文化十四年頃のものであるうか、真澄から長秋にあてた長文の書簡が残っている。南秋田郡の新城妹川大川の辺を巡遊していた真澄が寺社や古物の調査について長秋に報告している。日付は十一月二十八日。宛名は「千穂ノ屋長秋主」。差出人は菅江真澄とある。

その末筆に「別書と為候得者乍恐菅園主へ宜御伝へ 此乱

書も備貴覽度候」。菅園とは高階貞房の号である。(栗盛家蔵、菅江真澄集第六巻口絵写真<sup>\*13</sup>)

石井忠行が幕末から明治初年にかけて編んだ「伊頭園茶話」(秋田図書館蔵)に、

名長秋とて歌よみしもの、豊嶋町に住す町人也、元薬種店なりしが、薬九増倍の利という諺の如くにて冥利恐ろしとて止しといふ、真澄が製方の金花香と云、油薬の伝を得て今にひざぐ<sup>\*14</sup>

これは長秋の性格や生活をものがたる重要な資料であると共に長秋と真澄との親近さをしめすものである。

長秋が薬店を開いた年の程とは明瞭でないが前記の書簡にあるように文化十二年中には、あるいは荒物屋から薬店に転業していたかもしれない。雄勝郡の地誌作成を終えた真澄が文化十二年から久保田に居住していたことが、この薬種の開店については大きな力があつたに相違ない。本草学に詳しい真澄が、既に、生活のためにもとて、医薬の業にたずさわっていたことはほぼ明らかである。文政五年十一月の「笹屋日記」<sup>\*15</sup>には久保田中屋敷の土屋琴齋のもとから同町伊藤氏の温故亭に引移った真澄が、軒先には竹を植えて、

こゝを笹の屋と名付け、こゝに身をやすらい、老を楽しみ、仙薬をにて世にほどこしなれと思つたとある。

金花香油の製造販売も丁度このころ開始されたと推測してよからう。雑録集「風の落葉」<sup>16</sup>第二巻は文政六年頃、真澄が自ら編綴したものらしいが、この表紙内側に貼付されている反古紙<sup>17</sup>のうちには金花香油と墨書きし、その中央に角形の朱印を捺している半紙四分の一大の包紙が数枚使用されている。その文字はまさしく真澄の手のものであり、角印はいまだ解読出来ないが、文政五年末、明徳館に献納された真澄の著書の殆どすべての巻頭に捺されているから、真澄の蔵書印に相違ないのである。

金花香という薬名もおそらく真澄の命名になるものであつたことは推測される。そしてこの油薬が近年まで秋田市に命脈を保っていたことは興味ぶかいが別稿<sup>18</sup>「金花香油」に譲る。

長秋が薬店を止めてしまつた事情は「伊頭園茶話」にいうように、商売の利得にたずさわるにふさわしくない人柄であつたからにちがいないが、その時期は、文政八年の明徳館和学方に講釈するようになったのをよい機会として店の経営は他の者に譲り渡し、自分は好きな歌道に専心したものと推察される。

秋田市に近年まで在住していた鳥屋氏の総本家登利屋市太

郎氏の祖父の頃までは、その家が薬屋であつて、大きな薬たんす等があつたものだと言われているそうだから、おそらくこの人達が長秋の店をついだものであろう。金花香油はその後販売権が秋田市の佐野薬局に移つて、近年まで製造されていたのである。

真澄が笹の屋に居を構えていた当時、訪ねて来た人の名前のなかに千穂屋長秋の名が文政五年十一月二十二日及び翌年一月三日の箇所に見えている。「笹屋日記」

また真澄も長秋の書屋を随時訪れていることは、「筆のまにまに」<sup>19</sup>第六巻末には、「文政七年甲申五月九日、千穂屋にて書おへぬ」とあることから知られる。

文政七年は、長秋ら国学を学ぶ人達にとつて記念すべき仕事をした年である。彼らが国学の師と仰ぐ本居宣長の木像をつくつて、明徳館に安置し、秋田の国学の隆盛をはかろうとしたのは一つの示威運動であつた。この努力もあつてか、翌年から明徳館に和学方が開設されたのであつた。まずこの木像を作らうとして、土崎宗直、鎌田正家、鳥屋長秋らが発起人となつて、有志の寄付をうながした時の次のような趣意書<sup>20</sup>が今も残っている。

月を見花を見てなぐさむ人のとりくくなるがごとく何わ

ざにてもおのが好むかたに心引も人情のつねといふものから古学の道はかしくも皇国の古へをしたふわざにしあればその国に生れて其恩を謝するまで（こゝ脱）そなけれ、たれかは愚かにおもふべき、そもく吾本居大人は博覧強記にして古学の道を大成しはた言の葉の道に精妙なりしことも古今の間にして卓越なりしも世の人の知る処なり、長秋等つらく思ふに伊勢の海きよき渚に寄る人はいふもさらなりなべて言の葉の流れの末をくむ人々にいかで其恩を謝せずしてありぬべき、吾同志の友画像を秘蔵すといへども紙墨はもろくして久しくたもちがたければこたび木像に刻して不朽を議るにしくべからず、かくて高三尺にして坐せる形を莊嚴し靈前に文をす糸外圍は屋形のごとくして内三方は山桜に旭の映ずるさまを極彩色に図かせて拝前は四枚の障子にして来る九月廿九日忌日までその功をへて年ごとの祭礼怠りなからんことを議するといへども、資用とぼしければ御心あらむ御方々へ其助成を乞ふべく文台に一軸を表装して歌にまれ文にまれ俳諧狂歌にまれその巧拙をえらばずして御吟詠を姓名と共にしるし供へて弥遠長に後の代にも伝へんことを希ふ処なれば御寄付の程を願上侍る。

土崎宗直

文政七年甲申八月

久保田鎌田正家

鳥屋長秋

なほこの趣意書は現在二通残つていはいはれる。田村巖氏のものど川辺良蔵氏旧蔵（ともに秋田市）のものである。ここに掲げたのは田村氏蔵のもの転写で、それは「手向の紅葉 全」と題され、その表紙裏には、

この巻は矢橋村縣社日吉神社内に御安置の本居大人の画像を造らむとて土崎宗直鎌田正家鳥屋長秋諸氏ら發起人となりて有志者に寄付をうながし、時のなるらし、かくてこは菅江真澄の真蹟なり

明治三十年四月

大山重華記

とある。

大山重華<sup>22</sup>は、大正七年八十一歳で没した勤皇家で久保田藩士、大学南校に学んで、秋田師範学校の前身太平洋学校に教鞭をとり、古四王社の宮司となった人である。（中島耕一氏の宣長大人像と真澄翁 草園第二十二号）

前記の趣意書が真澄の真筆であるか否かは原本を見ない自

分には真偽の程は明らかでないが、想像すれば長秋あたりが原文を作ったのでなかるうか。それを真澄に添削をこうて真澄筆の清書が残っているといっているのであつたかもしれない。同年八月には真澄はすでに地誌作成のため平鹿郡に出発しているのである。なほ中島耕一氏によれば、

本居大人像は最初藩の学校明德館に置いたものであるが、安置の場所が無くて、はじめ五巷学校（現在の旭北小学校の前身）に置いた（大沼氏談）<sup>\*23</sup>が、明治六年頃現在の日吉神社へ移したものだというのが、日吉神社でも亦場所困じ果て、真暗な奥殿に、日の目を遮つたまま現在に至っているのである。さる日社司の好意で拝観の機を得たが、趣意書にある通り坐像三尺位、耳大きく口は小、顔広く、上衣は黒、その下に藍色の襟が見えて居り、下衣の白い襟ものぞかれる。唇の朱のみは色鮮かであるが、全身処々色が剥げて居り、埃が真白である。内側には文政七年甲申歳九月吉日 秋田久保田鉄炮町内海貞蔵房義作 の文字が誌してある。「外囲は屋作」とある通り一間四方位の屋作の中に安置され、内部には「朝日に匂ふ山桜花」にちなむ山桜と旭が、さしのべた蠟燭の灯に美しく映じた（草園二十二号菅江真澄特集号）

宣長の像を作るにあたり、秋田で第一の門人である大友直枝の名が趣意書に見えないのは不審のようであるが、彼は平鹿郡八沢木の山奥にあつたので、こゝに加えるわけにはゆかなかつたのであろう。しかし、九月二十九日の献納式には招かれて参列したと思はれる。そして、明德館に和学方開設を運動中の長秋等の様子を見聞きしては、もはやたまりかねたのであろうか、文政七年に秋田市五丁目付近に、大友直枝が国学を講ずる私塾をもうけた。（片岡四方助筆、明德館和学付設二付キ草稿、秋田図書館蔵）<sup>\*24</sup>

当時、長秋が薬店を出していたところが、秋田市の五丁目横町であつたというから、この私塾もその付近で、おそらく長秋の世話によつたものに相違ない。否むしる長秋が設けたもので、そこに大友直枝が講師として招かれたとさえ推測されるのである。

明德館に和学方が開設されるようになったいきさつについては片岡四方助の書面によって当時の事情が残されてある。（明德館和学付設二付キ草稿、天保十四年卯十月祭酒野上先生へ差出候草稿、秋田図書館蔵）<sup>\*25</sup>

これによつてみれば、文政八年八月大友直枝は五人扶持、鳥屋卯助は二人扶持を以て和学方に勤務することになつたこ

とが知られる。町人である長秋にとつては念願とする国学だけによつて生活しうるといふことは最大の喜びだったに相違ない。もっとも、大友直枝が源氏物語、古事記などの講義をしていたので、長秋がさして表面にたつという程のことにはなかつたであろう。しかし長秋が、金花香油などの販売をしていた薬店を、人に譲つてしまったというのは、おそらくこの頃であつたのではなからうか。

前年の秋から平鹿郡にあつて、地誌作成を開始している真澄から明德館に長秋を通じて巡村の費用を請求してきていることが、明德館の祭酒野上陳令の記録に残っている。

野上陳令の「御学館文学日記」の文政八年十月廿三日の箇所に、

菅江真澄平鹿郡旧跡吟味被仰付去年中罷越段々回村此節大略相片付 此程横手近在既二吟味成就仕候、去秋中出立之砌旅装御合力拝領被仰付其後吟味形存之外延日二罷成衣服零落内々如何共迷惑仕候、因而御積を以御合力被仰付被下度趣、鳥屋卯助宿を以願申出候二付申合之上  
銀百目被下置候趣 桑原元伯へ申渡候

(秋田図書館蔵)

やはり同【前】<sup>27</sup>年七月二十六日にも高階貞房を通じて同様のことを願ひ出ているが、十月には長秋の手を通じているところから、明德館に長秋が席をしめていたことを明らかに語っているのである。久保田領における国学も、ようやくこのようにして芽生え、そしてだんだん成長していったのである。しかしこの状態も長つづきはしなかつた。文政十二年六月には、とかく病身であつた大友直枝がおしくも病没した。そして同じ年の七月には菅江真澄も仙北郡の旅先にあつて死去してしまつたのである。長秋が真澄の墓碑に長歌をしるしたことは最初に述べた通りである。

この建碑にたずさわつたのは真澄の知友鳥屋長秋、鎌田正家、土崎宗直らであつたが、その際、これらの人も、ここを墓地としようと語り合つていたことは、「伊頭園茶話」の次文にしるされている。

真澄がおくつきは南に向ひ、おもの川を前にして大海原を見渡し、勝平山の方に鳥海山をふりさげ見るなど、詠めいとおもしろければ、土崎宗直（八橋ノ日枝ノ社ノ神官、チサドノスガ）鳥屋長秋（称宇助）鎌田正宅（みな歌の友也）三人とも此地の眺望をめめて且に菅江の奥津城もあれば、各々こゝに葬られんとかたらひ置しが、宗直、

長秋かくれし時、其子等議て祖先の墓をはなれて一人そこにはぶりては道も遠く、ゆくすゑ便宜よからずとてやみしとぞ。これも孫六が語る

(秋田図書館蔵)<sup>※28</sup>

しかし、この文にあるように、こゝに葬られたのは、鎌田正家だけで、長秋も、宗直もそれぞれ自分の墓地に葬られているのである。これを石井忠行に語ったのは、正家の養子孫六であった。

真澄の死後は長秋の身边も急に淋しさを加えた。明德館の和学の勤務のことも、直枝が病没した後は長秋の身にも変化がおこったのではなかつたらうか。片岡四方助の記した草稿への大山隼人の付記によれば、その後は、大山隼人、瀬谷小太郎、片岡監物等の名は見えるが、長秋の名は全く絶えているから、その時を機会に役を引いたのではなかつたかと考えられる。

そしてその後の長秋の生活状態はどのようなものであつたか、おほかたを想像するだけであまりうかがひ知るような資料が残っていないことは残念である。

真澄の雑葉を蒐めた〔無題雑録集〕<sup>※29</sup>(原本は能代市安濃太郎氏旧蔵、焼失す。栗林次郎作氏写本による)の裏表紙には

「ちほの屋蔵書」とある。これはおそらく真澄が書きためていた草稿を長秋がもらいうけて一冊にまとめた本なのであつて、そのために題名も付せられずにあつたのであろう。長秋がこれを編んだのは、真澄が平鹿郡に地誌作成にたつた後か、あるいは没後であつたと考えられる。

長秋の亡つたのは天保十二年であるが、天保三年には、「天寿歌句解」という本をあらはしている。今、秋田図書館のその書をみれば、半紙版で表紙に「天寿歌句解(全主)」と書かれ墨付百頁程の本である。内容は次の如くである。<sup>※30</sup>

#### 天寿歌句解

擬古風二正音五十以賦寿

出羽国秋田 御民 鳥屋長秋謹詠

阿米能 斗伎波那流 久邇余呂斯

天上 在於無窮 国 美好

衰知要弓添以勢奴 和礼多于羽

得変若而 不毛 吾植田

古良母蘓比泥 韋富理 由布幣美豆麻気

子等亦可添 堀井 夕方令引水

須惠伊夜佐加延牟

未彌 将豊穰矣

此は己が作りつるを己が解説せむはいと物々しき事なれども今より廿年あまり以前年にありけり、仮字用格の書籍等を見てふとおもひけるは五十言無同字して歌賦見むとてそれより年月思ひめぐらして物したりしをかく拙く五七句も調はずしてありけれ共いたく辛勞きなしつれば徒に搔やり捨むもさすがにて同じく古言字びせむ輩のいさゝか益にもなれかしと古書等を某々と引出言句の証とすなるを物識人の視たらむにはくだくだしくいやしとや思ふらむ其はいと心ぐるしき物から今は黙然しかねてえしもしなめずして思ふ意をいはむとす。

○天寿歌句解を阿米能本伎宇多能都賀比能登伎暮登と訓てむ。○天は天上にて高天原をいふ寿歌は祝辞歌なり(後省略)

そしてこの書の文章の最後には次のようにある。

天保の三とせといふ年の七月の五日の日書をへつ 鳥屋長秋

長秋はこの書に言っている様に二十年程以前に仮字用格などに刺戟をうけて、本居宣長のいろは歌に擬して自分も作つ

てみたのであつた。そして註解に自分の学殖を傾けて一冊としたものであつた。現存の書は長秋の直筆であつたかどうか不明だが、それは出版されたものではなかつた<sup>※31</sup>。

ところが、おなじ五十音歌が、次のように一枚刷りになっているのを写している人があつた。(東山多三郎編筆写集第七 秋田図書館蔵<sup>※32</sup>)

「阿米能本岐語 擬古以正音五十賦寿詠 秋田 御民鳥屋長秋謹詠」とあり、次に前出と同じ、阿米能 斗伎波那流(後略)がしるされ、その後に書かれていることは、

此五十<sup>イソモジ</sup>字のうたはしも五十連音の靈妙なる徳用<sup>ハタラ</sup>きのまにまに片かなのイウエの三<sup>ミ</sup>もじに、<sup>コ</sup>を点してかりにヤワの二<sup>フタ</sup>くだりのイェウとして古風<sup>イソフマ</sup>にならひてよましたるを<sup>コノ</sup>匣<sup>コノ</sup>中より一ひら見出<sup>ミイデ</sup>つれば、いたづらにちりうせむもさすがにて阿米の本岐歌と名付てさくら木にゑらせつかまをすは、即此<sup>ヤガテ</sup>よみぬしの子安助

長秋がこの五十音歌をはじめて作ったのは文化十年頃であろうか。そして文政四年末に息子安之助を失つて、所在なきに書き溜めた雑用箱をのぞいた時にそれが現れてきたので、それを亡児の記念のために木版に刷らしたのである。よつて

これは文政五年頃のものと考えられる。

後それに註解を付して「天寿歌句解」と題して成書にしたのは天保三年だったのである。これが当時どれほどのひとたちに読まれたものか、判ずべき資料は全く残っていないようである。

秋田市寺町の大悲寺には鳥屋家の墓石がいくつか建っている。「鳥屋卯助長秋墓」として「月峰浄心居士」同じ石碑に並べて「安堂寿寧信女」これが妻の戒名である。長秋は天保十二年八月二十二日没している。妻は嘉永六年八月二十二日亡っているがその名前は分らない。この側に、長秋の子供の墓がある。墓石の正面に地藏像を浮き刻りにして、その下方に「鳥屋安之助墓 文政四年十二月二十九日」その墓石の側面には亡き児をしのぶ長秋のしるした長文が刻つてある。

しはすの十日ころより、たうさうやみて、おもけれと葉もまゝもたうべて、いとうれしく、かくては日にくひたち。(不明)□□思ひけるに、おなかのよわさに、心づかさりしほとに廿九日のおかつきかた、二つにてなくなりぬ。文政三年庚辰九月廿五日に生れたりき鳥屋長秋

このあとに長歌を三行刻してあるのだが磨滅してよくわか

らない。唯その最後の箇所は「吾子安助をしやかなしや」と読める。その子供が長秋の一人子だったようである。付近の墓石は、天保二年になくなった鳥屋儀兵衛、天保七年になくなった鳥屋治左右衛門一家などの名がみえるが、これらと長秋との関係はどのようだったか明らかでない。

長秋は一人児安助を失つてから養子をしたように伝えられている。「秋田人名辞書」(安藤和風著昭和七年刊)には鳥屋真秋として「歌人 久保田の人 長秋の養子」とある。そして同書には「山本真秋」として「歌人 久保田の人 称善治 菅江真澄頃」とある。これがおそらく同一人物をさしているのではないかと私には推測される。

「伊頭園茶話」第二十卷には、長秋の甥に善蔵、号を真秋という者があつたことを次のようにしているから、これがおそらく養子として鳥屋の家をついだことになったのかも知れない。

真澄みまかりて後、長秋が甥なる山本善蔵名真秋(貼付など世渡とす)といふもの、伊勢に詣でし時「三河の渥美郡小国なる」真澄かふる里を尋行しに農家ながら、ゆゑよしある家と見へ、かさ門の構へ也。此国とてもなかくの土民タミかさ門建ること禁制なれば、郷士などいふも

のにや、十日二十日逗留せしとてさのみ心うからぬほどのかとくと見ゆれば、孫六に官途の上京もあらば（神官たりし時、いふ事あり）立寄りて然るべしと善蔵が申しせしとぞ。

善蔵彼の家に至り真澄が身まかりしより鎌田正宅、とやの長秋が事などねもごろに語るに、一家みなその厚きころざしをよるこばへて何国イックいかなる処にていつ終りにやと、折からは噂して明し暮らせしと云しとぞ。かれば打絶て真澄は音信もせずありしなるべし、いかなるゆゑかありけむ

（秋田図書館蔵）<sup>33</sup>

これはまことに興味ぶかい一文ではあるが、果して長秋の甥が三河の真澄の家を訪ねあてることが出来たかはすこぶる疑問である。一体、真澄の生家とはどこを指すのであろう。長秋らが渥美郡の小国と聞いてあつたとすれば、そこを探しあてたとはどうも思えない。真澄が三河に在った頃、両親らと移転した岡崎の家をたずねたとすれば、あるいは……とも考えられるが、五十年程前に家を出た人を記憶する者が事実そこにあつたものかどうか不思議にたえない。若年の善蔵に、そこへ行くように指示したのは長秋であつたに相違ないが、

この話はどうも全くの架空談※のように私には思はれるのである。

「伊頭園茶話」の筆者石井忠行がこの話をきいたのは、鎌田正家の養子孫六からであつたとは、本文中にあきらかにこゝとわつてある。その孫六と友人であつた善蔵が、お前も京に上る途中折あらば寄つてみるがよからうとさそつたとあるのは、いかにもありそうに見えてこの話の裏がうかがえるようである。

これは旅から旅に一生をすごした真澄の淋しかつた最後を生れ故郷に知らせ、漂泊のたましひをなだめようとした、當時の、長秋ら友人達の気持が自然にこの様な説話を生れさせずには居なかつたであらう。

長秋の甥の名を善蔵といつたか、善治といつたか、明らかでないが、この人が長秋の養子になつたとすれば、その墓石も付近になければならないが、長秋夫婦の墓もその一廓の最終らしい場所にあつて、その付近には、新しい墓は見えないようである。

養子真秋はどのような事情からかまたもとの山本家に復して、こゝに葬むられなかつたのではなかつたか。すなわち長秋を祀る子孫は絶えたものと推測される。そして、今もこの一廓は墓石ばかりで、まつる人として絶えて見られないので

ある。

次に長秋の作歌で年次不明のものが幾つか発見されている。それを順序もなく最後にあげておこう。

一は藩主佐竹家に産があつた際のことであろう。

二もある年のはじめに藩主に対してよんだ歌である。

三は高階貞房が参勤交代で江戸に上るさいに読みあたえたもの。

四も同様であろう。これは短冊になつて残つてゐる。

五は某年八月十五日の月を新屋の浜辺に友人らと共に出掛け読んだ歌である。これには鎌田正安、伊藤長寿、堤守文らの同じ題の一文があつめられている。鎌田正安は正家の父である。

一、「本吉詞 一首 鳥屋長秋」と包紙の表に記して、大形紙に次の様にある。<sup>35</sup>

御産屋に木兔の飛入来つるはよきしるしなりければ、ほぎてよみてまぬらす

鳥屋長秋

いはまくもあやにたぶとき鏡なすあきらの宮に 天の下

唐国かけてしろしめすめら天皇の 大御子のみあれた

まひしみうぶやに つくちふ鳥のいり来つるしるしよろ

しみ 高御座うけつぎまして御民らのみめぐみ賜ひ み

とせまで貢ゆるして国々の栄えにきひし古事をいま猶ほ

めつ 玉たれの吾うるはしき小場の君わく子ちはひて

御産屋につくちふ鳥の入来つるしるしよろしみ ひたら

して人となりなほかしこきや 君のみことにまめやかに

つかへまつりて 家の名もその高くよもやまにきこえあ

ぐべき君となりこそ

式内の宿禰の御子の木兔すく禰 小場の君の子名をあ

ゆぞよき やがて御子を木兔蔵と名づけたりとき、侍り

て

(福地発明氏蔵)

二、年のはじめに<sup>36</sup>

みつぎちふ雪はあわにぞふりにける君がみとしはゆたに  
栄えむ

御民 鳥屋鶉助長秋千穂屋

三、貞房君の江戸へのぼり給ふときよみて奉る<sup>37</sup>

玉梓の道はまさきく ゆくさくさあり かよひませはし

き我が君

(高階貞房著「於本万阿羅古」伊頭園茶話から抜く 秋田図書館蔵)

#### 四、短冊<sup>※38</sup>

玉ちはふ阿須波の神にいのりつゝ、

いませ吾君道の長手を

長秋上

(福地発明氏蔵)

#### 五、海辺月<sup>※39</sup>

今宵は秋のなかば例の友のうちつどひければ、ふといひあはして、いづことせとなうふくべてふ物を腰につけ、さかなは木の葉につゝみなどして、なにくれとかたらひつゝ、はふくと秋の野をわけゆけば、日もいたうくれかゝりて、あらやの浜辺にいたりぬ。うち見渡さるゝあをうなほらは、浪風もしづかにおほそらは雲きりもいとよくはれたり。ましてくまなき月の花やかにさしいでつるなん。いひしらすおもしろう興あることにめであへり。かくて見ぬもろこしの国までも、心のうちにうかぶやうにおぼゆれば、むかし仲丸ぬしの三笠の山にと詠し玉へるも、今さらに思ひ出されて、糸ひもうちとけしめや

かに、皆人古へしのぶ心のせちなるにや、涙ぐみで歌よみなどするに、おのれもかくなん。

から国へゆきし人かもつり舟の

月かげきよみこいかへるらん

なきのよさにめでゝとりく口すさみしるほどに、あまどものあともひたつるまで、ながめをりつ。

鳥屋長秋

(東山多三郎編、筆写集第七、秋田図書館蔵)

#### 註

※1 内田武志は全集別巻一「墓碑建立」で、梅沢村(仙北市田沢湖梅沢)の大石家で死没したとの伝承を採用し、真澄の身元引受人である鎌田正家の指示により、鎌田家の親戚である角館神明社の神職鈴木淡路守の居宅に亡骸を移したと推論している。なお、神明社の主祭神は天照大神である。そのため、伊勢神宮との関わりから「オイセドウ」とも呼ばれる。

※2 藩政時代の秋田郡が明治になって南北に分かれて南秋田郡と北秋田郡が成立したことから、真澄の時代における呼称は、秋田郡寺内村である。

※3 内田武志は、全集別巻一「墓碑建立」で、本来の「ゆ」に変えている。「ゆ」は、「くから」を意味する上代の格助詞である。

※4 出典と内田武志による追記が意味するのは、『伊頭園茶話』十の巻（『新秋田叢書』第八巻302頁に掲載）に、

高階貞房著『於本万阿羅古（おほまあらこ）』から引用したとの記述があるということである。なお、当館『真澄研究』第十八号（平成二十六年三月）で、大館市立栗盛記念図書館（翻刻当時の名称は大館市立中央図書館）蔵本の『おほまあらこ』を翻刻したが、その中に該当する記述はない。

※5 全集別巻一「鳥屋長秋」で、大山重寿旧蔵の資料に「書物代、長秋分共二別紙御書付之通、都合員数相改、慥二請取申候」とあったと紹介する。実資料は、内田武志が昭和二十二年に借覧した後、大山家の火災で焼失した。当館内田文庫には、内田武志による借覧の際、透き写しされた資料が残っている。

※6 本文にあるように、長秋が本居大平に関する大友直枝との遣り取りを高階貞房に相談したことから、当該資料が高階家（次男大山重華の子孫である大山重寿家）に残ったとしている。実資料は焼失したが、註5と同じく、当館内田文庫には、透き写しされた資料が残っている。

※7 註5、註6と同様、透き写した資料が当館内田文庫にある。その資料に基づき、本誌57頁に翻刻する。

※8 秋田県公文書館・東山文庫蔵だが、正確な資料名は『秋田史談会記事』。AH204-19。『秋田史談会記録』とは別資料である。

※9 内田武志の追記にある「○書簡」が何を指すのかは不明であるが、文化九年二月の《水の面影》で寺内周辺を記述していることや、同年七月の日記《月のおろちね》では、寺内から鎌田正家を伴って出発しているから、真澄が文化九年当時、鎌田家に起居していた可能性は大きいだろう。

※10 地誌編纂のため、真澄が雄勝郡へ赴いた時期と期間については、次に示す書簡の内容による。

※11 実資料は館蔵。翻刻は、全集第十二巻184頁にある。

※12 秋田県立図書館蔵『天寿歌句解』（写本）の識語として書かれている。『天寿歌句解』の内容を伝える資料には、『秋田の落葉二十五』（大館市立栗盛記念図書館真崎文庫、M16-125）もあるが、これには該当する識語がない。『天寿歌句解』の内容を知るには、両資料を補い合いながら読む必要がある。

※13 所蔵先として「栗盛家蔵」とあるから、本来であれば、その後大館市立栗盛記念図書館の所蔵となるべき資料であ

る。昭和三年九月の栗盛教育団発行の目録（真崎文庫M-3）には「書簡鳥屋長秋宛」として掲載されているが、昭和二十六年八月の大館市への寄贈の後、初めて大館市立栗盛記念図書館によってまとめられた昭和四十五年十二月の目録にはいくつかの真澄関連の資料とともに掲載されていない。大館市に譲渡されることなく所在不明になったものである。このため、現在においても、秋田叢書別集菅江真澄集第六巻の口絵写真が資料の実際を伝える唯一のものになっている。

※14 『伊頭園茶話』の所蔵は現在、秋田県立図書館から秋田県公文書館に替わっている。該当する記述は、『伊頭園茶話』七の巻（『新秋田叢書』第八巻16頁に掲載）。

※15 《笹ノ屋日記》は、全集第十巻に翻刻されている。

※16 《風の落葉》第二巻は、現在、秋田県公文書館蔵。

※17 全集別巻一「鳥屋長秋」（530頁）に写真が紹介されている。

※18 『草園』春季号以後、内田武志が「金花香油」について述べるのは昭和二十八年刊の『菅江真澄未刊文献集一』、さらには、全集第五巻解題「本草・医療」においてである。

※19 現在の大館市立栗盛記念図書館蔵本である《筆のまにまに》全九巻を全巻翻刻したのは、全集第十巻である。

※20 全集第十二巻「断簡」（137）で改めて翻刻され、解題に「秋田市・原武男蔵」とあるが、現在は所在不明である。

※21 本資料の内容は、『草園』第二十二号・菅江真澄特輯号（昭和十八年六月）からの引用である。大山重華が識語に「菅江真澄の真蹟なり」と書いたことや、内田武志自身が全集執筆に当たって実見していることから（所蔵が明示されている）、引き札の下書きを真澄がおこない、それを版行したものと内田は判断したのだろう。そのため、真澄の遺墨資料として全集第十二巻「断簡」に（137）として掲載したものである。ただし、本資料と全集掲載の資料には、いくつか文言の相違点があることを指摘しておきたい。

※22 大山重華は、高階貞房の次男である。

※23 引用箇所は、『草園』第二十二号（註21）からであるが、傍線部分は内田武志による追記である。傍線部にある「大沼氏」は、本居宣長像が納められている日吉八幡神社（秋田市山王）の当時の神職である。

※24 現在、秋田県公文書館蔵・東山文庫AH372-18（翻刻の謄写版がAH372-17）。

※25 資料名が若干異なるが、註24と同じ。

※26 現在、秋田県公文書館蔵・混架8—699（1—31）。

※27 内田武志は、清書原稿にある「同年を、鉛筆で【前】年」と訂正している。しかしながら、現在、秋田県公文書館にある資料の実際は、元原稿の通りに「同年」である。内田の誤解は、文政八年十月二十三日の記述にある「去秋中立之砌旅装御合力拝領…」の「去秋中」と七月二十六日を結び付けて、文政七年のことと考えたためであろう。この誤解は、全集第五巻と全集第六巻の解題まで続くことになる。繰り返しになるが、地誌編纂をおこなう真澄への援助が藩校明德館を通じて願い出されたことがわかるのは、野上陳令『御学館文学日記』の文政八年七月二十六日、同年十月二十三日の記述となる。秋田県公文書館蔵・混架25—29—2。

※28 『伊頭園茶話』二十の巻で、翻刻は『新秋田叢書』第十巻6頁にある。

※29 旧六郷町の郷土史家・栗林次郎作が写した『無題雑葉集』は、現在、当館の所蔵となっている。

※30 秋田県立図書館蔵本のことである。

※31 出版されたか否かについての判断は、根拠を示すことができない推測でしかないため、内田自らが削除線を引き

たものであろう。

※32 東山多三郎編『筆写集第七』は、現在、秋田県公文書館・東山文庫AH159—34。

※33 『伊頭園茶話』十の巻、翻刻は『新秋田叢書』第十巻6頁。

※34 内田武志は、ここでは善蔵の話を「架空談」としているが、全集別巻一では、善蔵が真澄の実家の住所を故意に変えて伝えたとしている。これは、真澄が当時の下層民に関わる「白太夫の子孫」であったとする内田の論拠の一つとなった。

※35 全集別巻一・547頁では、大山寿重旧蔵の資料で焼失したとしている。原稿に、秋田市大町で表装店を営んだ「福地発明氏蔵」とあるのは、焼失した資料の写文であったためであろうか。

※36 『伊頭園茶話』十の巻で、『新秋田叢書』第八巻308頁に掲載。

※37 同右。

※38 全集別巻一・547頁に写真のみ掲載されている。当館内田文庫にあるメモ書きによると、個人に所蔵が移ったことがわかるが、その後は所在不明である。

※39 註32に同じ。現在、鳥屋長秋「海辺月」は当館蔵で、本誌54頁で紹介している。

## 鳥屋長秋遺墨資料の翻刻

松山 修

鳥屋長秋遺墨資料の翻刻にあたって

真澄研究で長く話題になってきているのは、「菅江真澄は国学者か」ということである。私見では、真澄を当時の国学者として捉えて良いと考えるが、ただし、「当時の国学」をどう捉えるかなどの前提なしには、そう断言することには躊躇する。

本居宣長が国学の入門書として著した『うひ山ぶみ』には、「神が始めた道」を学ぶ内容として、神学・有職・歴史・歌学が挙げられている。また、漢意に染まらない時代の歌や文章をまねた実作を重んじるとしている。そして、宣長自身が『古事記伝』などで示した文献に基づく実証主義は、現代の国文学や国語学にも発展している。内容や方法としては、文学にかかわる面が大きいのである。

歴史的に見ると、国学はその思想性に注目がいく傾向にある。だから、真澄を国学者として規定すると、国学の定義についての共通認識がなくては、その言葉だけが一人歩きをずる危険がある。

一方、真澄の周りにいた、大友直枝、鳥屋長秋、高階貞房、鎌田正家、是観上人等々の人物についてはどうか。

これらの人物については、「国学者である」と何の躊躇もなく規定されることがある。もちろん、秋田の人名事典にそう書かれていることもあるのだが、私を含め、それが何に基づくものかは検討しなくてはいけないだろう。本居派(本居大平)の門下にいれば、それで国学者と呼べるのかなど、長らく疑問を持ち続けてきた事柄である。

大友直枝については、藩校明德館和学方で指導にあたったことに加え、国学者と呼ぶに相応しい著作も知られている(渡部綱次郎『近世秋田の學問と文化―和學編―』、平成十一年、私家版)。

鳥屋長秋については、やはり大友直枝と同じく、藩校明德館和学方で教えていた事実はあるが、著作や遺墨資料などについては、まとまっては紹介されてこなかった。

鳥屋長秋の代表作であり、現存する唯一の著作に『天寿歌句解』がある。これを長秋自身が「アメノホキウタノツカヒ

「ノトキゴト」と読むように、当時の国学の一側面である、現代でいう国語学の成果を著したものである。―今年度、この『天寿歌句解』の翻刻を試みていたが、煩雑で複雑なルビがあることなどから、今回の本誌への掲載を見送った。次号以降に紹介することにした―

長歌は万葉の時代に多く詠われ、その後は衰退したものが、長秋が長歌を詠うのは、国学への志向を示すものとして評価できる。

これから紹介する遺墨資料の内容と、真澄の文章や書簡等に出てくる鳥屋長秋の姿をあらためて捉えてみることで、ひとりの国学者としての鳥屋長秋の在り方を考えてみたい。そのための素材として、今回翻刻するものである。

(秋田県立博物館 主査兼学芸主事 松山 修)

※資料の実際は、図版を巻末に付けたので御覧いただきたい。

## 1 詠草(館蔵)

卷子、本紙19・0×100・0

本資料には夏に関する十の歌題について、それぞれ二首ずつ書かれている。解釈の便宜を図るため、傍註位置に漢字を宛てるとともに、誤字を訂正する。

### 詠草

#### 新樹

をちかたの木むらを見れば水鳥の  
青葉しげれる夏来たるらし  
白雲と見えにし花のよもやまは  
あを垣なせる夏もうるはし

#### 時鳥

あし引の山ほとゝぎすはつこゑは  
をきゑをせむに吾やどになけ  
今きゝし耳によくすむほとゝぎす  
また一声をなかせてしかも

#### 夏月

おほしき浮雲はれて月きよみ  
見れば涼しもなつの夜のそら  
いぶせみと庭におりたち夏の夜の  
月をし見れば袂すしも

#### 鵜河

五月闇雨のふらくにかゞりさし  
う河たつ間にさ夜ぞ明にける  
明日のよも此瀬にたてむきを舟に  
うをかひゆかなさはにえにけり

早苗

たなぐもり小雨そぼふるをとめらが  
早苗とる田にたちつかるらし  
むかもゝにひぢかきよせていづくとも  
をとめますらをさなへとするなり

五月雨

あし引のむかふと山も見えぬまで  
雲立きらふさみだれのそら  
をとつ日もきのふもけふも五月雨の  
雨まもおかず日ならべてふる

夏草

きのふこそすみれつみしがこきたく（巻）に  
夏野の草とあれにけるかも  
秋さらば千種に花の咲ましを  
なつはひとつの野への草原

夏恋

涼みにと人にはいひてゆふつゝの  
かゆきかくゆき妹まつわれは  
夏の夜は寝ぬにあげぬと吾妹児が  
うべもいきつくけさの別路

夏旅

椎の葉のかれい（乾）ひだにも物うきを

あつきにいとゞ家しおもほゆ  
草まくらけ長き旅の夏の日に  
やまぢこゆるかいともくるしさ

夏祝

大御世はやをよろづよと皇神を  
ゆま（新）はる（る）なつのもりの涼しも  
柳葉のさかゆく御代は万世と  
夏だにい（賤）はふし（の）づ（男）のをわれも

長秋上

## 2 「奉賛本居大人」（館蔵）

卷子、本紙15・3×56・7

本資料は、本居宣長を讃える長歌と短歌で、漢字の音訓を  
借りた宣命体で表している。

漢字だけで書かれているため、解釈を含めた読みを句ごと  
に示す。また、短歌の読みについても、句を一字空きにして  
示す。

奉賛 本居大人以聊述心緒侍

（聊かの心緒を述べ侍るを以て、本居の大人を賛じ奉る）

長歌

長秋謹言

掛麻久波	かけまくは
阿夜爾可畏斯	あやにかしこし
伊豆能売之	伊豆能売(いづのめ)の
伊豆能御魂夜	伊豆のみたまや
曾波理祢牟	そはりけむ
吾本居能	わが本居の
宣長之	宣長の
大人能功績者	うしのいさをは
彌高伎	いや高き
山袁那須加母	山をなすかも
彌深伎	いや深き
海袁那須加母	海をなすかも
石上	いそのかみ
賦琉伎御書籍等	ふるきみふみら
廣見斯	広く見し
厚思保志	厚くおもほし
訶斯古伎夜	かしこきや
皇御国叙	すめらみくにぞ
神代用理	神代より
真事之説波	まことの説は

傳波流登	つたはると
覚見出豆	おぼえ見いでて
浅茅原	あさちはら
都々婆々羅々爾	つばらつばらに
登伎賜比	とき賜ひ
明良米賜比	明らかめ賜ひ
玉矛能	たまほこの
麻許登能道者	まことの道は
此道登	この道と
教賜幣豆	教へ賜へて
佐牡鹿乃	さをしかの
和毛之真筆	にこげのまふで
伊登良志豆	い取らして
書所著	かきつけらるる
言能葉波	言の葉は
見能美麗左	みのうるはしさ
真芳野能	まよしのの
山乃桜能	山の桜の
爾保布碁登	にほふごと
名尔負伊勢能	名に負ふ伊勢の
神風爾	神風に

※「い」は接頭語

鳥能聲那須

鳥の声なす

言左閑久

言さへぐ

訶良能雲霧

からの雲霧

吹波良比

吹はらひ

天都月日之

天つ月日の

御淤毛和能

御(み)おもわ(面輪)の

御影母清久

御影(みかげ)も清く

加賀與可志

かがよかし

如此流伊蘊志伎

かくるいそしき

美志和邪波

み(見)しわざ(技)は

伊登母貴志

いともたふとし

天地之

あめつちの

曾伎間能極美

そきへのきわみ

麻伎奴登母

まきぬとも

麻多此大人波

またこのうしは

阿羅士登叙思布

あらしとぞ思ふ

短歌

靈治波布

神代能麻々能 可怜御道 覓阿羅波志斯 本

居之宇斯

霊(たま)ちはふ 神代のままの うましみち まぎあ

らはしし 本居のうし

### 3 贈高階貞房祝歌(館蔵)

卷子、本紙17・0×43・0

文化四年(一八〇七)、文化露寇を端緒とする秋田藩の松前出兵を終え、高階貞房が秋田に帰ってきた時に贈った長歌と反歌(短歌)である。「鳥屋」を「鳥矢」としてあえて戦いに関連する「矢」を用いたところが注目される。資料形態は、同じ卷子に次の4と一緒に貼り合わせている。

この翻刻では、長歌部分について、一字分を空けて句ごとに表す。

松前国にいまし、御いくさたちことたひらけましてか  
へりたまふ時ほきて高階広主之大人によみて奉る歌

鳥矢長秋上

はし鷹の 出羽国を しろしめす 君の命 御心を ひ  
ろみあつみと 御めぐみの 露しげゝれば 民草は い  
よゝさかゆる 月に日に かまどのけぶり たちそひて  
にきはひにけり しかれども よの事なれば 松前の  
くにのはたてに はろかなる 西のえみしが あたみ  
すと その国より はゆまして つかひまゐれば や  
がてその いくさとのひ いみじくも むけたまへれ

ば かけまくも あやにかしこき 皇神の みたまさき  
はへ 劔ばに ちもつけずして ことくくに たひらけ

まして まさきくも つゝみあらせず むくさかに 御  
城にかへらす けふのためしき

反歌

たらし姫神のみことのおほみたま今のをつゝにたふとき  
(ろ＝脱) かも

4 贈岩堀氏応送別歌(館蔵)

卷子、本紙17・3×38・5

秋田藩士の岩堀氏<sup>うじまさ</sup>が、江戸へ行くに際して長秋が贈った長歌である。「みともにて」とあるから、参覲交代のお伴であらう。氏は、記録方祐筆を務めた秋田藩士で、「天樹院公御題詠歌集」(大正十年刊行本に収載)に菅江真澄らとともに歌が載る。『菅江真澄全集』では、『月の出羽路河辺郡』にある「岩堀氏」(解説は全集第八巻494頁)、文化十年の真澄書簡にある「岩堀先生」(解説は全集別巻一・560頁)を岩堀氏応としている。

この翻刻では、長歌部分について、一字分を空けて句ごとに表す。

氏応君 みともにて江どへのぼり給ふ時よみ侍る

長秋上

かけまくも あやにかしこき すめろぎの とほのみか  
どゝをす国の ことゝりもちて 鳥がなく あづまの  
国に あめのした まをしたまへば うちなびく 春し  
さかゆる 花のいろに いで羽のくにを しろしめす  
君のみことは みこゝろを ひろみあつみと 民くさを  
めぐみ給ふ なで給ひ にきびませれど かしくも  
いそしみまして 大江門の とほき国に いでまし  
の みともつかへて はしけやし わかせの君は 草ま  
くら 旅にゆかせば 玉鉾の みちの長手の つゝみな  
く まさきくありこそ ありわたり かへりこむ日は  
たひらけく やすけくませと 天地の かみにこひのみ  
みわすゑて いつきぞまたむ わかせの君を

5 海辺月(館蔵)

軸装、本紙24・4×33・7

八月十五日の中秋の名月を見るため、歌仲間と一緒に新屋(秋田市新屋)の浜に出かけた時の一文である。酒と肴を持って出かけると、見事な月の夜であった。中国で客死した阿倍仲麻呂が、奈良の三笠山を偲んで詠った『古今集』の歌を思

いながら、長秋らも歌を詠った。

## 海辺月

今宵は秋のなかば、例の友のうちつどひければ、ふとい  
ひあはして※いづこをせとなうふくへてふ物を腰につけ、さかなは木の葉に  
つゝみなどして、なにくれとかたらひつゝ、はふくと  
秋の野をわけゆけば、日もいたうくれかゝりてあらやの  
浜辺にいたりぬ。うち見渡さるゝあをうなばらは、浪風  
もしづかに、おほぞらは雲きりもいとよくはれたり。ま  
してくまなき月の花やかにさしいでつるなん。いひしら  
ずおもしろう奥あることにめであへり。かくて見ぬもろ  
こしの国までも心のうちにうかぶやうにおぼゆれば、む  
かし仲丸ぬしの三笠の山にと詠し給へるも今さらに思ひ  
出されて、糸ひもうちとけしめやかに、皆人古へしのぶ  
心のせちなるにや。涙ぐみて歌よみなどするに、おのれ  
もかくなん。から国へゆきし人かもつり舟の月かげき  
よみこぎかへるらん。なぎのよきにめでゝとりくゝに口  
ずさみしつるほどに、あまどもあともひたつるまでな  
がめをりつ。

鳥屋長秋

※○印の箇所「いづこをせとなう」が入ることを意味する。

## 6 御教諭書(当館寄託資料)

軸装、本紙39・7×54・4

秋田藩では、第九代藩主佐竹義和の寛政五年(一七九三)以降、藩校や江戸藩邸で「養老の式」がおこなわれた。武家、町人・百姓の別はあるが、ある年齢に達した老人に、酒肴(男性の場合)と金子、それに御教諭書が贈られた。本資料は、文化十三年(一八一六)八月、久保村(五城目町)の吉郎兵衛が九十三歳で拝領したものである。新調された収納箱ではあるが、箱書には「鳥屋長秋之書」とある。詳細については、「広報紙真澄No.17」(当館、平成十六年九月)にある。

今般於御学館養老御執行

老人を厚く御いたわり被成候義は

畢竟若き輩へ老人を大切に

致候様との

御思召に候間子孫のもの身持

よろしく親類相睦ひ家事

取締り父祖の安堵致候様に

可心懸候又老人も家内和合し

子孫の者農業相励み

上の御法度を守り其身の分限を

知て奢を成し一郷和順致候

等の事申教この御諭之趣家内

の者へも常々能可申諭也

八月

## 7 高階貞房宛送別歌（館蔵）

軸装短冊、短冊34・9×5・5

資料形態は、短冊二点の軸装である。別の一点は、鎌田正家で、「菅園の大人大江戸にのぼり給ふ時はぎてよみて奉る」の詞書に「かりが声友ときかしてまさきつくまさきくありてかへらせあ君」とある。「菅園」と本資料にある「須賀の園」は高階貞房の号であるから、同じ状況で詠んだ歌であろう。

もちはさぞかけきよからし須賀の園

月見むとてのしわざならねど 長秋

## 8 夏旅（館蔵）

短冊、36・7×6・1

夏旅

うつし世のあつさもしらで君はさぞ

思ふまに〜旅路ゆくらむ

長秋

## 9 「笹の屋にて」（秋田県立図書館蔵）

短冊、35×6

本資料にある状況は、菅江真澄の《笹ノ屋日記》文政六年（一八二二）正月三日の記事にある。長秋、本誓寺の是観上人、小野寺道定、進藤俊武が、真澄の書屋である笹の屋を訪ねてきて、アワビ貝で作られた盃で正月のお祝い酒を飲む場面である。詳細については、「広報紙真澄No.20」（当館、平成十八年三月）にある。

笹の屋にて進藤氏としての始のよろこびに来たりて、そこにありける九穴貝を盞としてことほぎてよとこはれけるに

松かざりまつのよはひを君と吾

あやかりもちて千代ぞさかえむ 長秋

## 10 本居大平に奉る長歌

一紙、20・5×33・0

本誌で紹介した「未定稿〈真澄翁交遊録 鳥屋長秋〉」に

よると、本居大平入門について鳥屋長秋が高階貞房に相談していたため、長秋の詠草が高階家（実際は子孫の大山家）に残ったとされている。内田武志が、昭和二十二年に大山家から借覧した際、薄い紙に透き写しをしたものである。実資料は、大山家の火災のため焼失した。

ここでの翻刻では、長歌について、句の区切りを明確にするために一字空きを施す。

### 本居之大人の御前に奉る長歌

長秋

掛まくも 可畏きかも ちはやふる 神の御代より  
○あやにくすしき 神風の 伊勢国は うまし国 常世  
の浪の しき浪の またいにしへに たちかへり 貴き  
をちの いでまして 誠の道を みさかりに さとした  
まへば はし鷹の 出羽国ゆ はろくくに のぼりまゐ  
てし 直枝子が いとねもころに まをせれば そをう  
べなひて しつ手巻 いやしきわれも をりをえす み  
をしへの子に つらなめて めぐみたまふと ことつて  
を きくのうれしく かしこみも おもふまにくく ぶ  
みぞさゝぐる

かへしうた

八重たてる雲はろくとをろかみてみことのさきぞあぶ  
ぎてをまたむ

※○印の箇所「ゆゑよしの」が入ることを意味する。

### 11 菅江真澄墓碑長歌

本稿で紹介する遺墨資料の範疇には入らないが、長秋が詠った長歌として紹介する。

秋田藩士石井忠行が明治になってまとめた『伊頭園茶話』二十の巻では、墓碑の文字を、「長秋が手にはあらず、別人也」としている（『新秋田叢書』第十巻）。

なお、墓碑銘の読みと解釈の詳細については、鈴木太吉「真澄墓碑に刻まれたる長歌」（『菅江真澄研究』第二十五号）第三十号所収、菅江真澄研究会）にある。

友たちあまたして石碑立る時によみてかきつけける

三河ノ渥美小国ゆ

雲ばなれ

ここに来をりて

夕星の

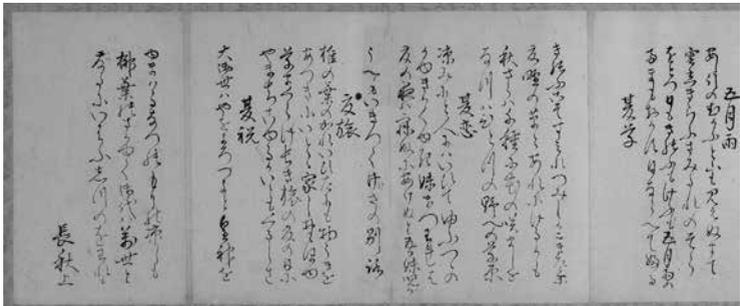
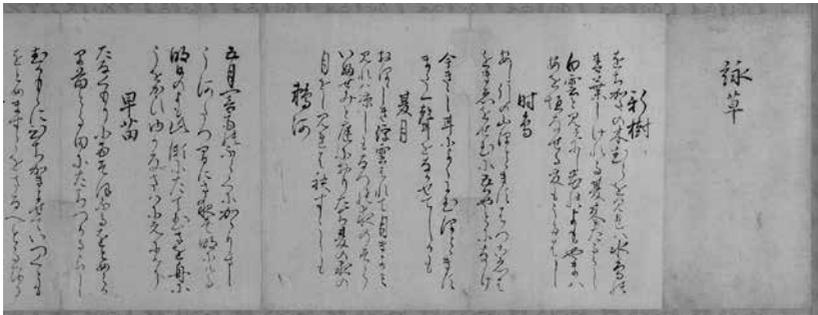
かゆきかくゆき

年まねく

あそべるはしに  
 かしこきや  
 殿命の  
 仰言  
 いただき持て  
 石上  
 古き名所  
 まぎあるき  
 かけるふみをら  
 鏡なす  
 明徳館に  
 ことごと  
 ささげをさめて  
 剣太刀  
 名をもいさをも  
 万代に  
 きこえあげつる  
 はしきやし  
 菅江のをぢが  
 おくつき処 鳥屋長秋

図版

1 詠草 (館蔵)



2 「奉賛本居大人」(館蔵)

奉賛 本居大人 賜聊 送心 留  
 長奇  
 掛麻久岐阿波清可與斯  
 伊豆能實之伊豆能御速度  
 昔波理邦未昔本居能長  
 之大人能切結宮儲高夜小衣  
 那浦加母臨深後海去那浦  
 加石上贈球夜御書能能廣  
 見朝厚思深志新斷古後使  
 皇御國叙神代月珠意事一祝  
 波傳波能登登見先出立家  
 原邦之盛之鏡之高登波輪波  
 明良本賜比玉青能能能能  
 道直也道登敷福那三能能能  
 之和生之真筆伊能能能能  
 所着古能能能能能能能能  
 頁首野能能能能能能能能  
 登名子原伊母能能能能能  
 能能能能能能能能能能能  
 露吹波能能能能能能能能  
 志和能能能能能能能能能  
 志和此流伊能能能能能能  
 伊登母實志天地之曾位能  
 極美能能能能能能能能能  
 阿羅王登能能能能能能能  
 短奇  
 當注波市能能能能能能能  
 海能能能能能能能能能能  
 宇野

3 贈高階貞房祝歌(館蔵)

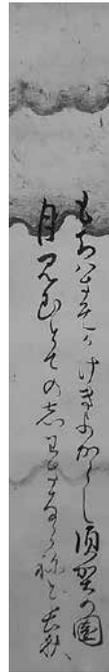
高階貞房  
 何ほりん高階廣主天下  
 長奇  
 鳥長杖上  
 君の命心どほろとあつとゆえ  
 ふみだ深志けれあ即あひま  
 さつらる月ふり小おとしのけり  
 たおそいおまはひ小りつ三九  
 よの事多れおののふ小は  
 何あつらる西の之三のあた  
 元水のふよりと也ま一つふあ  
 けしとやうそめいふとひい  
 としむけたまつれしわけし  
 かあそむる神のみたまま  
 けふおちつけあてれり小た  
 らけりしとまきくともつこ  
 世父むらさう小御城つり  
 けふのたぬし  
 友奇  
 たらし姫神めみあしお  
 今のをつ小たふとま

4 贈岩堀氏応送別歌(館蔵)

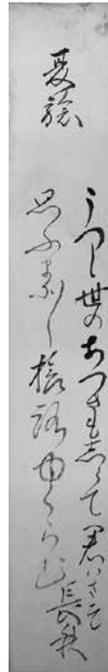
氏應君 ひとしとては  
 ひとへの何れあふ村よ  
 長杖上  
 かひのりくもあつたふりあき  
 ろまれとほのとうとくを  
 ちとくりもあきさううあつ  
 まあふあめれあきま  
 海へてくちる物くま  
 ちのいつふつてふ船のら  
 久す君のみこといみあ  
 ろとあつとと民くさ  
 ちをぬいおきおをれと  
 ちそ一みりし大は門の  
 へふつてそのれみと  
 けりしとつてその  
 後おちくせは海のみ  
 つみくちあきさうあ  
 ちすけくちあきさ  
 のみみまきあていつ  
 日うせのふん



7 高階貞房宛送別歌 (館蔵)



8 夏旅 (館蔵)



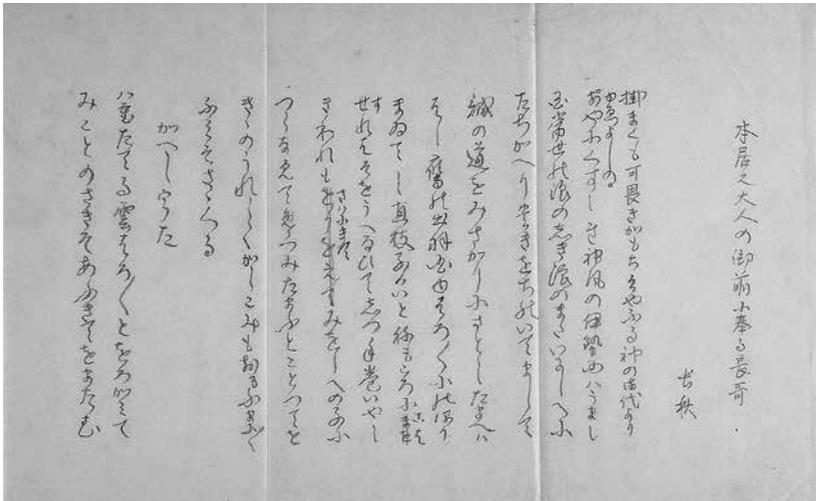
9 「世の屋にて」 (秋田県立図書館蔵)



11 菅江真澄墓碑長歌 (秋田市寺内、秋田県指定史跡)



10 本居大平に奉る長歌





# 現代語訳《しのはぐさ》

訳 嵯峨 彩子

《しのはぐさ》は、三十四の章段からなる菅江真澄の随筆である。この著作がまとめられたのは文化八年以降と考えられており、内田武志はこれを、真澄が本格的に手がけた最初の随筆として位置付けている。真澄自身の実体験に基づいた考察に、文献の引用を織り交ぜる形で考証が組み立てられており、そのテーマは、植物、日用品、地名、軍記、縁起、奇談など、多岐にわたる。

ところで、これまで真澄の著作といえば、一般に日記、そして地誌が耳目を集めることが多かった。たしかに、真澄の日記や地誌には、民俗学上の、あるいはその土地の歴史を知る上での、ローカルな資料としての魅力があり、真澄の著作は現在ももっぱら、そうしたニーズに 대응するものとして評価されているといっても過言ではない。そのため、日記や地誌には現代語訳が刊行されているものもあり、興味を持った人が入門するためのハードルも比較的低くなっている。

しかし随筆については、特定の地域に焦点を絞ったものではないこと、また、文献の引用が頻出して取っつきにくいこ

とも影響してか、これまであまり日の目をみることはなかったといつていい。したがって、完全な現代語訳が刊行されているものも、いままでのところない。

しかし、秋田に居住するようになってからの後半生、地誌とならんでその執筆に情熱を傾けた随筆というジャンルは、真澄にとつて、それまでの旅や学びから経験や知識を獲得した己の、アウトプットの集大成であったはずである。ゆえに、その随筆に少しでも多くの人に興味を持ってもらい、その研究のすそ野が広がれば、今後の真澄研究に新たな発見が生まれるものと筆者は考える。今回の現代語訳は、そのきっかけとなることを希図したものである。

なお、今回は文章の論旨を伝えることに主眼をおいて訳した。そのため、真澄の擬古文特有の修辞の味は薄らいでしまっただろう。真澄の日記などの原文に慣れており、その点を物足りなく感じた方は、是非この機会に随筆の原文にもふれてみてほしい。

(秋田県立博物館非常勤職員)

ア 書名には《》を、原文の割註には「」を、和歌や俳句、漢詩などの解釈部分にはへを、訳註には（）を用いた。

イ 検索の便のため、全三十四の章段に記事番号を付し、【】内に示した。

ウ 原文における人名、地名など固有名詞の表記は、現在の表記と異なるものが多いが、解釈上誤解の生じない限りにおいて、原文の表記をそのまま用いた。

エ ふりがなは原文にあるものと訳者によるものを区別せず、ひらがなに統一して付している。

オ 今回は文献の引用部分もすべて現代語訳した。また、引用部分が長い場合は、真澄による文章との区別がしやすいように、点線で区切った上で、引用部分全体を一字下げとした。

カ 現代語訳にあたっては、未来社刊『菅江真澄全集』第十巻所収の翻刻を底本とした。また、校正のため、大館市立図書館ウェブサイトで公開中の「菅江真澄著作集」自筆本画像データを参考にした。

(序文)

出羽、陸奥で長年を過ごして、見聞きしたあらゆる事柄を、すっかり忘れてしまう前にと、物に記し続けていったところ、こうして一巻となった。この書のはじめに「しのはぐさ」のくだりがあるので、このように書名をつけた。

菅江の麻須美

- 【1】 しのはぐさ
- 【2】 なでんの桜
- 【3】 京麿の牡丹
- 【4】 直江兼継
- 【5】 籠提灯
- 【6】 乳の井
- 【7】 シリヤの浦
- 【8】 たんな
- 【9】 むらがしわ
- 【10】 りせんだつ
- 【11】 銭拾う
- 【12】 高屋つきほし
- 【13】 花にこころを
- 【14】 くし造る刀自とじ
- 【15】 くさむすび
- 【16】 ゆりの露、しのはぐさ
- 【17】 おにへごぐさ
- 【18】 むろちぐさ
- 【19】 ゆきのみやしろ
- 【20】 むろの木
- 【21】 菅大臣みかたの像
- 【22】 こさふく
- 【23】 はたつもり
- 【24】 おだしい事
- 【25】 えだがみ
- 【26】 きのみやしろうじん
- 【27】 ななくらやま
- 【28】 こしづな
- 【29】 たねまきざくら
- 【30】 よてぐり
- 【31】 こがねのものもののそめがみ
- 【32】 あぐりこきつね
- 【33】 だんがく
- 【34】 善知鳥とのみやしろ

## 【1】しのはぐさ

陸奥にいた頃、津軽の人が「白蛇はくじやという草があります。漢名でしょうか。何の薬に用いるのでしょうか」と尋ねてきたので、「それはどの草ですか。まだみたこともなく、まったく知らない草です」と答えて、山路を行った。すると、粟畑の中に草がずいぶん茂っていた。それをみながら山賤（1）が「これは白蛇の多い畑だな」といったので「どの草をさういふのですか」と尋ねると、山賤は「これです」と答えた。世間では「いぬこぐさ」「いぬころ」「えのころ」などと土地ごとに呼ぶ草である。これは、「はぐさ」を訛（2）って「はくじや」というのだそうである。

この草は《新勅撰集》（3）に「へびどく霜のおりた、しのはぐさのその霜の上に、夜を経て月が冴えわたっていることだ」と歌に詠まれたものだろう。

《久保之取蛇尾》（4）の初編には次のようにある。（訳註・これから書名が複数出てくるためわかりづらいが、次頁下段の最終行まですべて《久保之取蛇尾》から引用した文章である）

しのはぐさの事は、《八雲御抄》（4）にこう書いてある。

「しのはぐさは皆、篠あしというものであると理解して詠んでいる。へさて一よ（5）などと添える。ただたくさんある草をい

うものか。花などもやしてなく、一本ずつ生える「云々」。

《色葉和難》（5）には「散らしてくるな、しのはぐさの刈り取りではないが、仮にも露が袖の上にこぼれてよいものだろうか。深く忍んでいる恋であるものを」しのはぐさは万葉集に詠まれている。どの草かという事はさだかでない。この歌は積阿（6）和歌所御会（7）の歌である。もしかすると篠あしをいうのだろうか。しのはぐさという名は篠にふさわしい「云々」ともある。

《河社》（8）にも「ある書にいうことには「このある書」といわれているのは《色葉和難》のことである」、「この歌は積和歌所御会の歌である「云々」という。この説は疑わしい。今の詞書「今の詞書とは新古今（9）の詞書のことである」に『入道関白（10）が右大臣でいらした時、百首歌の中に、忍恋」とあるのを、なぜ和歌所御会というのだろうか。万葉集の中にはしのはぐさと詠んでいる歌はまったくない」と難じるばかりで、しのはぐさとは具体的にどういう草であるという説明もない。

《八雲御抄》の「たくさんある草をいうものか」という註も、確かなことではない。

今あれこれ考えるに、しのはぐさの「し」とは「繁木」のことであろう。万葉集第八に「夏山の木末こずえの繁しに」と書

かかっている。《袖中抄》(11)の中の「あきのほをしのおしなみ」という歌の註に、「顕照(12)がいうには、『しのおしなみ』とは生い繁つて押しなびかせることだ」とあることからわかるだろう。

はぐさは秀(はぐさ)のことである。俗にえのころ草というものである(《和名抄》(13)では狗尾草、エノコログサ)。詩の斉風、甫田の章(14)に「広く平らな大きな田畑に田を作らないので、これに秀(はぐさ)が我が物顔に生い茂っている云々」、また《孟子》尽心の章(15)に「秀を嫌うのは、それが苗を乱すことを恐れてである」とある。

《秘蔵抄》(16)に「作るべき主がないのだろう。山間の田に、はぐさまじりのそらい(17)が生えている」とある。なるほど、この草は群生するもので繁秀(はぐさ)というのにながいない。

古い時代から秀(はぐさ)と読む、その漢字本来の意味にそった訓読みをさしおいて、はたして「ただたくさんある草」であるのか。また「しのはぐさ」という名は篠(はぐさ)にふさわしい「など」という主張は疑わしい。「しのはぐさ」という名は篠(はぐさ)にふさわしい」という説は、「しのはぐさ」と理解できるとしても、では「はぐさ」はなぜそういふのであろうか。

ただ、しのはぐさを詠んでいるのは俊成卿の歌が始ま

りだろうか(「出所を考えるべきである」。しかも、かの卿はそれ自体を知らないとのことである。それゆえ、契沖先生(18)も「俊成卿はしのはぐさをどんな所から題材として求められたのだろう。さだかでない」といわれたのである。のちのちの歌には「篠(はぐさ)」と理解して詠まれたとみられるものもある。

〔新勅撰和歌集、前関白の歌〕

〈ひどく霜のおりた、しのはぐさのその霜の上に、夜を経て月が冴えわたっている〉

〔新撰和歌六帖、左京権大夫信実の歌〕

〈垣根に生えているしのはぐさの冬枯れに、霜をおく風の声がしきりに続いている〉

〔弁内侍日記〕(19)

〈涙にくれる夜は、しのはぐさの葉まで押しつぶすような露もこぼれる時雨であることだ〉

〔新千載和歌集(20)、後西園寺入道前太政大臣の歌〕

〈涙で袖を濡らすしのはぐさの仮小屋を訪れる、秋の夜の月であることだ〉

それゆえ《八雲御抄》に「しのはぐさは皆、篠(はぐさ)というものであると理解して詠んでいる」と書かれているのだ。

私が聞いた津軽の「はくじゃ」は「はぐさ」であつて、意味合いもよく条件にかなつてゐるものではないか。

## 【2】なでんの桜

信濃の国をはじめとして、出羽や陸奥では「なでんの桜」といつて、花がとても大きな薄紅の八重桜がある。大きな一重桜をそう呼ぶところもある。同じ国でも姿形が一樣でないところもある。むかし南殿<sup>(22)</sup>の桜の種子を拾つて蒔いたこともあつたのだろうか。

《玉勝間》<sup>(22)</sup>には次のようにある。

紫宸殿の南階段の桜と橘について。《歴代編年集》にいうことには、南殿の桜の木は元々梅の木だった。桓武天皇遷都の時、植えた所である。しかし承和年中になつて、枯れてなくなつてしまつた。だから仁明天皇によつてあらためて植えられた。今度は火事で焼失してしまつた。内裏を造営する時、李部王〔重明親王〕の屋敷の桜樹を移された。元は吉野桜である云々、ただし《拾遺》<sup>(23)</sup>には、公忠朝臣の歌の詞として「延喜の御代に南殿の花をみる」と書いている。だから天徳以前の桜樹だろうか云々。

この名で呼ばれる花は信濃、出羽、陸奥で一樣でない。南殿の南階段の桜を吉野桜だとすれば、本来は一重桜だろうか。また、吉野の寺には薄紅の八重桜もあるので、それも吉野桜と呼んで、移し植えられたのだろうか。

## 【3】京麿の牡丹

陸奥の中尊寺、乱梅山の姥杉、前沢の大桜、津軽の梅など、どれも今が盛りの大木である。また、出羽の小阿仁の萩、萩生山の萩は、もつとも珍しいものである。秋田の土崎湊の砂山から、古い時代に萩の大木を伐り出して、都の某寺の棟木となつた話、駿河の国、富士山麓の御殿場村の御獵舎の柱、この二本も萩の大木である。また、三河の国西の郡という村がある。染物師の庭に百五十七の花が咲いた牡丹がある。また、遠江の国乾村の水上市、京麿の山里の牡丹は、実に格別である。

《煙霞綺談》<sup>(24)</sup>四巻には次のようにある。

秋葉山の麓にいぬい川という川がある。川下は天竜川に落ちて、船や筏が通行する。この川上にある京丸という小さな村の、片田舎のけわしい山の中腹に、大木が二本ある。遠くから眺めるところ、一本の太さは両手で抱えておよそ

四抱え分、もう一本は二抱えほどで、初夏に花を開く。その色は白く、直径一尺（約三十cm）ほどにみえるが、ほかに似たものもない牡丹であるという。最近その村の者に出会い、これを尋ねて聞いたところ、間違ひなく牡丹だということだ。古い時代の内裏の跡で、その時の前栽であると土地の人はいい伝えている。しかし、そんな深山に内裏を遷すような理由はない。古い時代から、寺というものも宗旨という事もなく、死亡者があつた時は土地の人が集まり、昔親鸞上人自らが描いた阿弥陀像を開帳し、念仏を唱えて葬る。それは今も変わることがない。そのはじまりにどんな由緒があるのかは知らない。

たとえ内裏の跡でないとしても、京丸という名にはなにかわれがあるのではないだろうか。

#### 【4】直江兼継

前の章段に引いたのと同じ本に、次のような話がある。

越後の上杉の家老、直江山城守兼継は、木曾義仲の時、四天王と呼ばれた内の樋口次郎兼光の遠い子孫で、三十二万石を領した。文才があり、また詩歌や歌舞に長じ、

武勇にもすぐれ、体格がよく、風采や弁舌は肩を並べるものがない。

景勝が越後から会津へ国替えになった時、家臣が三室寺庄蔵という者の奉公人を手討ちにした。その罪は斬るほどのもものではなかつたために、奉公人の親類は「あの人を返してください」とごねてきた。山城守が聞きつけて取り計らい「銀二十枚を取らせよう。それで跡を弔つて勘弁なさい」といい聞かせたけれども、なかなか承諾せず「なにとぞあの人を返してください」とごね続けた。

山城守は家来に申しつけて、高札を一枚急にこしらえ、一筆書いて自身で玄関に持ち出すと、次のようにいった。「訴訟人を色々と取りましたが、聞き人れなかつた。みな『あの者を返せ』という以上、しかたがない。呼び返そう。ただし冥途に呼びにやる人間がない。ご苦労だが、あの者の兄と伯父と甥の三人で閻魔の役所へ行き、あの者を請い受けて帰ってくるように」。そして、三人を往來の橋で斬罪にし、あの高札を立てた。

まだご意見を承っていますませんが、簡単に申し上げます。三室寺家来何某が不慮の争いで死亡しました。親類が嘆いて、呼び返してくださいと色々申しますので、三人を

迎えにやります。その死人をお返しくださいさるようお願い  
します。恐れながら謹んで申し上げます。

慶長二年二月七日

直江山城守兼継判

閻魔大王

冥界の役人獄卒へ御披露

右のように書きつけて高札を立てたところ、国中の人々  
は一言も言葉がなかったとかいふことだ。

あの一休和尚の「仏御所様」、太閤秀吉公の「稻荷大明神殿」  
(25)という手紙と同じである。

直江兼継が出羽の国杉宮大明神に願いをかけ、奉納したも  
のの中には太刀や鎧兜、また朝鮮出兵のとき、白銀の貨幣で  
塔の形を作って金色の板にうつたものが二枚、また弓矢があ  
る。弓は真巻(26)のようである。世間ではままぼこという。  
一片が竹、一片が木のものである。兼継は身長が高い人だっ  
たのだらうか、矢もとても長く、竹が太い。上杉家の寄附は  
甘糟と直江のものが非常に多い。

## 【5】籠提灯

陸奥、出羽、越の国などにある、籠提灯というものは、お  
ほまあらこ(27)に紙を張って、きりこ燈籠(きりこも切籠の  
意味で、元々籠提灯の類だったか)のように、取っ手をつけ  
たものである。

《四季草》(28)には次のようにある。

提灯の事について。上代にはなかったものである。古い  
時代は夜間の外出に松明を用いた。また、行灯を用いる事  
があった。

《鎌倉年中行事》(29)に、鎌倉殿〔成氏である〕(30)が正  
月五日になつてはじめて、管領(31)のもとへ参上なさる行  
列を記して「続松(つづいま)二丁、行灯一つを持たせるように」とある。  
続松は松明である。行灯は今も用いる行灯である。昔は夜  
間の外出に持ったものなので、「行く灯し」と書く。右の  
頃までは提灯はなかった。

《蛭川記》(32)には次のようにある。「提灯は籠提灯が元  
である。普段持ち歩く提灯は昔のしきたりにのつとつたも  
のだらうか云々」(「普段持ち歩くものとは、たたむ提灯を  
指している。『昔のしきたりにのつとつたものだらうか』  
とは、本式ではないけれども、その時の状況にしたがつて  
用いている事をいっている」。これは永禄天正などの頃の

事だろう。その頃、今の時代の提灯もあつたとみられる。

籠提灯というものは、行灯のさやのように、丸い目籠をさやにして、上に横木の取っ手があつて、提げるようにしたものである。今も奥羽の駅家などでこれを用い、その図が別にある。これを基にして、たむ提灯も考案されたのである。永禄四年辛酉三月晦日、光源院義輝公<sup>(33)</sup>が三好筑前守義長邸<sup>(34)</sup>にお出ましになつた記録に「御門に提灯を二つかけておき、御門役にこれを渡す」とある。

私はその籠提灯の図はみていないが、駅家でなくても村々山里まで、越後路、陸奥、出羽にある。近頃はその籠の骨をさまざまに交差させ、巧みに作る。中国の画にみる葛灯、また、葛灯籠というものと見た目に違いがない。それをみて思いついたのだろうか。また、古い時代からあるものなのだろうか。

## 【6】乳の井

陸奥の津軽の乳井〔においという〕村の毘沙門天堂の傍らに泉がある。折々、この泉は米のとぎ汁のように白くなって甘いことがある。これを乳の井といって、母乳の乏しい女性が毘沙門天にお参りし、祈つてこの水を飲めば、乳房から乳

が泉のように湧き出るといふ。

《倭訓栞》<sup>(35)</sup> 前編に、次のようにある。

加賀のくけ戸といつて、海中に小山があつて、岩窟の中に真水を出すところがある。これを乳水という。また、大社の神の乳石ともいふ。この小石はいくつでもくつつく。たとえば大石や木、また船などにもくつつくといふ。これは鍾乳石のまだ固まつていないものだろう。

この説はどうだろうか。泉の水が白くなるのは滑石<sup>(36)</sup>や石脂<sup>(37)</sup>の類のためである。そついうものはあちこちに多い。山本郡にも白水沢〔この名前はほうぼうの山中に多い〕といふ村がある。元々は白い水の泉があつたために呼びはじめたといふわけだろうか。

## 【7】シリヤ〔シリヤの崎、また浦ともいふ〕

《日本後紀》<sup>(38)</sup> 四卷〔延暦十四年〕に「出羽の国の報告、渤海の国使云々、蝦夷地の志理波村に漂着〔十四葉裏〕」といふ記述がある。志理波はシリヤ〔今尻屋（シリヤ）村といふ〕だろうか。このほとりに岩屋村といつて、アイヌが住んでいるところがある。そこは南部の糠部郡田名部の海辺であ

る。志理波、シリヤ、相通じるものがある。

シリは元々アイヌ語である。シリは崎の意である。リイシリ、リブンシリ、クナシリ、みな突き出た岬をいう。蝦夷地の小字にシリヤムゲというのがある。シリヤはシリヤムゲをそういうのだろうか。ウエンコタンをうえこたんといい、ヤゲンナイをやげないといい、クムネベツをくねべつといい習わすようなものである。越後の国の椎谷しいや浦も、シリヤムゲのアイヌ語を訛り伝えるままに、椎谷という文字で書いたものである。

## 【8】 たんな

小さな子どもを背負う一尋(約一・二び〜一・八び)を超える布を、おびたなというところがある。また、子びたなというところもある。あるいは、もりで、たな、たんな、などというようだ。谷川士清翁<sup>(39)</sup>のいうことには「たんなというものは、相撲などの時に、馬の手綱を取って下帯にしたのいう。たづなの転じたものである。西方の地でも兜肚といって袋をつくり、股間を覆うきまりがある」とある。

《四季草》には、次のようにある。

ふんどしの事。古い時代はたづなといい、また肌の帯と

いう。また、下帯という。また、たふさき(傍註に「トウサキと読むべき」の文言あり)という。いずれも同じものである。これは絹一幅で股間を覆う。《義貞記》<sup>(40)</sup>に義家朝臣<sup>(4)</sup>が鎧を着用する次第が記されているが、第一に手綱とあるのがこれである。また、《曾我物語》<sup>(42)</sup>第一「相撲の条」に「俣野景久が、奴では相撲の相手にもならないだろうという」と、平太がこれを聞いて、俣野も手一つ、自分も手一つ、臆して負けるものか、あの程度の相撲取りを十人ばかりひとつかみに思い、着物を脱ぎ置き、たづなを身につけ云々」とある。

その手綱に似ているために、手綱と呼びつつ、言い方が転じていって、たんなというのではないか。男の脱ぎ捨てたたづなを使って、女が子を負ったのではないか。それがはじまりでこの名があるのだろう。もりでは陸奥、子びたなは出羽である。

## 【9】 むらがしわ

「これも《柏伝》にある話だが、その中から一つ」とある人がいった。尾張の暁台<sup>(43)</sup>の句に「櫓ぼたを焚たいているのだろうか。夜半の細工のむらがしわ」というのがある。これは、

木で作った鋤のようなものである。北国、出羽、陸奥で雪よせの道具にしている。その土地その土地で形は違う。今、村々で「かいしき」といつているものである。それは「村かいしき鋤」というのを、縮めてむらがしわというのではないだろうか。

## 【10】リせんだつ

それほど遠くない昔、朝鮮の李仙達が風に流されて、松前についた。李仙達はくじを作つて人に取らせ、擲銭の占いをした。また唐詩のいくつかを書いてくれたものが、松前、津軽、南部、また能代にもあつた。文字は拙くない。その中に南無阿弥陀仏の六字の名号が書いてあるのをみた。南無阿弥陀仏のみおみとぶつと唱えて書いたという。その国の言葉ではそのようにいうのである。

## 【11】銭拾う

埋もれた貨幣を掘り、掘り出した銭を手に入れる事は、ほうぼうの国で非常に多い。特に陸奥や出羽である。宝暦ころ、秋田郡男鹿の中石という浦で、銅銭が百貫ばかり波に打ち上げられた。その銭の文字は、みな宋の年号だつたとのことである。

また、近い時代の安永七年の春、船越の浜に、異国船とおぼしい、人のまつたく乗っていない船が漂着した。漁船などだつたのだろうか。長さは十間(約十八呎)ほど、幅は八、九尺(約二・四呎×二・七呎)ほどで、小さい釜が一つあつた。袋が一つあり、中に銭が入っていた。すべて常平通宝<sup>(44)</sup>で、貨幣の裏の文字は同一でない。みえる刻印には、半月、戸一、戸二、戸三、戸四、戸五、戸六、戸七、戸八、また訓一から訓十、また惣一から惣十まである。朝鮮国の船だろうか。あの国で常平通宝を使用している事については、《三国通覽》<sup>(45)</sup>の中で銭面の文字についてのみふれられている。同じ男鹿の福川村でも、青銅の銭が十貫ほど掘り出された事がある。

## 【12】高星つきほし

高星<sup>(46)</sup>、月星はみな阿倍氏である。松前の下国家<sup>(47)</sup>、檜山(山本郡常明寺)の富岡寺など、そのほか安倍家の記録にも、別の文書にも載せてあるのをみると、大同小異はあるが、

安日<sup>やすひ</sup>〔長髓彦<sup>(48)</sup>の兄である。津軽浜の安東浦を領有していた。元々は津軽の十三の浜におり、その旧館の跡は山王坊という寺跡の近隣にある〕

安東〔安倍比羅夫<sup>(49)</sup>の陣に來た。この人物は安日の遠

い子孫である。のちに安倍氏となり、安東と名乗つた〕

致東〔蝦夷蜂起を征討した。安東の遠い子孫である。松

前の下国家も致東の子孫であるとのこと〕

国東〔蝦夷を追つて、松前に至つた。致東の遠い子孫で

あるとのこと〕

頼良〔頼良はつまり国東の子である〕

頼良〔安東太郎頼良は頼良の子である。のちに頼時と改

名し、また自ら安倍將軍と稱した〕

貞任<sup>50</sup>〔安倍將軍頼時の子、良宗の弟で、厨川次郎という。

息子が二人あつた〕

高星〔貞任の次男で、千代童また千代寿磨といった男子

の弟である〕

堯勢〔頼時の二男、良宗の遠い子孫である。安藤太郎堯

勢という。尊氏と敵対した相模入道<sup>(51)</sup>が、楠木正

成を遣わして堯勢を討たせた。堯勢は戦に負けて津

軽に退いた〕

云々。

貞任の長男である千代童丸、また千代寿磨ともいつた男子

は、十三歳の年、父貞任とともに討ち死にした。高星は二歳

の年に、乳母の懷に抱かれて津軽に隠れ、のちにこの藤崎を

領地とした。藤崎村の河越茂助という家の耕地の小字に高星、

月星というところがある。古い時代、高星殿、月星殿という

名で建物があつた。ここにお住まいになつた跡などといい伝

えていたが、今はまったくそのようなどころも人は知らない

旨を、この老人が話してくれた。また、ある説では「月星殿

は高星殿の子だろうか。高星殿は出羽の秋田にも住んだ」と

いう。

また、近い頃では明和のはじめだろう、今稻荷のいらつしや

るあたりの川岸が崩れて、井桁のようなものが二つ出てきた。

その中に炭があつた。また非常に大きなしゃもじのような柄

杓が二本出てきた。これは高星殿、月星殿の古墳なのだろう

かといっている。そこを今、井戸淵という。それは井筒のよ

うな方形の棺が出たので、そのような名で呼ばれる。

私が思うに、山本郡〔古い時代の山本郡は今の仙北郡の地

にあつた〕常盤地区に竺法師村<sup>(ちくほうし)</sup>というところがある。昔は月

法師と書いたことがいわれている。これは月星をいい

表して呼ぶままに書いた文字であるようだ。高星の子、月星

が領地としたところだろうか。あるいは居住した館の跡だろ

うか。それゆえ今は、つきほしをちくほうしと呼ぶのだ。

比内〔古い時代は比内(ひうち)郡、また樋打、肥内など

も軍記にみられる」の花岡に良宗よしむねの墓がある。良宗は盲目で、早世であったことがいい伝えられている。そのため、安倍氏は十三仏堂「千寿磨は十三歳の時に出羽の国で討ち死にしたので、そのために建てたともいわれている」を建てた。また盲瞽めくらが平という野原がある。これもあの盲人安藤太郎良宗にゆかりのあるところだろうか。十三仏堂もこの野原の近くにある。

またある家の系図に、貞任「安太夫頼時の次男、厨川次郎太夫。衣川に居住し、鬼切部に砦を作った」、三男宗任鳥海三郎太夫、四男正任黒沢尻四郎、五男家任磐井五郎、六男重任比浦六郎、七男比与鳥七郎である。八女巨理権太夫藤原経清の妻、九女伊具十郎平永衡の妻である。安太夫頼時の弟、安倍赤村介為元、その子為国、その子為重、その子為月とある。この為月の月という文字は月星などから考え及んだものだろうか。近頃には珍しい名である。また、千代寿磨が秋田で討ち死にしたというのは、このあたりであると知られている。

### [13] 花にこころを

慶安庚寅立春の正月〈新年に遅れたこの春は花にいつそう真心をこめよう 秋田城介宗実〉とあるのを、人見氏の《黒甜瑣語》<sup>(52)</sup>に「この宗実は秋田家の系譜にみえない」とい

うことをいつている。

考えるに、従五位下秋田城介実季<sup>(53)</sup>が常陸の国へ国替えののち、また伊勢の国にある朝熊へ国替えになられ、出家して名前を凍蝸齋宗実と名を改められたということだ。八十四歳で亡くなった。庚寅の年は慶安三年である。

このお方は、昔土崎湊の城をお出になる時、心変わりしたものが多かつたためか、心のねじけた人のために今はこうだ、と筆を取って「風が騒ぐ中の広葉の柏をみるような世の中であることだ。裏と表がひっくり返る人間というものは冷淡である」という歌を、柏葉に書きつけていらつしやつた。それを見た人は、涙をこらえかねたと語り伝えられているのを聞くと、今も涙がこぼれる。

### [14] くし造る刀自

陸奥の糠部郡に行き着いて、厠に入ると、暗がりの奥まつたところに、「用」「捨」と書かれた、よくわからない箱が二つあった。「用」という字が書かれた箱には、五、六寸(約十五cmく十八cm)ほどに大虎杖<sup>(54)</sup>の茎を割って、これを入れてかけていた。それを籬木<sup>(55)</sup>という。「捨」の文字が書かれた箱は、排泄物で汚れたのをひよいと入れて置いてある。それは厠ごとにあるが、「用」「捨」の文字を書いたものはよ

そにはない。

《倭訓栞》には、次のようにある。

万葉集に「糞は遠くにせよ、櫛を造るおかみさんよ」と詠んでいるのも、籤の類である。今も木曾山中で使っている。厠のへらであるという。《輟耕録》<sup>てつこうろく</sup> 66 に、「今、寺院では木を削り、箒として厠の中に置き、厠箒と名づけている」とある。

### 【15】くさむすび

同じ糠部郡にある尾駮<sup>おぶち</sup>の牧<sup>まき</sup>の旧跡をたずねて行って、尾払<sup>おびら</sup>〔小仏などとも書いた、古い時代の尾駮の牧の名である〕、高鉾<sup>たかほこ</sup>〔鷹架だともいう〕などというあたりの海辺の山深く分け入ると、夏の野の高く生えている草を引き結んだところがあつた。「これは何のしるしとして、このように草を結んでいるのだろうか」と、案内の老人に尋ねると、「夏草が深いので、入った人が帰ってくる時、道に迷わないようにするためだ」と答えた。

別の人のいうことには、男が先に草刈りに入つて、約束していた女も草刈りに出る場合に「それを手がかりに訪ねて来

るように」というしるしである。その草の結び方は一樣でない。おのおの意図で恋人にそれと知らせるので、他の人には少しもわからない。女が先に入つても、そんな風にこの結び方をするといい。

《新千載集》に、いい交わした女の家の前を通る時に詠んだ「恋人の家の前を素通りすることができないで、草を結んだ。風よ、吹いてほじめてしまわないでくれ、逢う日まで」という歌がある。《倭訓栞》に「くさむすびは俗に草分けの意味にいう。婚姻の約束をした事にもいう。故事が多い。《新千載集》「云々」として、先ほどの歌を引用している。この陸奥の糠部郡にあつたくさむすびは、とてもこの歌の情趣になつてゐる。

### 【16】ゆりの露、しのぶの暉

陸奥の軍記に、次のような話がある。

小山左衛門尉朝政の陣立てから、佐藤継信の幼い息子が小弓で泰衡<sup>58</sup>に矢を放つたところ、泰衡の直垂の袖に刺さつた。それを取つて捨てようとしたが、あまりに小さい矢だったので、不思議に思い、よくよくみると、佐藤三郎兵衛継信の嫡子誰それと書いてあつた。泰衡は「これはつ

まり、私の親族である。敵陣にあつて私を射た事、さすが継信の子なればこそ、殊勝にも思われる。誰もこの子を討つ事のないように。その子は武勇にすぐれた者の息子である。助けておいて行く末をみたい」といつて制した(云々)。

六月六日、厨川の辺りで、泰衡の首実検をなさつた(云々)〔吾妻鏡〕(59) 九卷文治五年九月六日のくだりに、「河田次郎が、主人泰衡の首を持って陣方岡に参上した(古名は鎮岡)。景時がこれを献上させ、義盛、重忠が首実検した。その上、囚人赤田次郎を召して、これがみせられたところ云々」とあるが、少し違つているか)。

高衡(60) は由利八郎を呼んで遺言をした。「私は明日の戦で討ち死にするだろう。だから、必ず生き残つて、平泉にある先祖代々の墓の事を鎌倉に願ひ出て、せめて一つの土地だけでも乞ひ受けて法事料とし、毎年仏事供養をおこつたことのないようにせよ。この事にけつして背くことのないように(云々)」。

高衡が囚われの身となり、由利八郎維平〔吾妻鏡〕には由利中八維平とある)に向かつていった。「高継(高衡の一字を頭につけ、亡き父継信の一字を用いて、佐藤三郎兵衛継信の嫡男を佐藤太郎高継といった)が六郡をいただく時、まず伊達郡を希望するように。また、先祖の墓所が

あるので、平泉は離れないように。磐井、樋爪、柴田などをもらい受けるように。伊達に城を構えて住み、伊達冠者(61) 高継と名乗るように。維平は六郡を支配して守るように)。

高衡がくわしく遺言すると、維平がいった。「自分はこれまで二つの国の政治を取り仕切つてきました。そこで今また、わずか六郡を支配いたしましたところで、どう面目が立ちますでしょうか。とにかくこの件は、ほかの連中に指図なさつた方がよいでしょう。そう申し上げると、高衡がそれを聞いて「今いったように、我々への忠義ならば、恥辱を捨てて役目に励むように。最期の供になるよりもはるかに勝る忠義であるはずだ」と色々と諭すと、維平は「この上はお言葉を返すのも恐れ多い。かしこまりました」と受け合つたので、高衡は大いに喜んで「今はもう思い残すことはない。時がくれば最期の用意をしよう」といった。

この時は頼朝(62) をはじめとして御着座になり、諸大名がそれぞれ居並んで見物した。まさしくその時、高衡が大(63) 声で「日本一の武勇の者、樋爪高衡の首を、伊達冠者高継という武者が討ち取るのをごらんあれ」といい終え、左の脇腹に刀を突き立て、右の方へ一文字に引き回し、刀を抜いて取り直すと、自ら首に押し当てて、半ば引き斬り、刀を捨て、左右の手で我が首をまつすぐに直して「さあさあ、

高継よ、討て」というやいなや、高継は刀を振り上げ、両手で力を入れて斬ったが、傷口からそれたところに当たって斬り損じたので、高衡が声をかけて「刀を両手で持ったのでし損じたのだ。片手打ちで刀を前に引け。間違いない素直にやれ」と教え終り、傷口を引き開けて待った。高継が、今度は教わったように片手打ちにして、刀を前に引いたところ、あえなく首が前に落ち、それを高衡は自身でかき抱いて倒れた。惜しむべき命である。

その時、文治五年六月六日、鎮守府將軍秀衡の五男、樋爪五郎高衡二十四歳、ついに屍は厨川の土となったが、その名は天下にとどろいた。多くの武士たちがそれぞれ大いに感動し、誉め称えた。義盛がその首級を包み、伊達冠者に持たせて、御前に差し上げると、頼朝もしばらく落涙なされた。このようにして、その首級を、首のない胴体に添えて高継にお与えになると、すぐに平泉に送って、秀衡、泰衡など、兩人の墓に並べて埋めた「云々」。

鎌倉殿<sup>63</sup>は由利八郎維平を御前近くに召して「高継はいまだ幼年なので、お前は六郡を思うままに采配しなさい。次に兩州ともに去年から兵乱のために人民がことごとく困窮しているだろうから、今年と来年は兩國の年貢を許してやるように。そのほかはこれまでの先例と同じように、お

前がよいように取り計らいなさい」とお命じになった。

だからこそ、由利八郎維平は伊達冠者高継の執権となった。後年は片倉というところに住んだことよって、片倉氏と改名して、頼朝卿の御代から以来六百年、今に続いて、伊達家の後見である「内輪でいわれていることには、武則真人<sup>64</sup>から八百年来、補佐の重臣である。だからこの片倉氏と中国地方の吉川氏、両家は御当家にやってきて、代々御普請のお手伝いを勤めている。そのみならず、靈廟に灯籠を献上さしあげること、まことに立派な次第である。灯籠の書付にも、「仙台少將綱村の後見、片倉小十郎、本名由利長重これを献ずる」とある。だから今の片倉氏は由利八郎維平の子孫であること、また竹に雀は藤原秀衡の家紋である、云々」。

そもそも由利氏は出羽の国由利郡がはじまりという。

### 【17】おにへぐぐや

幣碁<sup>へび</sup>というものがある。その草の幹に石菖<sup>い、わあやあいかしわ</sup>、巻<sup>まき</sup>柏<sup>かしわ</sup>などを植え、また石斛<sup>せきこく</sup>、風蘭、紐蘭も植える。その草が津軽の山の川、また秋田の旭川の水上に流れているのをみた。幣碁の葉はみていないが、貫首<sup>65</sup>などの類だろう。《和訓栞》に

次のようにある。

へご、抄羅<sup>(66)</sup>であるという。また鬼へごということがある。薩摩の西の遠島佐多、また屋久島に繁殖する。鳳尾蕉<sup>(ソテツ)</sup>に似た草である。薩摩の習慣で、シダに似て大きいことをもって、おにへごと呼ぶという。ある説に、比叡山横川の谷にもあるという。○肥後で、ふんどしをへごという。長崎で、べごという。土佐でふこめと呼ぶという。

### 【18】むろちぢぐさ

むろちぢぐさを、津軽、秋田では、とどという〔三河の国のとどぐさ、漢名を金蕎麥、銀蕎麥といい、仙台で蚤の舟という方言がある。それは羊蹄<sup>(72)</sup>の葉に似ている〕。この草で薙を織つて、とどむしろといい、稲わらで編んだ薙を、戯れで嫁薙<sup>(73)</sup>などという村がある。その草の様子は茅<sup>(74)</sup>に似ていて葉が厚く、色は薄緑色である。薙になるという事で、むろちはむしろちぢぐさの縮まったものであろうか。また、檉<sup>(75)</sup>の木、檉<sup>(76)</sup>などという類だろうか。

この草の夏刈つたのを使い、さまざまに交差させて編んで、奥蝦夷人の婦人たちはかだま<sup>(77)</sup>のようなものを作っている。

その名前を、彼らの言葉でリテンギという。松前ではこれを蝦夷小出<sup>(78)</sup>という。小出<sup>(79)</sup>というものはほかにある。木防已<sup>(80)</sup>を使つて編み、または山葡萄<sup>(81)</sup>の皮で作り、または藁でも編むものである。腰につけて色々に入れ、菜を摘むにも使うので、腰助<sup>(82)</sup>の意味から来ているのだろうか。

この小出のけばだつた毛を取つて、妊婦に飲ませれば、非常に安産しやすいといつて、松前でこういう事をする。また津軽の海辺には、松前出帆の時の船切手「切手も関手形もみな券である。切手形の事である」というものに朱印を捺しているものがある。これを出判<sup>(83)</sup>。「出る事をデハル」というのは方言のようにとれる」という。その出判をもらつておいて、これを飲ませる。松前は子出<sup>(84)</sup>、津軽は出判の意味に基づく。また、仙台の村々で、正月の初御判紙<sup>(85)</sup>というものに「原之町通大原急御用」と書いたものを買つておいて、これを細かくきざんで飲むと、その効果があるといつて、今ももつぱらおこなつている。

私が松前にいた時分、春の頃、西磯の江差に行く事があつた折に、文字の方様<sup>(86)</sup>からリテンギをいただいた。その物に添えてへ帰る時は花をしごき取つて入れて贈つてくれるでしょうね。あなたが旅ゆく春の山を踏んでという和歌があつたので、そのお使いの手紙になぞらえて、へ帰る時は花をし

ごき取って入れて贈りましょう。あなたが大切になさっている花の籠に」とお返し申し上げた時から、二十年が過ぎた。もはや文子の方様も、年老いてお亡くなりになったとのことだ。

### 【19】ゆきのみやしろ

陸奥の毛布の里に、輓<sup>ゆき</sup>(76)の神社がある。近頃まで非常に古い輓をかけていたと伝えられている。これは田村麻呂がお納めになったともいわれている。《四季草》の春草の下巻に、「神社に天皇からの御咎めがあったときは、看督長<sup>かどのみか</sup>(77)が輓をその神社にかける事、というのは、胡籐<sup>ことう</sup>(78)の事を輓といったものである」と平貞丈<sup>(79)</sup>はいつている。ここは御咎めがあった御社なのだろうか。あるいは、坂上田村麻呂の輓を神として祭っている御社なのだろうか。

### 【20】むろの木

世間でむろの木と呼ぶものは、よその国では非常に珍しいものであるが、陸奥、出羽では特に多い。その土地の人はむろともいうし、もろともいう。秋田郡杜良<sup>もりよし</sup>の嶽<sup>たけ</sup>(「秋田の山ともいう」)などに生えているのは、白を造るために用いる木で峰の林をなしている。これをもろみという。これは蝦夷檜にや

や似ているが、大いに異なっている。《倭名抄》<sup>(80)</sup>に、「檜<sup>むろのき</sup>。《爾雅》<sup>(81)</sup>の註にいうことには、檜の別名は河柳(「字音は勅貞の反切、和名むろ」)とある。

《玉勝間》三の巻には次のようにある。

むろの木について、田中道麿<sup>(82)</sup>は次のようにいつた。「万葉の歌にある室の木というものは、今もどこにでも多くあるものである。美濃の不破郡多芸郡<sup>たぎ</sup>などで、ひむろとも、ひもろ杉ともいい、伊勢の員弁郡桑名郡のあたりで、たちむろ、はいむろといい、尾張の羽栗郡でねずむろとも、べぼの木とも、むろともいう。総じて山に多い木で、地に這うものと、高く立つものと二種類あつて、這う方には大木はないが、立つ方には大きいものも多い。柏木<sup>ひばき</sup><sup>(83)</sup>という木に似ていて、また、杉にも似ている。二種類とも、実が多くなる」。

この、ひむろとも、ひもろ杉とも美濃でいうもの、伊勢のたちむろ、はいむろ、尾張のねずむろ、べぼの木と、その葉はみな同じようにみえるが、大いに異なる。ひむろは庭に植え、石に植えてみるものである。葉はむろの木を非常に小さくしたようなものである。むろの木より葉は柔らかい。

べぼうの木は三河の額田郡、設楽郡でべぼうといい、また、ねずさし、ねずみさしともいって、萎えて伏すものと立ち上がって生えるものと二種類である。また出羽の浜辺の砂山などに生える事がある。同じ木であるが、這う方が多い。海辺に生えて潮風に吹かれるためだろうか、柔らかく葉の色が変わっていて、実は多い。三河で鼠避けにこの葉をさすので、ねずみさし、ねずさしの名がある。なるほど、針のように尖った葉である。立ち上がって生えるねずみさしの根は白檀<sup>(84)</sup>にやや似ていて、表面がなめらかでその香りがとてもよいので、土地の人は和檀といつて、それを用いて身に帯びる装飾品などを作るものがある。

むろの木とひむろの木は異なる。また、ねずむろとは、ねずみさしの木もむろのたぐいだという意味合いの言葉であるだけだ。べぼうは人をさすという意味で、それを牛の角になぞらえたもので、べぼうとは牛の鳴く声である。秋田一帯で牛をべここというのも、べえと鳴くので例の口癖の「文字をつけてべこ、または、べここというようなものだ。

むろの木、ひむろ、ねずむろは、同じものとして語るべきでない。これらの木は、三種類の別の木である。折って比べてよく見分けるべきものである。

## 【21】菅大臣みかたの像

出羽の国の山本郡檜山の天神といつて、多賀谷の館に伝わる菅大臣<sup>(85)</sup>の神像がある。それは菅大臣が自らお画きになったという《本朝画史》<sup>(86)</sup>にいうことには、菅丞相は寛平・昌泰の朝廷に仕え、天下の大学者になられた。亡くなって靈魂が残り、正一位太上天臣の官位を授けられ、天満自在天神と呼ばれた。あちこちで社殿が建てられ、世間に自画像と称するものがある。筆づかいは並のものではなく、威嚴のある様子は尊ぶべきである。その筆跡はおそらく北野東向の観音寺<sup>(87)</sup>、及び、洛東<sup>(88)</sup>の高台寺<sup>(89)</sup>にある。また、摂津の国の上宮の神社にもあり、これを納めている。それが真筆であることは疑いないという。

秘めに秘めて、広げてみた人もいなかったのを、いつの頃だろうか、あるときの当主が「自分は多賀谷の家に生まれたのだから、いかに秘められた尊い神様でいらっしやるとしても、精進潔斎をして身も清らかになり、清浄な場所に行つて拝み申し上げれば、どうして道真公の神霊のたたりがあるうか」と、入浴し、清潔な衣服を身につけて出発し、霧山の古城（応永のはじめ、阿陪家がこの城を作ったとのこと）という高い場所に登った。

十月の枯れた草の上にとてもきれいな筵を敷かせて、この

巻いてある神像を半分ほど開かれると、風がさつと吹きおろし、木の葉がはらりと散りかかったちようどその時、多賀谷の館の家屋すべてから火の手が上がった。さらに風は激しくなり、煙がますます高く吹き上るのを、人々がみて驚き、ほら、館が火事だと騒ぎ立てたので、主人も落葉をのせたまま神像を急いで巻きおさめ、あわてふために多賀谷の館に急いで入られると、火事の騒ぎはまったくなく、何の異状もなかった。

騒ぎ立てた多くの人々は、屋根に上つてみていぶかしく思い、古城山にも人をやって、上らせてみせたところ、少しも煙の様子もみえないので、その旨を帰ってきて申し上げると、「不思議な事だ。これは神がなさつた事で、この神像を人にみせてはならないため、あのようなお示しがあつたのだろうかと」と、自身の間違いを反省されて、額ずいて恐縮されたというのだ。

この神像は木の葉が舞い込んだまま巻かれて、包みの上から拝み申し上げる事になつていふという。毎年正月十一日は連歌の行事がある。北野の能楽院から、その連歌の奉納をしている。いつも願主の発句は「何々の宿の梅」とする事がならわしとなつている。

不思議な事柄は《玉勝間》七の巻、伊勢の大明神が仏を嫌

われる事のくだりにも、次のような話が載っている。

《台記》<sup>(90)</sup>に、次のようなことが書かれている。天養二年三月七日、左馬権頭顕定が来ていったことには、左大将雅定は伊勢の勅使<sup>(91)</sup>で、精進の間よそへ行つていとはいえ、衣裳や調度などは、なお中院<sup>(92)</sup>の屋敷にあり、やはり仏教の經典などを家の中に置かなかつた。そうする間に、中院の寢殿に煙があり「この煙は屋根の上に見え、隣の集落が驚いた」、火事の事が伝えられ、驚いて天井を開け、これを見ると、絵像の仏五体に色旗等があり、これらのものを門の外に出すと、この後、煙は散つてなくなつた。

よく似た恐れ多い話である。

## 【22】 ちやんぐ

へこさを吹けば曇るだろうから、みちのくの蝦夷の人にみせてくれるな、秋の夜の月を〈<sup>(93)</sup>と詠んだ歌があるので、こさは木貝「出羽、陸奥で桐の木で法螺の短いような物を作り、風呂屋、または人足を呼び、あれこれの知らせに吹く」の事であるとか、また胡茄<sup>(94)</sup>の事であるなど、さまざまにいわれている。

《芳野拾遺物語》<sup>(95)</sup>には、次のようにある。

登俱法師は左馬ノ介の養子である。時々やってきて仏の教理などを語つてから、音楽などの話をはじめた。若い時から琵琶を習っているが、未熟な腕前でうまく演奏できなかった。けれども、おこたることなく練習に励んでいた。自分で、自分一人で楽しむ程度の技術は身に付けたという。胡国<sup>(96)</sup>では、胡沙<sup>(97)</sup>といつて、草木も生えない砂漠が多くある。その土地の者は、月の夜になると、友を誘つてそこへ行き、馬に乗りながらも琵琶を弾いたという。その音色は強い風が吹くようで、たいそう離れたところまで聞こえるという。とても趣がある云々。

登俱法師も古い時代からある話をいい伝えて語つたのだろう。その胡国は蝦夷のことをいっているのではなく、中国のことであろう。そんな話などが古い時代からあるので、このような歌も詠まれたのだろう。

私は沙王余魚<sup>(98)</sup>「東蝦夷にオシャマンベがある。オタは沙<sup>すな</sup>のことをいい、シャマンベとは魚のカレイである。山の雪が消える頃、残雪の形がカレイにみえ、それで浦の名前になつたという」というコタン<sup>(99)</sup>のアイヌに「お前に質問したい」

と、あれこれと尋ねた中に「こさという吹くものはあるか」と質問すると「いかにも、こさは吹くものだ」と答えた。「みたい」というと、取つて来た。それは生馬<sup>(99)</sup>という草の根であった。「これは生馬ではないか」というと「生馬だ。同じ生馬でも異なるところがある。こさは吹くが、生馬は吹かない。生馬は縦筋がある。こさは横筋があつて、地中の白い根がとても多く、かみ砕けば渋み強い。その汁を潮に吹いて小さな波を鎮め、鮑を突くのは、別の浦の漁師が海に油を投じると同じことだ」という。また漁の時に風が激しければ、風に向かつて吹くことがあるという。だから、こさは吹くものであるから、笛の類ではない事を知つた。

吹くといつているからと笛を想起し、木貝でさえ胡座<sup>(100)</sup>笛などと呼ぶのは、風流人が根拠もなく名づけておこなつたことである。本来はこさを吹けば波風も鎮まるものであるのに、歌の意味では「風が起こり、雲が立ち、月の邪魔をするだろう」または「こさを吹けば、月がもしや曇る事もあるだろうか」ととれる。

生馬の蔓は蘿麻<sup>(10)</sup>に似ているが、大いに異なる。漢名は牛蒡菜というそうだが、はつきりとはわからない。こさは同じ葛の根であるが雌雄のように違うものであるうか。

糠部郡田名部の大畑の浦山には生馬がとても多い。飢饉の

年はこの草の根を掘って食料として食べ、浦の人々はみな命をつないだ。一般にここでは、こき、こさづるといふ。その頃、小本新右衛門尚方という南部の藩士が、これを嘆きみながら、戯れに詠んだ歌へひどいことだ。蝦夷が吹くという笛のことではない、こさという草の根のみを食べるといふのは。

さらに調べ、考える必要があるものである。

### 〔23〕はたつもり

近江、美濃、伊勢、尾張などで、はたつもり<sup>(92)</sup>「一般に令法<sup>りよほう</sup>という。歌に詠まれるはたつもりである。漢名を黄連茶というものだろうか」を食料とし、北国をはじめ、出羽、陸奥ではがさ「花屋にある箱根うつきというものに似ていて、紫色の花が咲く。箱根うつきを出羽ではこくうつきという。がさの漢名は金帯花というものと同じだろうか」の葉を食べ、三河、遠江では木槿<sup>むぎ</sup><sup>(93)</sup>、藤曼の若葉を食べる事がある。陸奥では、こさの根を食べ、信濃の筑摩<sup>はたしな</sup>の埴科<sup>はたしな</sup>のあたりではだつまという草「漢名を玉耗花<sup>たまこう</sup>という」と《月令広義》<sup>(94)</sup>にある。花屋では松虫草、またはりんぼううきくという」を食べる。

だつまは、達磨大師に似ているのでその名がある。それを、だるま菊と訛<sup>まが</sup>つていうこともある。信濃にとても多く、別の土地にもあるが、出羽、陸奥ではあまりない。この草を食べ

た時、信濃の人がへありがたいことだ。達磨大師が現れて、中に米<sup>ほこ</sup><sup>(95)</sup>も見え隠れしている」と戯れ歌を詠んだとのことである。津軽の宇鉄の帯嶋に玉耗が少しある。

### 〔24〕おだしい事

出羽の国の言葉で、特に秋田に多いものの中に「おだしい事ながら」というのがある。それは、あまりに出過ぎた事にも、強引な事にも、同情するような折にも使う。《落窪物語》<sup>(96)</sup>に「券を持つている人のほかに知る人もいないとわかるとおだしく(安心に)思つて」などであるのが知られている。意味は多少変わっているが、とても古風な言葉である。

### 〔25〕えだがみ

津軽の目谷の沢「メヤはアイヌ語だろうか。松前の西である江差の港近くに目屋<sup>めや</sup>というところがある」にいる人が、親を親神<sup>おやがみ</sup>、伯父を親の枝神<sup>えだがみ</sup>だといった。《倭訓栞》に「儀式帳<sup>(97)</sup>に枝神とあり、貞観符<sup>(98)</sup>に裔神とも書いている。いわゆる末社である」という記述がある。親を親神といい、伯父を枝神というのも、いわれがある古い言葉なのだろうか。非常に珍しいものである。

## 【26】きのみやしうじん

ある本に「近江の国滋賀郡の人は、季忌宮精進といつて、毎年、冬十一月二十三日にこれを祭る時、煮炊きした物を飲食せず、集まつて祭れば、火災を免れるという。四の宮の神主がこれを語り継いでいるだけで、今この事は絶えている」とのことが書かれている。陸奥の津軽に、きのみやといつてその祠があちこちにあり、愛宕の神<sup>(19)</sup>と同じようにいっている。また、出羽で、きのみやを毎月二十四日に祭つて、日が暮れるまで酒を飲まず、精進する。また、日暮れを待ちかね、星解<sup>ほしあひ</sup>という事をして酒を飲む人がいる。

## 【27】ななくらやま

出羽の国秋田郡阿仁の地区に七倉山と菅大臣の神社の杜があり、上津野川「今は鹿角郡にあつて、その源は陸奥の毛馬内である」を境として隔たっている。この天神は菅神ではない。国常立、国狭槌、豊斟淳、泥土煮、沙土煮、大戸道、大戸辺、面足、惶根、伊弉諾、伊弉冊、<sup>(10)</sup>このような七代の神をお祭り申し上げるといふ。神社の御前には、「天神宮」と記された、悦山和尚の筆による額がかげられている。

推察すると、貞享元禄の頃までは、菅大臣の御霊を遷した神社で、ただ天満天神とお呼び申し上げていたのではないか。

能代湊の住吉神社の別当、里鷲<sup>(11)</sup>が比内の大館から帰る日記があり、名を《山ふところ》という。それは父の桂葉<sup>(12)</sup>へのみやげとして書いたので、懐橘の故事<sup>(13)</sup>をひいた。その日記の中で、七倉川を渡るくだりに、「冬枯れの木々の中から菅神社がこうこうとみえた」とある。本当に七代の神ならば、里鷲はどうして菅神社と書いたのであろうか。

ある人がいうことには、昔宮野某という人が、こころ広く学び、その上、山崎家の神学者で弟子も非常に多かつた。その人の弟子などが、七座天神の縁起を書いたものだろうかという。その縁起に、鼠袋というくだりがあり、また蚤のいない猫のくだりもある。猫に蚤がないというのは七倉の辺りだけでなく、陸奥でもあちこちである。別の国にもあるという。津軽の土屋の浦から平内の小湊の辺り、また、南部の田名部の浦々は、みな猫に蚤がない。大きい鼠には特に蚤が集まる。

七倉というのも、あちこちに多い名前である。阿仁に近い小阿仁というところにも七倉山があり、天神の神社もある。大阿仁の七倉天神は、阿部家の寄付など城介実季が修理を加えられたことである。また、小阿仁の七倉天神は嘉成右馬頭<sup>(14)</sup>が祭られたものである。いずれも、毎年三月二十五日に祭りをとりおこない、にぎわう。阿倍家は連歌の神様と

して菅大臣を特に祈り祭っている。松前の下国家も安倍家の流れで、その領地である箱館の東、茂辺地〔本当の名はボンペツ。小川を意味するアイヌ語〕というところに、厳かな天神の神社を建てた。そこには下国氏の先祖から寄付されたものが多い。

【28】 こしぶな

陸奥の北上川の舟渡りをしたとき「こしぶなはいくら」という人がいた。越船賃こしふねぢんの意味だろうかと思つたが、船賃でなくともそういい、腰脚こしあしの事であつた。その辺の胆沢郡の人は、腰に提げた銭もそのようにいい、鮒の形に銭を鑄造する事があるともいう。また、三河の国賀茂郡拳母こらものあたりの人、舟銭をふなちこというのは、舟賃子ふねぢこという事だろうか。

【29】 たねまきぎやうら

雪がようやく消える頃、辛夷こぶしの花が咲くのを、出羽では田耕桜たうちざくらといつて、その頃田を打つ。苗代の種を蒔く頃、よその国でいう彼岸桜の花が咲くので、それを種まき桜たねまきざくらといい、また吉野桜などともいう。彼岸桜にも二、三種類ある。甲斐の国都留郡の山路で尋ねたところ、柴桜だといつていた。その国その国、その土地その土地で名前が変わるだけでなく、

花にもわずかな違いがある。

また、猩々袴(16)という草がある。その漢名は春雪紅とかいう。これを秋田の比内の扇田で、田打菊たうちきくという。また、時鳥を「しでのたおさ」と呼ぶのは風流な言葉であるが、それを田植鳥たうちどりというところがある。津軽では五月鳥ごごとりというところがある。それはみな、花を見、鳥の声を聞いて、その季節その季節を知り、田を耕作することから生まれたもので、それこそ、暦がなかつた古い時代の風習が残つたものである。

【30】 よてべり【よてべりともうら】

陸奥の南部で、いがの中にある三つの栗の中央の平栗よてを末子栗よてという。《倭訓栞》には次のようにある。

てこは、木槌、あるいは木槓の読み方である。あるいは手木てこと書く。また、鉄槌、櫛槌などという。○万葉集に手児てこと書いてあるのは、年下の幼児てこということと同じである。一説に弟である子を指すのは、てこの意味からである。古事記には、兄子てこ、弟子てこをならべて書いてある。よては、武蔵、下総で末子よてという。南部ではよてこという。○備中のあたりの俗語に、強いていふことの言葉に、てこという。

よてぐりも末子栗であつて、よてぐりなのであろう。

【31】こがねのもじのそめがみ

世間で、紺紙金泥<sup>(17)</sup>というものがあり、陸奥にとりわけ多い。平泉の経蔵<sup>(18)</sup>には紺紙金銀泥<sup>(19)</sup>の經典「婆粉紙といつて黄色の紙の梵本<sup>(19)</sup>」折本<sup>(20)</sup>の事」を渡す。宋代の本が多い」があり、中国にはないものではないだろうか。

《倭訓栞》には次のように書いている。

でい云々。金銀などにいうのは泥の音読みである。《皇明文則》<sup>(12)</sup>に「宜徳<sup>(12)</sup>年間、かつて人を倭国まで遣わし、泥金画漆の法を受け継ぎ、そして帰つた」という記述がある。

その技法は倭国の方が優れていた。

【32】あぐりこぎつね

信濃、越後、出羽、陸奥などに、あぐり子、またはおあぐりという女性の名前がある。それは女の子がたくさん生まれ、女の子に飽きる「秋田、津軽の言葉で、溢れることをあぐる」といふという意味で、そのようにいう。こんなふうに「あ

ぐりこ」と末の女の子に名づけければ、今度は必ず男の子が生まれるという先例があつたという。出羽の雄勝郡には、狐の名前にさえ、あぐりこ「杉宮の野の宮、また役内にいる」というのがある。

【33】でんがく

田楽の芸能は、昔は多かつたとのことである。《倭訓栞》には、次のようにある。

田楽について。《洛陽田楽記》<sup>(123)</sup>に、永長元年の夏、洛陽(京都)で大いに田楽の行事があり、はじめ村里から、公卿に及ぶ、という記述がある。高足<sup>(124)</sup>、腰鼓<sup>(125)</sup>、銅鉞子<sup>(126)</sup>、編木<sup>(127)</sup>等の芸がある。また、小鼓がある。田野の音曲という意味であろう。ある説に、神楽<sup>(128)</sup>を半分に分けて申楽<sup>(129)</sup>とし、申楽を削つて田楽とした、ともいう。今、信濃の佐久郡志賀村に田楽屋敷があり、常陸の久慈郡金砂山の神事に田楽がある。○世間で、豆腐で作つたものを田楽というのは、田楽法師<sup>(30)</sup>が竿に上つて踊る姿に似ていることからその名がついたためだという。宮中で煤払いに用いられる。

昔、日枝山<sup>(13)</sup>からはじまって、田楽の芸能はあちこちに  
ある。《太平記》にも新座、本座の田楽の事が書かれている。  
また、拍子が特に難しい芸能である。陸奥の中尊寺は「四月  
八日」五拍子、平泉は「正月二十日、摩陀羅神祭」七拍子、  
小迫<sup>(14)</sup>は「三月三日、白山社祭」十五拍子である。今はいずれ  
も高足がなく、胡桃の木の編み笠を大きく作って被り、衣装  
を着て、腰鼓を打つものもあり、編木<sup>(15)</sup>を打ち鳴らす芸もある。  
古い時代の芸能と変わり、所作はみな崩れたが、ただ田楽の  
様式のみが残った。田楽は田舞<sup>(16)</sup>の類だろうか。

また、三河の国の挙母の辺り、上山、渋川などの村々では、  
田植えの頃、説教<sup>(17)</sup>「釈教ともいうとのこと」を謡い、舞い、  
編木<sup>(18)</sup>をすり、大勢集まって歩く。それは、田植え女の辛労を  
なぐさめるためとも、また、御年の神<sup>(19)</sup>を祭るためともい  
う。この芸能を編木<sup>(20)</sup>という。その起源は三井寺で、昔はゆか  
りがあったという事で、象牙のささらが家に伝わっている。  
長柄の日傘に中間<sup>(21)</sup>がたくさん行列を作り、説教を謡い、ささ  
らの拍子や笛の拍子も風流に、あぜ道を踏み歩いたのも昔の  
話で、近い時代には小歌を唄い、今は浄瑠璃に移り変わって、  
さなぶり「田植えが終わって七日ほども休むことをいう」の  
頃、村々を回って三味線を弾き歩く事となった。

### 【34】善知鳥のみやしる

《烹雑の記》<sup>(35)</sup>「滝沢馬琴解釈・編集」多湊<sup>(36)</sup>ぶりのく、だり  
には、次のようにある。

佐渡はさわどの中間を省略したものである。「さ」は多  
いという意味である。「と」はみなとの上の部分を省略し  
たものである、云々。佐渡の国、雑太郡、相川の鎮守は  
善知鳥<sup>(37)</sup>大明神と呼ばれる「祠官市橋撰津」。神明社、春日  
神社の両社が、おなじ場所に並んで立っている。これを相  
川の三社と呼んでいる。土地の人の一説によると、善知鳥  
の神社は周の景王の王女を祭っているという「由来がひど  
く怪しい話のため、記録に値しない」。これは根拠のない  
話だろう。仮に異国の王女を祭ることがあったとしても、  
どうして神明、春日の両社をその左右に置いてお祭りする  
道理があるだろうか。祭る神こそ定かではないが、善知鳥  
は「突き出た岬」というのと同じだ。陸奥の方言で、海辺  
の突き出た岬をうとうとうという。外ヶ浜にいる水鳥はくちば  
しが太く、目の下の肉付きに高く出ている部分がある。ゆ  
えに、この鳥をもうとうとうという。この鳥のくちばしにたと  
え（以下欠）。

- (1) 山賤 漁師やきこりなど、山中に生活する人。
- (2) 新勅撰集 新勅撰和歌集。藤原定家が撰し、鎌倉時代に成立した、九番目の勅撰和歌集。
- (3) 久保之取蛇尾 入江昌喜著。江戸後期に書かれた考証随筆。
- (4) 八雲御抄 鎌倉初期の歌学書。
- (5) 色葉和難 難解な歌語の注釈書。成立年代不詳。
- (6) 釈阿 平安後期の歌人、藤原俊成の法名。
- (7) 和歌所御会 勅撰集の撰集をつかさどった役所の歌会。
- (8) 河社 契沖著。江戸中期に書かれた学問的随筆。
- (9) 新古今 新古今和歌集。鎌倉初期に成立した八番目の勅撰和歌集。
- (10) 入道関白 入道前関白。藤原兼実。
- (11) 袖中抄 顕照著の歌学書。
- (12) 顕照 平安末・鎌倉初期の歌人、歌学者。
- (13) 和名抄 和名類聚抄（わみやうるいじゅうしよう）。平安前期の漢和辞典。
- (14) 齊風、甫田の章 中国最古の詩集である《詩経》の章名。
- (15) 孟子尽心の章 儒教の経典《孟子》の中の章名。
- (16) 秘蔵抄 和歌集。凡河内躬恒（おおしこうちのみつね）撰という体裁をとるが、編者未詳。
- (17) そろい 藺（い）の異称。イグサ科の多年草。
- (18) 契沖 江戸前期の国学者、歌人。
- (19) 弁内侍日記 鎌倉中期の日記。
- (20) 新千載和歌集 南北朝時代に成立した、十八番目の勅撰和歌集。
- (21) 南殿 紫宸殿の異称。
- (22) 玉勝間 本居宣長著。江戸後期の随筆。
- (23) 拾遺 拾遺和歌集。平安中期に成立した、三番目の勅撰和歌集。
- (24) 煙霞綺談 西村白鳥輯、林自見校。江戸中期の俗話集。
- (25) 一休和尚の「仏御所様」、太閤秀吉公の「稲荷大明神殿」 奇想天外な相手に手紙を出したとされる逸話の例。
- (26) 真卷 木に竹を張り合わせて作った弓。
- (27) おほまあらこ 編み目の粗いかご。
- (28) 四季草 伊勢貞丈（いせさただけ）著。江戸後期、武家の有職故実を記す。真澄による書写本《斯伎具佐波夫伎夫美》（しぎふさはふきふみ）がある。
- (29) 鎌倉年中行事 海老名季高著。室町幕府の東国統治機関である鎌倉府の行事・儀礼の先例を記録した故実書。

- (30) 鎌倉殿 室町時代、鎌倉府で関東八か国と伊豆・甲斐を支配した足利氏の称。(63)とは別。
- (31) 管領 関東管領の略。室町時代、関東地方の取締りに任じた者。
- (32) 蝸川記 蝸川道標著。戦国時代に書かれた武家故実書。
- (33) 光源院義輝公 足利義輝。室町幕府第十三代将軍。
- (34) 三好筑前守義長 三好長慶。戦国末期の武将。
- (35) 倭訓栞 谷川士清(たにがわことすが)著。江戸後期、五十音順で編まれた日本初の国語辞書。
- (36) 滑石 含水珪酸マグネシウムを主成分とする柔らかい鉱物。
- (37) 石脂 石膏のことか。石膏は硫酸カルシウムと水を成分とする鉱物。
- (38) 日本後紀 平安前期の歴史書。日本書紀、続日本紀につぐ勅撰史書で、六国史の一つ。
- (39) 谷川士清 江戸中期の国学者・神道学者。
- (40) 義貞記 新田義貞の生涯を描いた軍記。室町時代成立。
- (41) 義家朝臣 源義家。平安後期の武将。
- (42) 曾我物語 軍記物語。鎌倉末期か室町前期の成立か。
- (43) 暁台 久村暁台(くむらきょうたい)。江戸中期の俳人。もと尾張藩士。
- (44) 常平通宝 朝鮮、李朝時代に流通した銅錢。裏面に鑄造官庁を意味する「戸」が刻まれている。
- (45) 三国通覧 林子平著。江戸後期の地誌。
- (46) 高星 安東高星(あんどうたかあき)。平安中期の武将。安倍貞任の子。
- (47) 下国家 蠣崎、松前諸家とともに、松前藩の家老をつとめた家。
- (48) 長髓彦 日本神話上の人物。神武天皇東征の時、反抗したとされる大和の国の土豪。
- (49) 安倍比羅夫 飛鳥時代の武将。蝦夷征討におもむいた。
- (50) 貞任 安倍貞任。平安後期の武将。前九年の役で源頼良・義家父子と戦い、敗死。
- (51) 相模入道 鎌倉幕府第十四代執権、北条高時の異称。
- (52) 黒甜瑣語 江戸後期の秋田の文人、人見蕉雨(ひとみしょうう)によつて書かれた随筆。
- (53) 秋田城介実季 秋田実季(あきたさねすえ)。安土桃山から江戸初期の大名。佐竹氏が秋田に転封となるまで、土崎湊(秋田市)を居城とした。
- (54) 大虎杖 タデ科の多年草。
- (55) 籌木 用便の際、落とし紙の代わりに尻を拭う木片。
- (56) 輟耕録 陶宗儀著。元末・明初に書かれた随筆集。

- (57) 尾駁の牧 名馬の産地として歌に詠まれた歌枕。真澄がここを目指した時の日記に《おぶちの牧》がある。
- (58) 泰衡 藤原泰衡。平安末期の陸奥の豪族、藤原秀衡の第二子。
- (59) 吾妻鏡 鎌倉時代の史書。
- (60) 高衡 藤原秀衡の五男。
- (61) 冠者 六位で、無官の人の称。
- (62) 頼朝 源頼朝。原文では二品（にほん）と書かれている。二品は官位の二位の異称で、《吾妻鏡》で頼朝を指す場合に用いられる。
- (63) 鎌倉殿 源頼朝の別称。(30)とは別。
- (64) 武則真人 清原武則。平安中期の出羽の豪族。
- (65) 貫首 貫衆（かんじゅ）。ヤブソテツの漢名。オシダ科の常緑シダ。
- (66) 抄羅 杪羅（へこ）。ヘゴ科の常緑木生シダ。幹はシダ、ランの培養に用いる。
- (67) 羊蹄 ぎしぎし。タデ科の多年草。
- (68) 茅 ちがや。イネ科の多年草。
- (69) 檉の木、檉檜 杜松（ねず）の古名。ヒノキ科の常緑低木または高木。
- (70) かだま 堅間。目を細かく編んだ竹のかご。

- (71) 小出 コダシ。植物のツルや皮などを使って編んだ籠。
- (72) 木防已 青葛。ツヅラフジ科のつる性落葉低木。
- (73) 山葡萄 やまぶどう。
- (74) 御判紙 印判や花押のある重要な文書料紙。
- (75) 文子の方 松前藩第七代藩主松前資広の側室で、第八代道広の継母。歌に秀で、松前滞在中の真澄と交流した。
- (76) 鞆 昔、矢を入れて背負った、細長い箱型の道具。
- (77) 看督長 平安時代、検非違使庁の下級職員。
- (78) 胡籙 ころく。矢を入れて背に負う武器。
- (79) 平貞丈 伊勢貞丈。《四季草》の著者。
- (80) 倭名抄 和名類聚抄。(13)と同じ。
- (81) 爾雅 じが。中国の字書。漢の学者たちが諸経書の伝注を集録したものといわれる。
- (82) 田中道麿 江戸中期の国学者。本居宣長の門に入り、その才能を愛された。
- (83) 柏木 柏楨（びやくしん）。ヒノキ科の常緑低木なし高木。
- (84) 白檀 ビヤクダンの科の半寄生性常緑高木。強い香りを放ち、仏具などの材に使う。
- (85) 菅大臣 菅原道真。
- (86) 本朝画史 江戸前期の絵画論。狩野永納が父山雪の手

録をもとに編んだもの。

(87) 観音寺 京都にある北野東向観音寺。

(88) 洛東 都の東。

(89) 高台寺 京都府東山区にある寺。

(90) 台記 左大臣藤原頼長著。院政期の漢文日記。

(91) 勅使 勅旨を伝えるために派遣される使者。

(92) 中院 齋宮寮の頭以下の役人の詰所。

(93) こそを吹けばく 原文に記載された歌は《北岡本夫木抄》収録のものとはほぼ同じ。西行作とされるが、細部

や作者に異説が多い。

(94) 胡茄 昔、中国北方の胡国の人の吹く笛。

(95) 芳野拾遺物語 南北朝時代から室町時代の説話集。

(96) 胡国 古代、中国北方の異民族の国。

(97) 胡沙 胡国の砂漠。

(98) コタン アイヌ語で「集落」のこと。

(99) 生馬 ガガイモ科のつる性多年草。

(100) 胡座笛 こそ笛。アイヌが吹いたという笛。胡人が用いる胡茄から連想した空想的産物。

(101) 蘿麻 蘿摩。かがみ。ガガイモの古名。

(102) はたつもり リヨウブの古名。リヨウブ科の落葉小高木。庭木ともされる。

(103) 木槿 アオイ科の落葉低木。生垣や庭木として植栽される。

(104) 月令広義 中国、明代の学者、馮應京著。中国の伝統的な年中行事や儀礼、しきたりを解説。

(105) 米(ぼさつ) 菩薩は米の異称。

(106) 落窪物語 平安時代の物語。作者未詳。

(107) 儀式帳 《皇太神宮儀式帳》と《止由気宮儀式帳》を合わせて呼ぶ。平安時代以降の神社祭祀の記録。

(108) 貞観符 貞観格のことか。詔・勅・太政官符などを官司別に集大成したもの。

(109) 愛宕の神 京都の愛宕神社を中心とし、火伏の神として一般に深く信仰された。

(110) 国常立、国狭槌、豊斟淳、泥土煮、沙土煮、大戸道、大戸辺、面足、惶根、伊弉諾、伊弉册 《古事記》《日本書紀》で天地生成の時に生まれた、神世七代の神。

神名は《日本書紀》での表記に準じている。

(111) 里鶯 能代の八幡・山王両社の別当職をつとめるかわら、北村季吟の門に入り、歌学を学んだ。父桂葉と里鶯を中心とした資料は「桂葉・里鶯父子淳城家文芸資料」として秋田県指定文化財となっている。

(112) 桂葉 里鶯の父。能代の八幡・山王両社別当をつとめ

- (113) た。詩歌俳諧に秀で、著書も多い。  
 懐橘の故事 中国の故事。招かれた先で、母へのみや  
 げに橘を懐に入れた少年の逸話。
- (114) 嘉成右馬頭 安東氏家臣、嘉成右馬頭重盛。
- (115) 腰脚 (こしげに) 脚は銭の異称。巾着や銭入れなど  
 に入れた小銭。
- (116) 狸々袴 ユリ科の多年草。
- (117) 紺紙金泥 紺色に染めた紙に金泥で経文などを書いた  
 もの。金泥は金の粉末を膠水で溶いて顔料としたもの。
- (118) 経蔵 寺院の中で、経典を納めておく蔵。
- (119) 梵本 経典など、梵字で書かれた書物。
- (120) 折本 横に長く継いだ紙を折りたたみ、綴じないで  
 作った本。
- (121) 皇明文則 中国の明の時代の書。慎蒙編。
- (122) 宜徳 明の宣宗時代の年号。
- (123) 洛陽田楽記 平安後期の学者・歌人、大江匡房 (おお  
 えのまさふさ) 著。
- (124) 高足 田楽の芸。十字架のような形の棒の横木に両足  
 をのせて飛びはねる。
- (125) 腰鼓 田楽で用いた鼓の一種。長い紐をつけて腰にか  
 け、両手で打ち鳴らす。
- (126) 銅鈸子 打楽器の一つ。青銅製の円盤二個を両手に  
 持つて打ち合わせる。
- (127) 編木 民俗芸能の楽器の一種。竹の先をこまかく割つ  
 て束ね、刻み目を入れた棒でこすつて音を出す。
- (128) 神楽 神を祭るときに奏する舞楽。
- (129) 申楽 古代から中世に行われた、物まね・歌舞・寸劇・  
 曲芸などの芸能。
- (130) 田楽法師 田楽を舞うのを生業とする法師。
- (131) 日枝山 比叡山。京都府と滋賀県にまたがる山。
- (132) 田舞 古代の儀式舞踊の一種。五穀がよく実るように  
 祈つて神に奉納する歌舞。
- (133) 説教 仏教の教えを節付けしてわかりやすく説いたも  
 の。
- (134) 御年の神 穀物の守護神。
- (135) 烹雉の記 曲亭馬琴著。江戸後期に書かれた随筆。

# 真澄研究 二十四号

令和二年三月二十四日発行

編集・発行

秋田県立博物館

菅江真澄資料センター

〒〇一〇〇二二四

秋田市金足鳩崎字後山五二